

# 新東京国際空港 埋蔵文化財発掘調査報告書 XIV

—一鍬田甚兵衛山西遺跡（空港No.16遺跡）—

平成13年3月

新東京国際空港公団  
財団法人 千葉県文化財センター

# 新東京国際空港

## 埋蔵文化財発掘調査報告書 XIV

— ひとくわだ じんべえ やまにし  
— 銚田甚兵衛山西遺跡（空港No.16遺跡） —





石器集中 2 出土石器

## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第404集として、新東京国際空港公団の新東京国際空港建設事業に伴って実施した香取郡多古町一鉢田甚兵衛山西遺跡（空港No.16遺跡）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代から中・近世の遺構や遺物が数多く出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護・普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

## 凡　　例

- 1 本書は、新東京国際空港予定地内の香取郡多古町一鶴田字甚兵衛山454-14他に所在した一鶴田甚兵衛山西遺跡(空港No16遺跡)の発掘調査報告書で、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第XIV集にあたるものである。
- 2 発掘調査から報告書作成に至る業務は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 3 調査で使用した遺跡のコード番号は347-007である。
- 4 発掘調査は昭和59・63年度に実施し、整理作業は昭和60年・平成11・12年度に実施した。
- 5 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 6 本書は調査部長沼澤 豊、東部調査事務所長三浦和信・折原 繁の指導と助言のもとに、主席研究員宮 重行と空港調査室長鳴田浩司・上席研究員鈴木弘幸と研究員永塚俊司が執筆し、永塚が編集した。本文の執筆分担は以下のとおりである。

宮 重行 第3章 遺構・出土土器、第5章 縄文時代

鳴田浩司 第4章

鈴木弘幸 第3章 遺構

永塚俊司 第1章、第2章、第3章 出土石器、第5章 旧石器時代

- 7 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第2図 新東京国際空港公団発行 1/2,500 新東京国際空港平面図11・12・14・15

第3図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「多古」(NI-54-19-10-2)

「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1)

- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

- 10 本書に収録した遺物及び記録類は、当文化財センターで保管している。

- 11 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から多くのご協力・ご指導をいただいた。

それぞれ記して謝意を表する(順不同)。

千葉県教育庁生涯学習部文化課、成田市教育委員会、新東京国際空港公団の関係者各位

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と成果.....	2
第2節 遺跡の位置と周辺遺跡.....	6
第3節 基本層序と旧地形.....	8
第2章 旧石器時代.....	10
第1節 概要.....	10
第2節 石器集中地点.....	10
1 石器集中1.....	10
2 石器集中2.....	11
第3節 石器集中地点外.....	23
第3章 繩文時代.....	32
第1節 遺構と遺物.....	32
1 竪穴状遺構.....	32
2 ピット群.....	32
3 陷穴.....	34
4 炉穴.....	35
5 土坑.....	35
6 遺構出土の遺物.....	36
第2節 包含層と遺物.....	40
1 包含層.....	40
2 出土土器.....	45
3 出土石器.....	68
第4章 中・近世.....	86
第1節 遺構と遺物.....	86
1 溝.....	86
2 グリッド出土遺物.....	86
第5章 まとめ.....	88
第1節 旧石器時代.....	88
第2節 繩文時代.....	89

## 挿図目次

第1図 グリッド呼称図	2	第28図 竪穴状遺構	33
第2図 調査範囲と周辺地形	3	第29図 ピット群	33
第3図 確認・本調査範囲	4	第30図 陷穴（1）	37
第4図 遺構配置図	5	第31図 陷穴（2）	38
第5図 周辺遺跡	7	第32図 炉穴・土坑	39
第6図 基本層序	9	第33図 遺構出土土器	40
第7図 旧地形の復元	9	第34図 包含層北区 土器出土状況	41
第8図 石器集中地点と集中地点外	10	第35図 グリッド別土器出土状況（1）	42
第9図 石器集中1 出土状況（器種別）と主要石器	11	第36図 グリッド別土器出土状況（2）	43
第10図 石器集中1 出土状況（石材別）と出土石器（1）	12	第37図 グリッド別土器出土状況（3）	44
第11図 石器集中1 出土石器（2）	13	第38図 第I群土器	45
第12図 石器集中2 出土状況（器種別）と主要石器	15	第39図 第II群土器（1）	47
第13図 石器集中2 出土状況（石材別）と接合資料	16	第40図 第II群土器（2）	48
第14図 石器集中2 出土石器（1）	17	第41図 第II群土器（3）	49
第15図 石器集中2 出土石器（2）	18	第42図 第II群土器（4）	50
第16図 石器集中2 出土石器（3）	19	第43図 第II群土器（5）	52
第17図 石器集中2 出土石器（4）	20	第44図 第II群土器（6）	53
第18図 石器集中2 出土石器（5）	21	第45図 第II群土器（7）	54
第19図 石器集中2 出土石器（6）	22	第46図 第III群土器	55
第20図 石器集中地点外1 出土状況と出土石器	24	第47図 第IV群土器	55
第21図 石器集中地点外2 出土状況と出土石器	24	第48図 第V群土器（1）	57
第22図 石器集中地点外3 出土状況と出土石器	25	第49図 第V群土器（2）	58
第23図 石器集中地点外4 出土状況と出土石器	26	第50図 第V群土器（3）	59
第24図 石器集中地点外5 出土状況と出土石器	26	第51図 第V群土器（4）	60
第25図 石器集中地点外6 出土状況と出土石器	27	第52図 第V群土器（5）	62
第26図 石器集中地点外 単独出土石器	28	第53図 第V群土器（6）	63
第27図 繩文時代 遺構配置図	32	第54図 第VI群土器	65
		第55図 第VII群土器	67
		第56図 底部	67
		第57図 上層包含層 遺物出土状況	69・70
		第58図 北集中区 石器出土状況－器種別	71
		第59図 北集中区 出土石器	71
		第60図 北集中区 石器出土状況－石材別	72
		第61図 北集中区 繩群重量別分布図	72
		第62図 南集中区 石器出土状況－器種別	74
		第63図 南集中区 石器出土状況－石材別	75
		第64図 南集中区 出土石器（1）	76

第65図	南集中区 出土石器（2）	77	第70図	南集中区 磚群重量別分布図	82
第66図	南集中区 出土石器（3）	78	第71図	集中区外 出土石器	85
第67図	南集中区 出土石器（4）	79	第72図	出土遺物	86
第68図	南集中区 出土石器（5）	80	第73図	溝状遺構	87
第69図	南集中区 磚群接合状況	81			

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡	6	第8表	北区 石器組成表	68
第2表	石器集中地点1 組成表	29	第9表	南区 石器組成表	73
第3表	石器集中地点2 組成表	29	第10表	磚の大きさ平均値	83
第4表	石器集中地点1 観察表	30	第11表	被熱磚の構成比	83
第5表	石器集中地点2 観察表	30	第12表	北区 石器観察表	84
第6表	石器集中地点外 観察表	31	第13表	南区 石器観察表	84
第7表	縄文土器グリッド別出土状況	40			

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

- 図版1 航空写真  
 図版2 石器集中1 石器集中2  
 図版3 楕円状遺構 ピット群 炉穴  
 図版4 陷穴  
 図版5 炉穴 土坑  
 図版6 縄文包含層 (5A・6Z・7Z区)  
 図版7 縄文晚期包含層 溝状遺構  
 図版8 石器集中1 出土石器  
     石器集中2 出土石器 (1)  
 図版9 石器集中2 出土石器 (2)  
 図版10 石器集中2 出土石器 (3)  
 図版11 石器集中2 出土石器 (4)  
 図版12 石器集中2 出土石器 (5)  
     集中地点外1・2・4・5 出土石器  
 図版13 集中地点外3・6 出土石器  
     グリッド一括資料  
 図版14 遺構出土土器 第I群土器

- 図版15 第II群土器 (1)  
 図版16 第II群土器 (2)  
 図版17 第II群土器 (3)  
 図版18 第II群土器 (4)  
 図版19 第II群土器 (5)  
 図版20 第II群土器 (6)  
 図版21 第III群土器 第IV群土器  
 図版22 第V群土器 (1)  
 図版23 第V群土器 (2)  
 図版24 第V群土器 (3)  
 図版25 第V群土器 (4)  
 図版26 第V群土器 (5)  
 図版27 第VI群土器  
 図版28 第VII群土器  
 図版29 包含層 出土石器 (1)  
 図版30 包含層 出土石器 (2)  
     煙管・留具

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

財団法人千葉県文化財センターでは、新東京国際空港予定地内及び関連事業地内に所在する遺跡について、千葉県教育委員会の指導のもとに、新東京国際空港公団の委託により、昭和51年度から計画的・継続的に発掘調査を実施してきている。また、これらの発掘調査成果の一部は既に報告書として刊行されている。

今回報告する一鍬田甚兵衛山西遺跡（空港No16遺跡）についても、千葉県教育委員会が新東京国際空港公団と遺跡の取り扱いについて慎重に協議した結果、記録保存の措置がとられることになった。そこで、当センターは新東京国際空港公団と発掘調査の実施について調整を行い、新東京国際空港建設事業地内埋蔵文化財調査業務として昭和59・63年度に発掘調査を実施することになった。その後、年度計画に基づき、昭和60年度・平成11・12年度にわたって断続的に整理作業を実施した。各年度毎の実施内容及び担当職員は下記のとおりである。

#### 〔発掘〕

#### 昭和59年度 <1次調査>

新東京国際空港建設事業地内埋蔵文化財調査業務として発掘調査を実施した。

調査対象面積26,000m<sup>2</sup>のうち、本年度は調査区北半部の17,000m<sup>2</sup>について1次調査を実施した（第2・3図）。調査は対象面積の8%にあたる1,360m<sup>2</sup>について確認調査を実施し、上層2,600m<sup>2</sup>、下層700m<sup>2</sup>に対して本調査を実施した。調査期間は、昭和59年10月1日から昭和60年3月20日である。

調査の結果、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の陥穴4基・遺物包含層等を検出した。

#### 発掘調査担当者

調査部長 鈴木道之助

班長 田坂 浩

調査研究員 宮 重行

#### 昭和63年度 <2次調査>

調査対象面積26,000m<sup>2</sup>のうち、本年度は調査区南半部の9,000m<sup>2</sup>について2次調査を実施した（第2・3図）。確認調査は対象面積の8%にあたる720m<sup>2</sup>について実施された。下層の一部は上層本調査後に確認調査を実施した。本調査は、上層4,100m<sup>2</sup>、下層400m<sup>2</sup>に対して実施され、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の陥穴をはじめとする遺構や遺物包含層、中・近世の溝状遺構が調査された。

#### 発掘調査担当者

調査部長 堀部昭夫

班長 矢戸三男

調査研究員 上野純司 部 淳一 森本和男 田形孝一

〔整理〕

昭和60年度

整理作業の内容は、1次調査分の記録整理～復元の一部までである。

調査部長 鈴木道之助

班長 高橋賢一

調査研究員 宮重行 小高春雄 麻生正信

平成11年度

整理期間は平成11年8月1日から平成12年3月31日である。整理作業の内容は、1次調査分の記録整理～復元の一部を除く、1・2次調査分をあわせた記録整理から原稿執筆までである。

調査部長 沼澤 豊

東部調査事務所長 三浦和信

主任研究員 宮重行

空港調査室長 鳴田浩司

研究員 鈴木弘幸

技師 永塚俊司

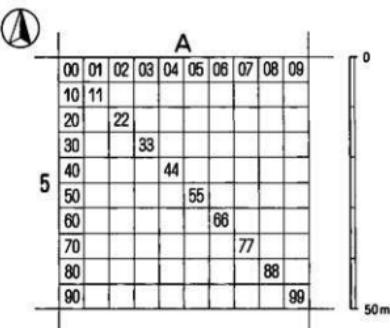
平成12年度

整理作業の内容は、報告書刊行である。

調査部長 沼澤 豊

東部調査事務所長 折原 繁

空港調査室長 鳴田浩司



第1図 グリッド呼称図

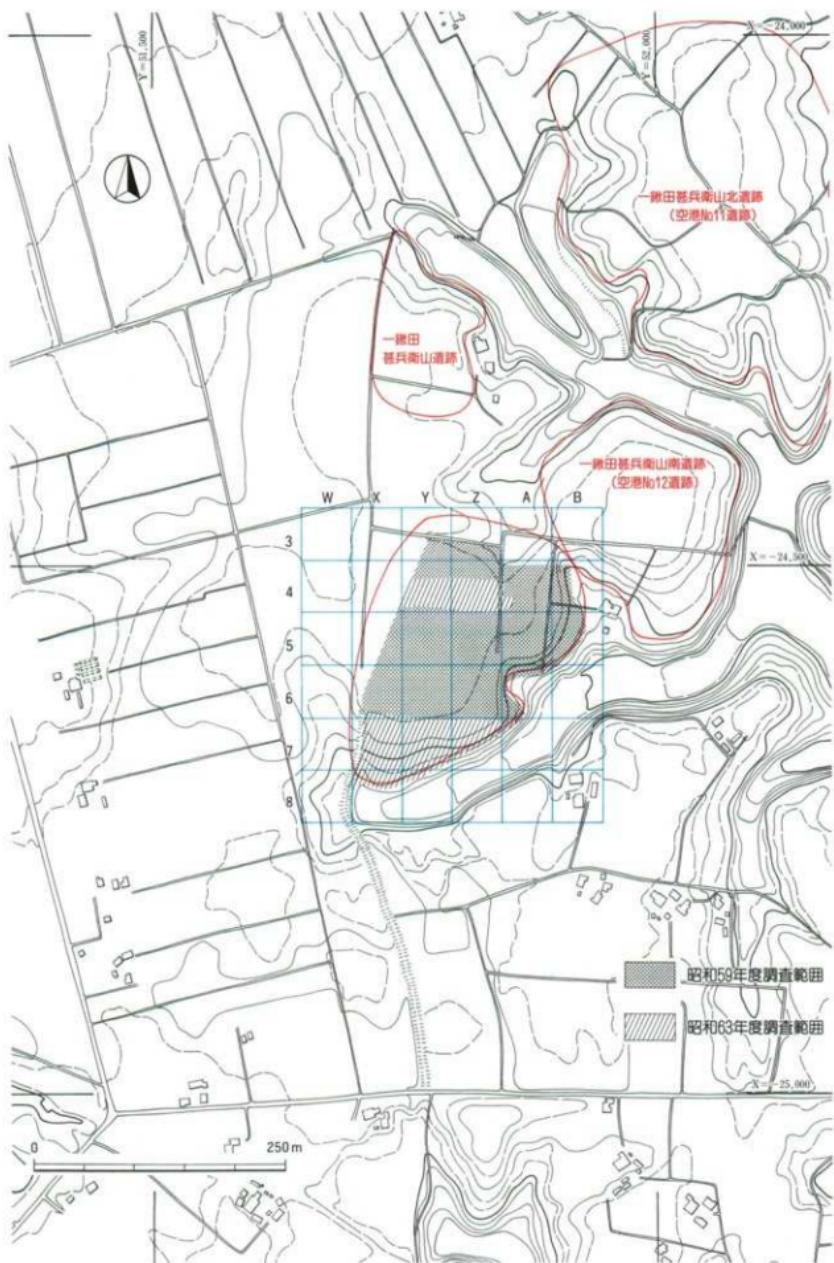
## 2 調査の方法と成果

発掘調査を始めるにあたり、調査対象区域に公共座標に合わせて、50m×50mの大グリッドを設定した。さらに、その大グリッド内を5m×5mに分割し、100個の小グリッドとした。大グリッドは北から南へ0, 1, 2, 3……、西から東へA, B, C……と記号をつけ、小グリッドは北から南へ00, 10, ……, 90、西から東へ00, 01, ……, 09と番号をつけ、これ等を組み合わせて呼称することにした(第1図)。なお、本遺跡の大グリッド名は昭和58年度に発掘調査を実施した一鉢田甚兵衛山南遺跡(空港No12遺跡)のものを基準とした。

旧石器時代は、確認調査に基づいて11か所の確認グリッドの周辺を、本調査範囲として拡張した(第3図)。その結果、遺物のひろがりが認められた複数の石器集中地点を検出することができた。しかし、整理段階で明らかに人為的な加工痕を残さない遺物を除いたため、最終的には、立川ロームX層を中心とした石器集中地点1か所(石器集中1)、立川ロームVI～VII層を中心とした石器集中地点1か所(石器集中2)の2地点のみを石器集中地点として認定した。また、単独あるいはそれに近い地点については石器集中地点外1～6として6地点を抽出した。

縄文時代の遺構は、竪穴状遺構1基、ピット群1基、陥穴8基、炉穴2基、土坑5基を検出し、早期から晩期の遺物包含層は南東側の谷際に沿って大きく南北2地点に広がっていた。

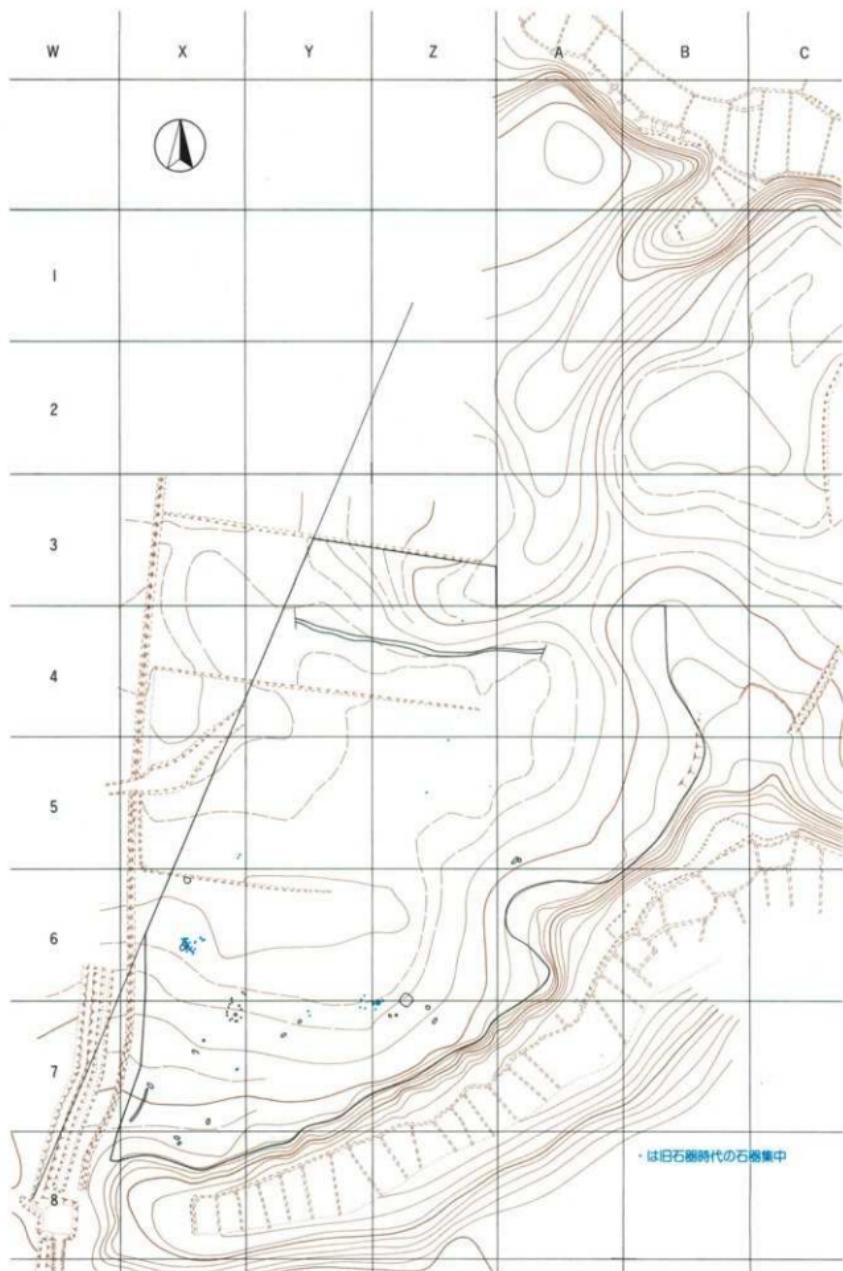
中・近世の遺構は、調査区北端と南端に溝を2条検出したのみである。



第2図 調査範囲と周辺地形



第3図 確認・本調査範囲



第4図 遺構配置図

## 第2節 遺跡の位置と周辺遺跡

一錫田甚兵衛山西遺跡（空港No16遺跡）は千葉県香取郡多古町一錫田字甚兵衛山454-14他に所在する。空港事業地内ではちょうど横風用滑走路（現在事業凍結）の北東突出部にあたり（第5図）、遺跡は九十九里方面へ南流する高谷川の源流域に面する標高約40mの台地上に立地する。高谷川は栗山川本流へ合流し、太平洋へ流れ込んでいる。

空港予定地を中心とする周辺地域は、利根川へ北流する河川と、九十九里方面へ南流する河川の分水界が走り、全体としては比較的広い平坦な台地が広がるが、源流域では特に八つ手状に開析を受けた台地が密集する。遺跡はそのような開析を受けた台地上に立地するのが一般的で、本遺跡も例外ではない。

遺跡の北東には、一錫田甚兵衛山南遺跡（空港No12遺跡）が隣接する<sup>1)</sup>。現在整理中で詳しくは述べられないが、隆起線文土器に伴って有舌尖頭器・尖頭器の製作跡が検出されている。石器群は打製石斧・石錐・削器・有溝石器片等を伴い、土器とともに縄文時代草創期の良好な一括資料として評価される。

小さな谷を挟んで北には、一錫田甚兵衛山遺跡がある<sup>2)</sup>。遺跡範囲は調査対象範囲のみを括っているため、実際の範囲は台地全体に及んでいる可能性が高い。旧石器時代は、ソフトローム中から終末期の剥片ナイフを伴う石器群（第Ia文化層）と、東北頁岩を用いた荒星型彫刻刀形石器と粗粒な石材を用いた大型剥片石器を特徴とする石器群（第Ib文化層）を検出した。縄文時代は撫糸文期の竪穴住居を1軒検出したが、遺物包含層の出土土器は前期後半の浮島・興津式土器を主体とする。

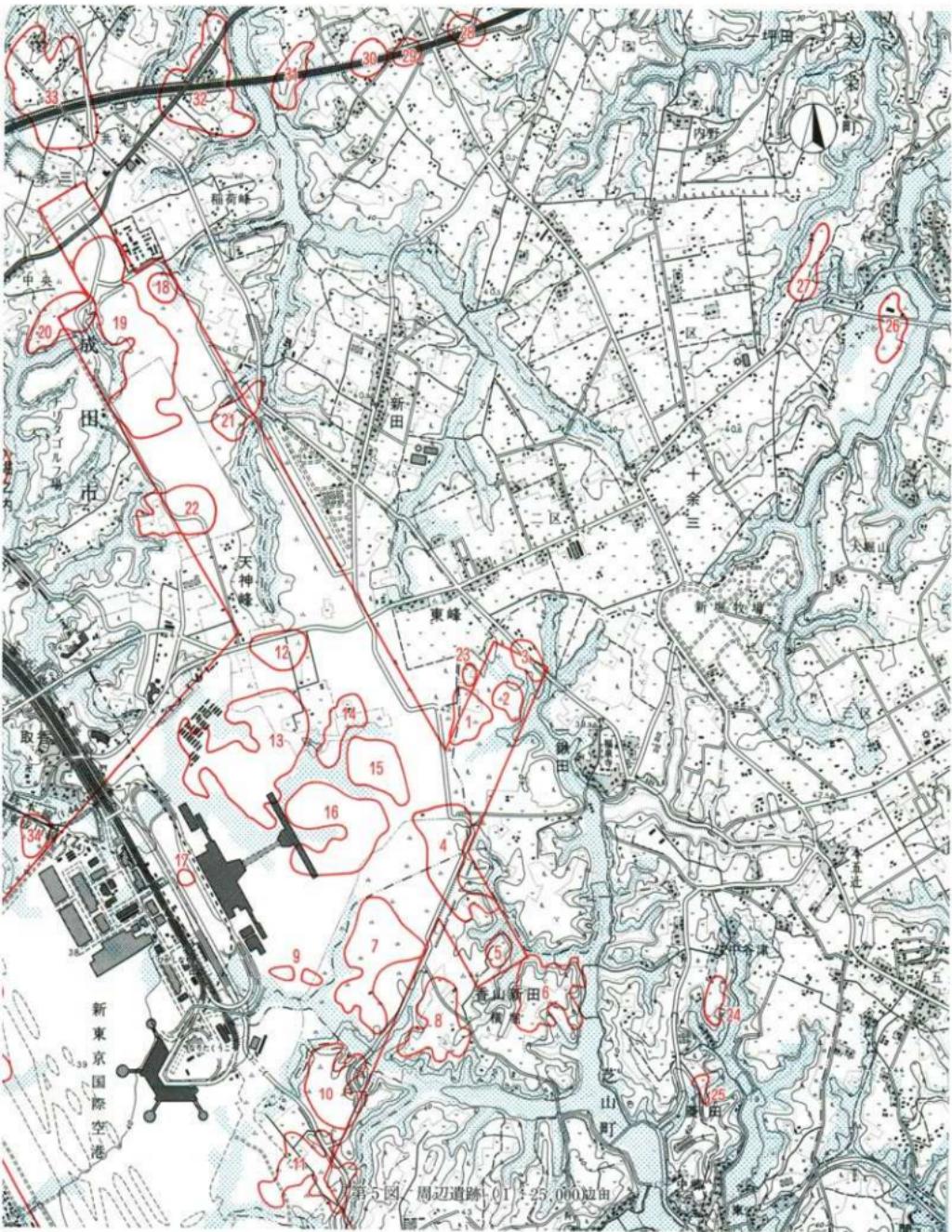
一錫田甚兵衛山南遺跡（空港No12遺跡）の対岸には一錫田甚兵衛山北遺跡（空港No11遺跡）がある<sup>3)</sup>。旧石器時代は、終末期の剥片ナイフを主体とする石器群（第1文化層）と尖頭器を主体とする石器群（第2文化層）が検出された。縄文時代は撫糸文期をはじめとする早・前期を中心とした遺物包含層が検出された。奈良・平安時代には斜面地を含む製鉄関連遺構が広がっており、各工程別の遺構立地について詳細な考察がなされている。

本遺跡を含むこれら4遺跡は同一支谷を取り囲むように遺跡群を形成し、旧石器時代から縄文時代を中心に歴史時代に至るまで、過去の人間行動の一断面を残しているといえよう。

このような遺跡群としてのまとめは、空港予定地内には所々に点在するが、それらについては、すでに刊行された空港予定地内の報告書に詳しいため、そちらを参照していただきたい<sup>4)</sup>。

第1表 周辺の遺跡

空港予定地内の遺跡				空港予定地外の遺跡	
1	一錫田甚兵衛山西遺跡（空港No16遺跡）	13	取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）	23	一錫田甚兵衛山遺跡
2	一錫田甚兵衛山南遺跡（空港No12遺跡）	14	東峰御幸烟西遺跡（空港No61遺跡）	24	菱田梅ノ木遺跡
3	一錫田甚兵衛山北遺跡（空港No11遺跡）	15	東峰御幸烟東遺跡（空港No62遺跡）	25	根切台遺跡
4	香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）	16	古込遺跡（空港No14・55・56遺跡）	26	天神山遺跡
5	香山新田安戸台遺跡（空港No.9遺跡）	17	古込込前遺跡（空港No22遺跡）	27	タラカイII遺跡
6	香山新田念仏面遺跡（空港No.8遺跡）	18	十余三稻荷峰東遺跡（空港No66遺跡）	28	来光台第3遺跡
7	香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）	19	十余三稻荷峰遺跡（空港No67遺跡）	29	来光台第2遺跡
8	香山新田金沢台遺跡（空港No15遺跡）	20	十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）	30	来光台第1遺跡
9	古込朝日台遺跡（空港No13遺跡）	21	天神峰奥之台遺跡（空港No65遺跡）	31	大安場遺跡
10	木の根折美造遺跡（空港No.6遺跡）	22	天神峰最上遺跡（空港No64遺跡）	32	十余三稻荷峯II遺跡
11	木の根東台遺跡（空港No.5遺跡）			33	十余三四本木II遺跡
12	東峰西笠峰遺跡（空港No63遺跡）			34	台ノ田II遺跡



第5図 周辺遺跡 (1:25,000比例)

### 第3節 基本層序と旧地形

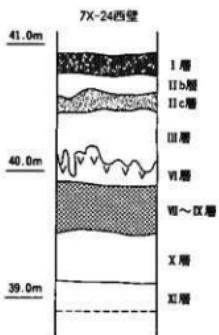
7X24西壁土層断面を第6図に示した。標準土層の提唱以前に行われた分層であるため、混乱を避けるため一部層名を変更した。第2黒色帯をVII層からVII～IX層に、立川ローム最下層をVIII層からX層に、武藏野ローム最上層をIX層からXI層に変更した。A Tを含むVI層は標準土層ではなるべく集中部を抽出して薄く捉えることを指示しているが、本遺跡のVI層は比較的厚めとなっているため、VI層の一部には第2黒色帯上半部の一部が含まれている可能性がある。

第7図は、調査区南端の狭い範囲ではあるが、確認グリッドの土層断面を基に旧地形を復元したものである。下層からXI層上面、VII～IX層上面、III層上面、IIc層上面を計測したものである。

XI層上面の段階では、比較的なだらかな傾斜面を形成し、標高38～39m付近でやや小さな抉り（谷）が見られる。VII～IX層段階では40mのコンターラインが一気に広がり、ローム層の堆積が急速に進んだものと思われる。しかしながら39mコンタを見ると、先に抉られていた箇所はそのロームによって埋められる事なく逆に堆積した上方のロームを削っていることが観察される。さらに上方では新たな谷が拡大している。III層上面段階に谷の拡大はピークを迎え、次第に埋められていく状況がIIc層上面でその途中経過を確認できる。そして現状のコンタは、その昔ここに谷を形成していたことを全く想像させないほど平坦でなだらかな状況を示している（第4図）。

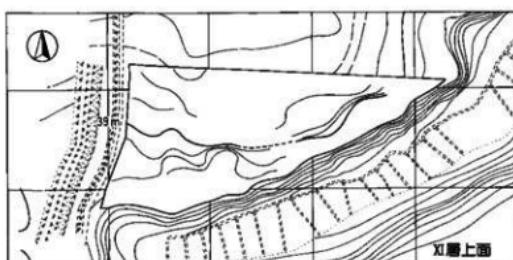
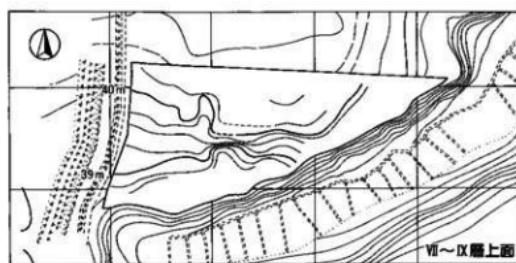
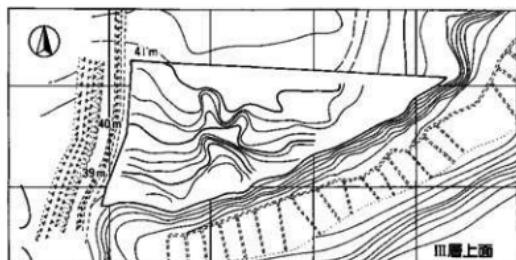
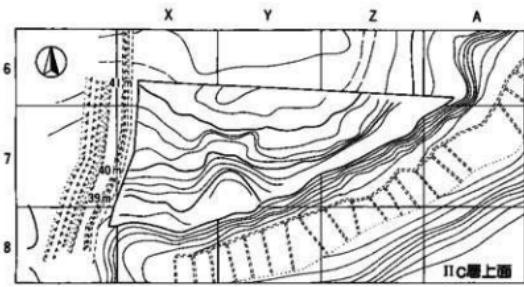
このような解釈は、当時の谷の基底部がどのぐらいまで下がるのかを把握した上でなされなければ、実態をつかむことはできないが、現状で捉えることのできない旧地形を把握するという作業は今後さらに重要な意味をもつものと思われる。

- 注1 鈴木道之助 1986「新東京国際空港No12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『研究紀要』10（財）千葉県文化財センター  
2 矢本節朗 1997「多古町一兼田甚兵衛山遺跡」同上  
3 新田浩三 1995「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IX 一・鉢田甚兵衛山北遺跡（空港No11遺跡）」同上  
4 上記以外で  
西野 元他 1971「三里塚 新東京国際空港用地内の考古学的調査」（財）千葉県北総公社  
〔以下すべて編集・発行は〕（財）千葉県文化財センター・新東京国際空港公団  
宮 重行・池田大助他 1981「木の根」  
野口行雄 1983「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III No14遺跡」  
西川博孝他 1984「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV No7遺跡」  
川島利道・兩宮龍太郎 1985「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書V No2遺跡 No10遺跡」  
新田浩三他 1993「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VII 南三里塚宮園遺跡 木の根拓美遺跡 香山新田中横堀遺跡」  
宮 重行・新田浩三 1994「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書VIII 取香和田戸遺跡（空港No60遺跡）」  
横山 仁他 1997「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X 一天神峰奥之台遺跡（空港No65遺跡）」  
平野雅一・永塚俊司 1999「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XI 東峰西笠峰遺跡（空港No63遺跡）」  
宮 重行・永塚俊司 2000「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XII -十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）-」  
宮 重行・麻生正信・永塚俊司 2000「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII 東峰御幸烟西遺跡（空港No61遺跡）-」  
5 島立 桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下締台地における立川ローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」  
『研究連絡誌』第35号（財）千葉県文化財センター



第6図 基本層序

- I 層 黒褐色土 (5YR2/1)  
表土
- II b層 赤褐色土 (2.5YR4/8)  
新期テフラ
- II c層 暗赤褐色土 (5YR3/2)  
20~30cmと比較的厚く堆積する。  
本層からは早期の土器が出土する。
- III 層 明赤褐色軟質ローム層 (5YR5/8)  
立川ローム最上部が軟質化したローム層である。ソフト化したローム層はVI層~VII層に及んでおり、いわゆるⅢ層~V層（第1黒色帯）が本層に含まれるが細分は困難であった。
- V 層 赤褐色硬質ローム層 (5YR4/8)  
第1黒色帯にあたる。第2黒色帯と比較して粘性が低く、色調も淡い。  
局地的に観察される。
- VI 層 明褐色硬質ローム層 (7.5YR4/8)  
A T (始良丹沢) 火山灰層を包含する。
- VII~IX層 (旧VII層)  
赤褐色硬質ローム層 (5YR4/6)  
第2黒色帯にあたる。粘性が非常に強く、赤褐色スコリアを多く含む。
- X 層 (旧VIII層)  
褐色硬質ローム層 (7.5YR4/6)  
立川ローム最下層である。赤褐色スコリアを少量含む。下部はやや青みを帯びる。
- XI 層 (旧IX層)  
褐色硬質ローム層 (7.5YR4/4)  
武藏野ローム最上層である。やや粘性があり、しまりが弱い。



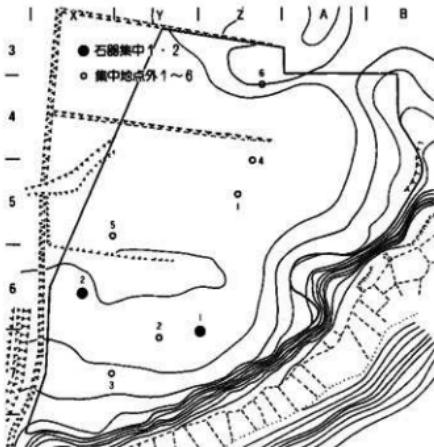
第7図 旧地形の復元

## 第2章 旧石器時代

### 第1節 概要（第8図）

確認調査で11か所の確認グリッドから立川ローム層に包含する遺物が検出され、本調査が実施された。しかし、遺物の広がり、出土層位・出土石器の検討から、石器集中地点として認定したものは2か所のみである。石器集中1は、X層（旧VII層）を中心に分布する石器群で、現地形で台地縁辺に比較的近い位置に立地している。チャートを主に用いて、台形様石器をはじめとした合計22点の小規模な石器集中を形成する。石器集中2は、VI層下部から第2黒色帯上部を中心に分布する石器群で、東北頁岩を主に用いて、ナイフ形石器・有縁石刃・石刃を含む合計45点の小規模な石器集中を形成する。

単独出土もしくは2～3点しか検出されなかった地点については、石器集中地点外として1～6地点を報告する。出土層位はソフトローム層～第2黒色帯に広がり、調査区全体に散漫に分布している（第8図）。



第8図 石器集中地点と集中地点外

### 第2節 石器集中地点

#### 1 石器集中1（第9図～11図、第2・4表、図版2・8）

分 布 7Y09・7Z00グリッドを中心に分布し、東西8m・南北5mの範囲に帶状に広がる。XI層上面の旧地形を見ると石器群は、比較的平坦地に立地し、等高線に沿った分布状況を示している。垂直分布図を見ても、レベル的に比較的安定していることがわかる。出土層位は立川ロームX層を中心とする。

器 種 台形様石器2（1・2）、調整痕のある剝片1（8）、使用痕のある剝片3（3・6・7）、石核2（10+11）、剝片11、碎片1、礫・礫片2点の合計22点が出土した。台形様石器は分布域の西側に、剝片・石核の接合資料は逆に分布域の東側に偏在する。

台形様石器はチャート製のものとメノウ製のものがある。前者は幅広剝片の縁辺の一部に微細な調整を施したもので、基部端がやや尖っている。後者は、幅広剝片の打面側を折断したものを素材とし、素材剝片末端部に背腹両面から調整が施されている（実測図右側面）。刃部は欠損している。

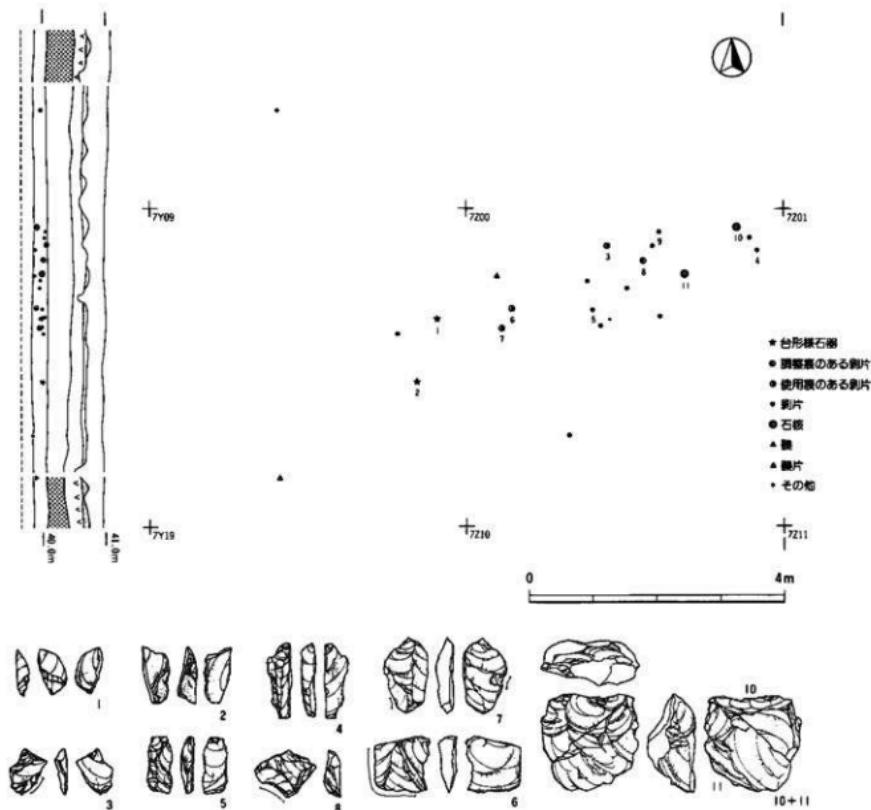
接合資料1は筋理に沿って分割された扁平な素材を石核として用いたもので、素材の小口面を短軸方向に加刷し、幅広な剝片を生産している。1・2の台形様石器の素材剝片も同様に、一般的な剝片剝離によ

って得られたものと考えられる。

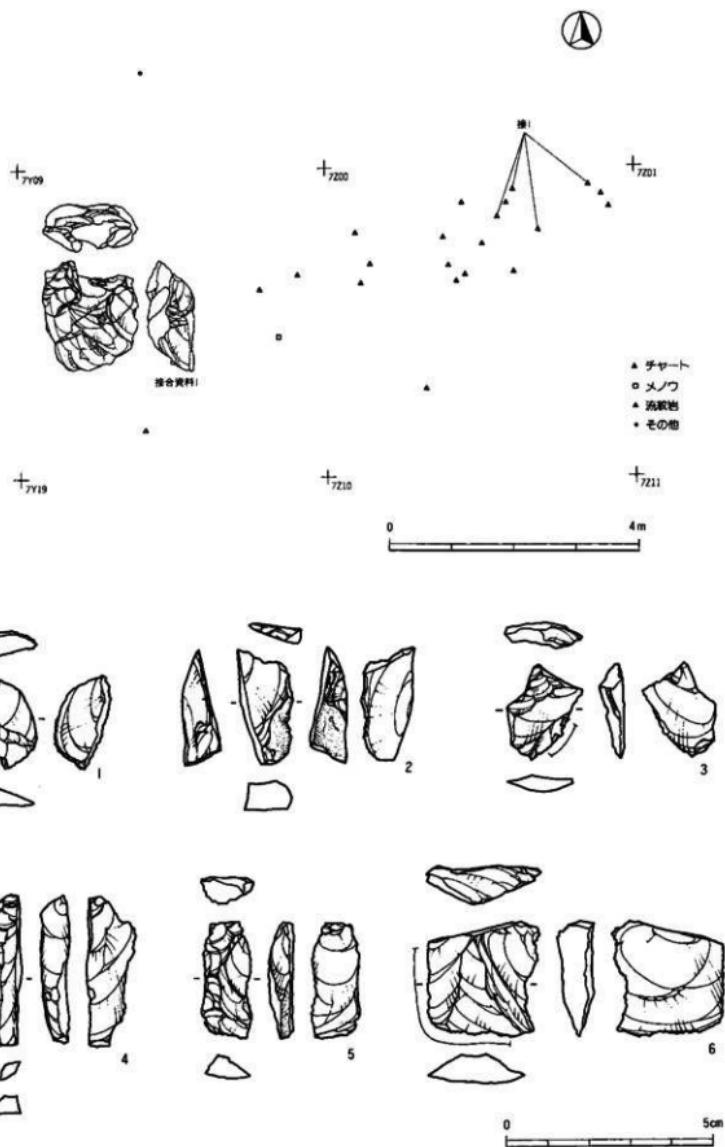
石 材 チャートを主体に、メノウ・流紋岩がこれに加わる。チャートは5母岩に分類されたが、いずれも節理が縦横に走り決して良質なものとは言えない。色調の違いを中心に細分したが、統合される可能性もある。南房総の遺跡を中心に分布する青灰色帯びた珪質頁岩と類似した点もあり注意を要する。

## 2 石器集中2（第12図～19図、第3・5表、図版2・8～12）

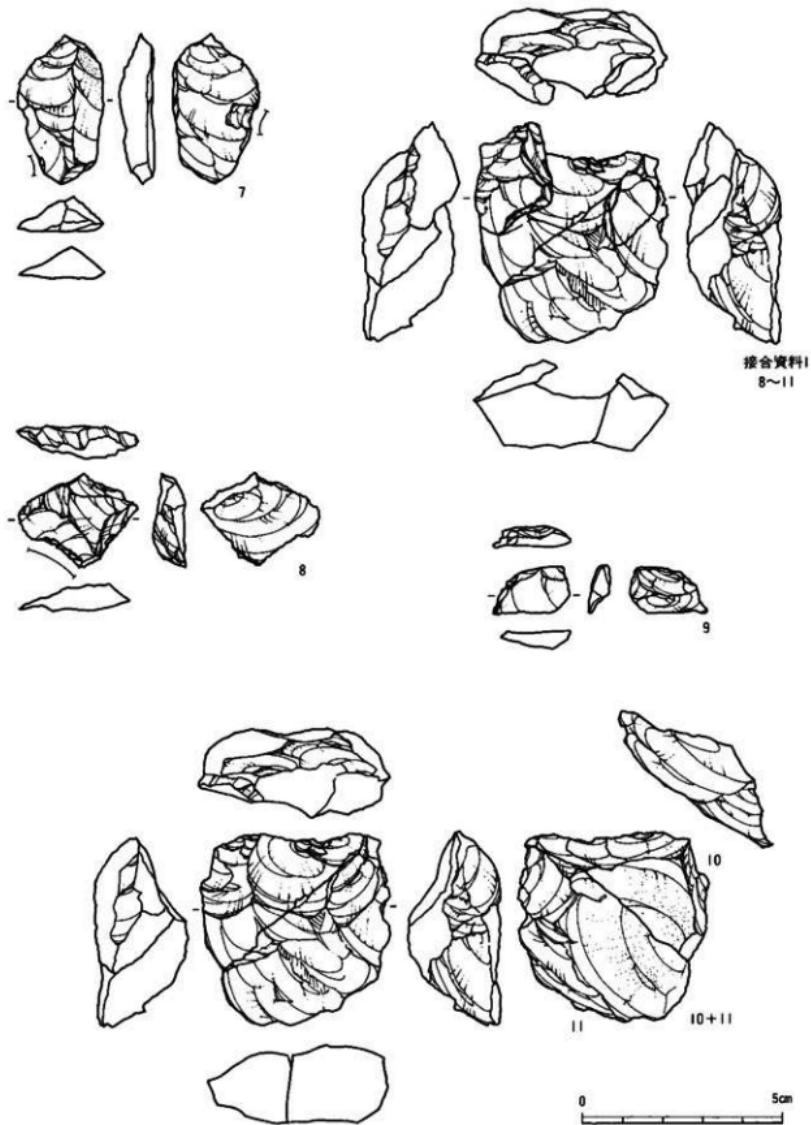
分 布 6X55・56、6X65・66グリッドを中心に、東西9m・南北6mの範囲に分布する。現地形ではちょうど谷への傾斜がはじまる手前の平坦面に立地する。出土層位はVI層下部を中心とするが、垂直分布図では傾斜によってVII～IX層に近い位置に集中している。



第9図 石器集中1 出土状況（器種別）と主要石器



第10図 石器集中1 出土状況（石材別）と出土石器（1）



第11図 石器集中1 出土石器（2）

器種 ナイフ形石器2(1・2)、小石刃8(3・5・18・24~28)、石刃14(4・6・7・10・11・13~17・19・20)、有柄石刃7(9・21~23・30・31・33)、剝片9、碎片1、敲石1(34)、礫片3点の合計45点が出土した。石刃の縁辺に橢状剥離痕が残されているものを「有柄石刃」、有柄石刃から剥離された削片を「小石刃」とする。有柄石刃は小石刃生産を目的とする説と、石刃自体が石器として（彫刻刀形石器や石刃として）用いられたとする説の二つがある。後者の場合は削片剥離は刃部再生ということになる。技術的に異なる要素もなく、本来的には両者は特に区別されることなく臨機応変に用いられた可能性が高い。

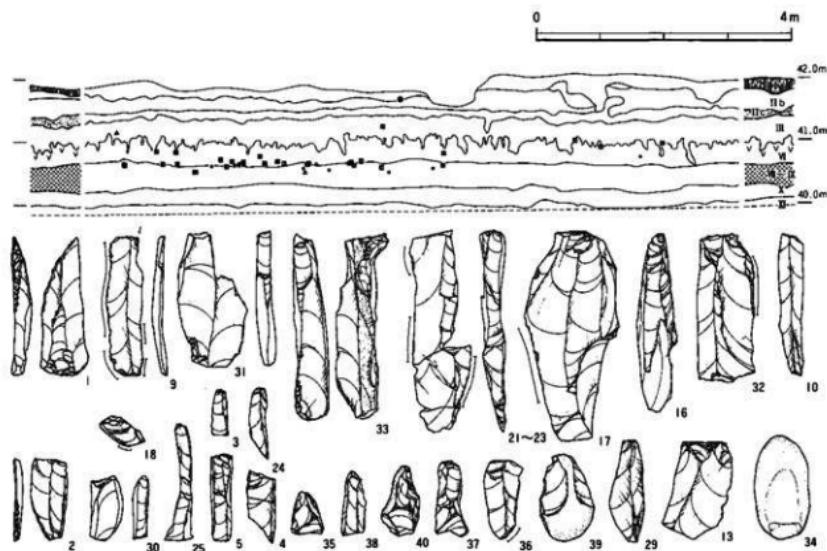
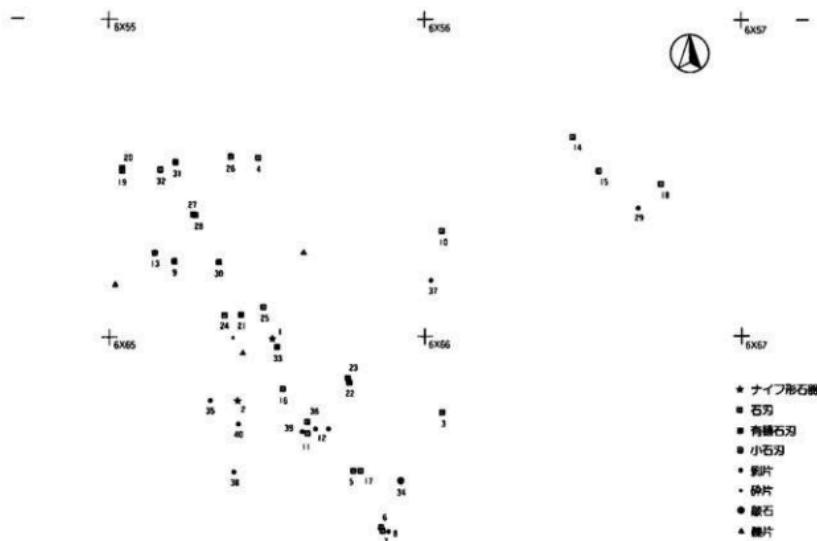
ナイフ形石器は2点ある。両者とも石刃を素材としたもので、分布は集中域中央付近である。1は珪質頁岩Aを用いたものである。石刃の打面は主要剥離面側からの調整によって一部を除いて除去されている。石刃の縁辺を斜めに裁ち切るように一側縁のみに急角度調整が施されている。2は安山岩製であるが、先端側と基部端を欠損している。調整は基部側の左側縁の一側縁のみに見られる。

小石刃は8点が出土した。打面はすべて調整打面を呈する。小石刃の形態は、器体がねじれたり、力が抜けきれず末端がヒンジフラクチャーを呈していたり、一定したものは得られていない。また、3・18には、剥離後の刃こぼれ状の微細剥離痕が肉眼観察で見られる。逆に接合資料6(26・27)と28は石刃の縁辺を比較的薄く削片剥離したものであり、いわゆる石刃の縁辺を再生するために剥離されたようにも見えるが、確証はない。

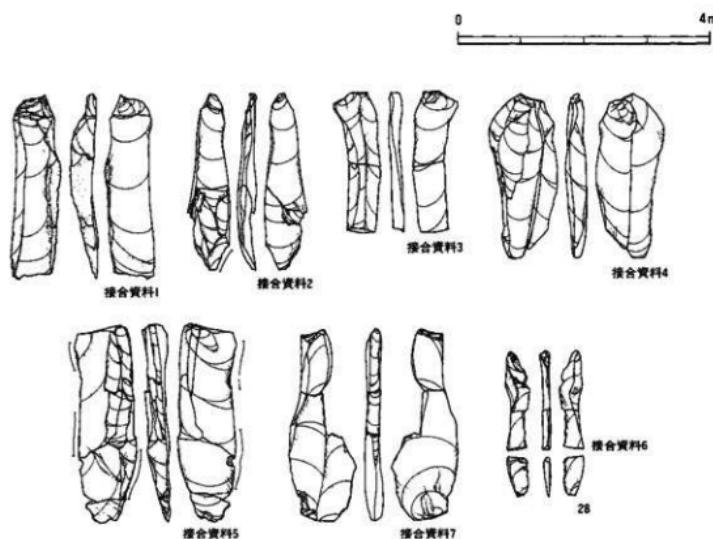
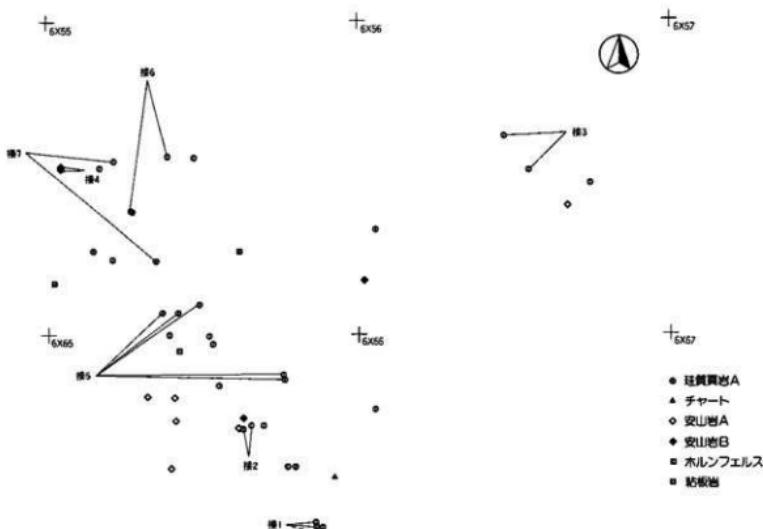
石刃は14点が出土した。安山岩B(いわゆるトロトロ石)が3点、珪質頁岩Aが11点で構成される。前者の打面は比較的小さな調整が施されたものであり、石刃は折断されることなくすべて完形品である。19と20は剥離面同士の接合資料である。珪質頁岩Aを用いた資料は、幅広なものから幅狭なものまで各種揃っており、17・32のように厚み・幅のある資料は有柄石刃の素材となりうるものである。同一母岩と見られる資料はあるが、折断面同士の接合があるだけで、剥離面同士のものは見られない。

有柄石刃は7点ある。9は縁辺に著しい刃こぼれ状の微細剥離痕が観察される。薄い石刃を素材としたもので、折断面を打面として1条の橢状剥離痕が器体に平行して残されている。橢状剥離の先端部にも微細剥離痕が観察される。接合資料5は有柄石刃と小石刃の接合資料である。素材となった石刃の打面部は、折断と調整によって平坦に仕上げられ、石刃の縁辺に沿って平行に橢状剥離を試みている。ところが、25を剥離した際に力が外へ抜けず石刃の内部に進行したため、著しいヒンジフラクチャーを呈してしまった。また同時に、石刃が大きく21と22に分断された。24は石刃分断後に続けて剥離された小石刃である。23が折断された時期を特定することは難しいが、おそらく、小石刃剥離のための打面形成を目的とした折断作業時に上端とともに一緒に折れたものと思われる。接合資料7は有柄石刃同士の接合資料である。比較的薄手の石刃を素材としたもので、折断によって分割された石刃をそれぞれ用いて橢状剥離を施している。30は石刃の末端側に抉るような急角度調整を施して打面を形成している。最終的にはウートラバッセに近い感じで小石刃が剥離されている。31は折断面に細かい調整を施して橢状剥離を施している。最後は強烈なヒンジによって小石刃剥離を終了させている。33は分厚い石刃を素材としたもので、打面側から大きくなし石刃を縦に分割するかのように橢状剥離が施されている。その後、下端部を折断することによって新たな打面を形成している(実測図上端)。打面調整は施されず、直に削片剥離が数回、行われている。

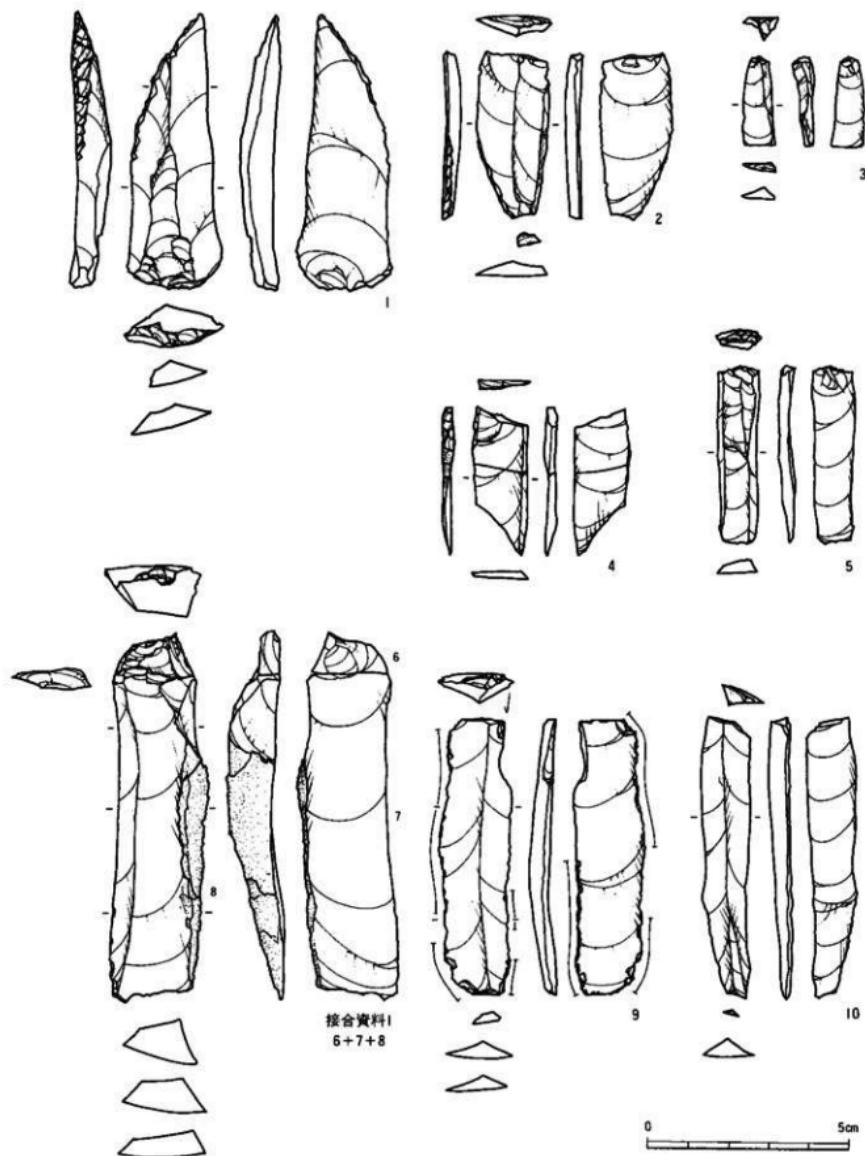
石材 硅質頁岩A(東北産のいわゆるチョコレート色した珪質頁岩)を主体とし、安山岩A(いわゆるガラス質黒色安山岩)と安山岩B(いわゆるトロトロ石)が加わる。他にチャート・ホルンフェルス・粘板岩がある。珪質頁岩Aは大きく4つの母岩に細分された。各母岩は基本的に石刃が単体で搬入されたも



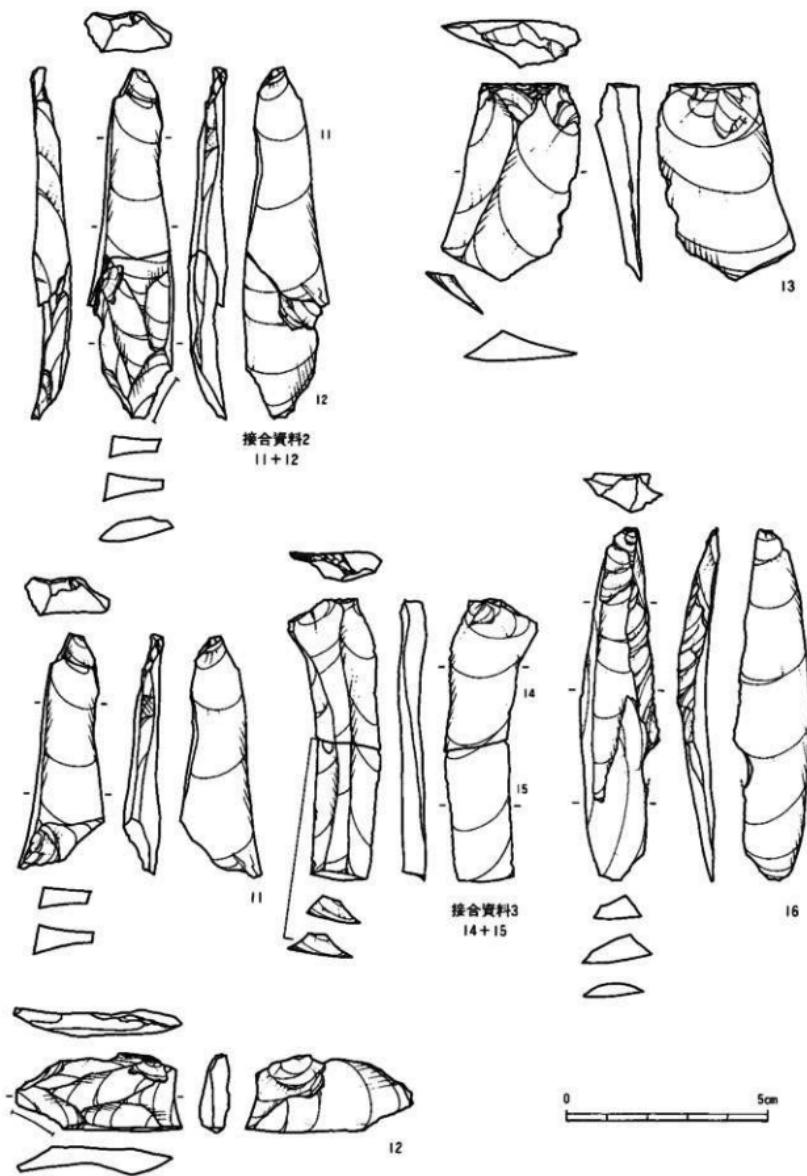
第12図 石器集中2 出土状況（器種別）と主要石器



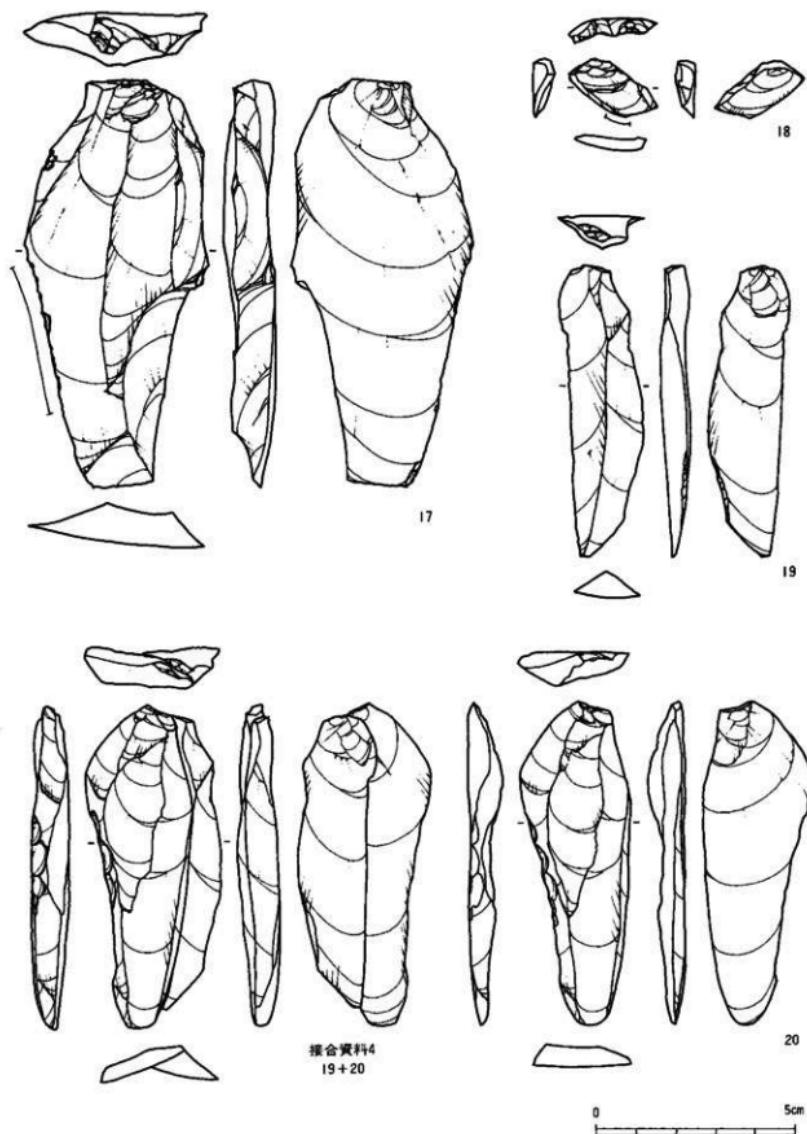
第13図 石器集中2 出土状況（石材別）と接合資料



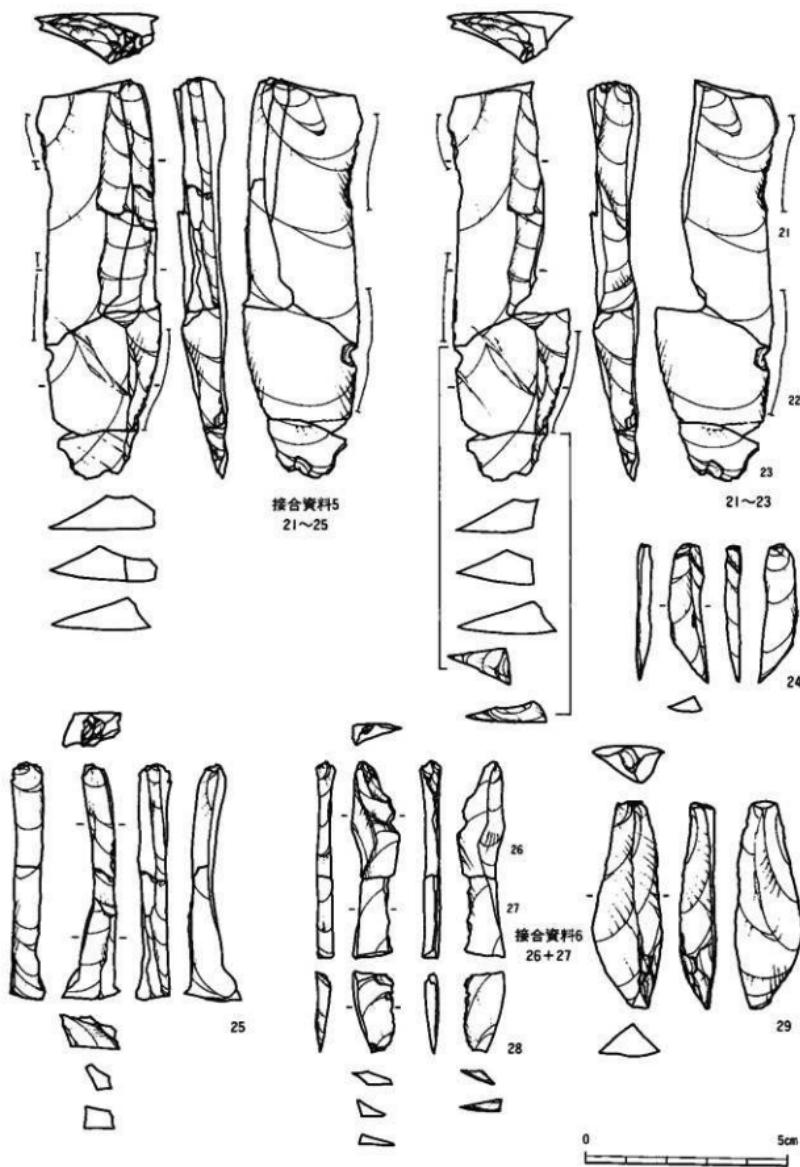
第14図 石器集中2 出土石器（1）



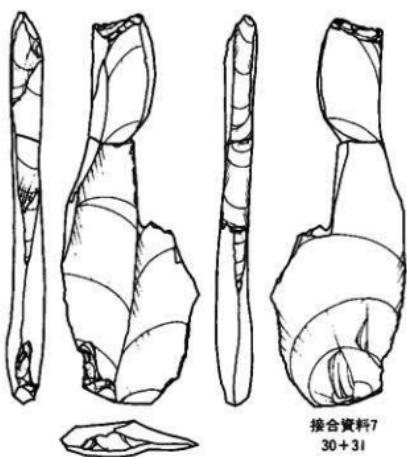
第15図 石器集中2 出土石器（2）



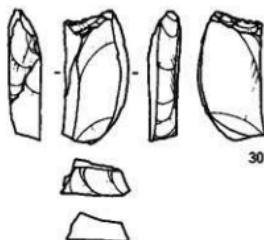
第16圖 石器集中2 出土石器（3）



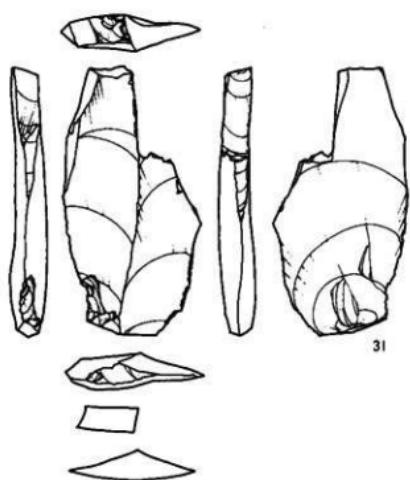
第17圖 石器集中2 出土石器 (4)



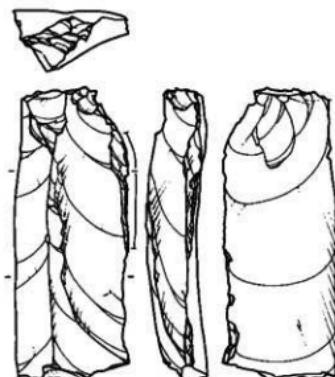
接合資料7  
30+31



30



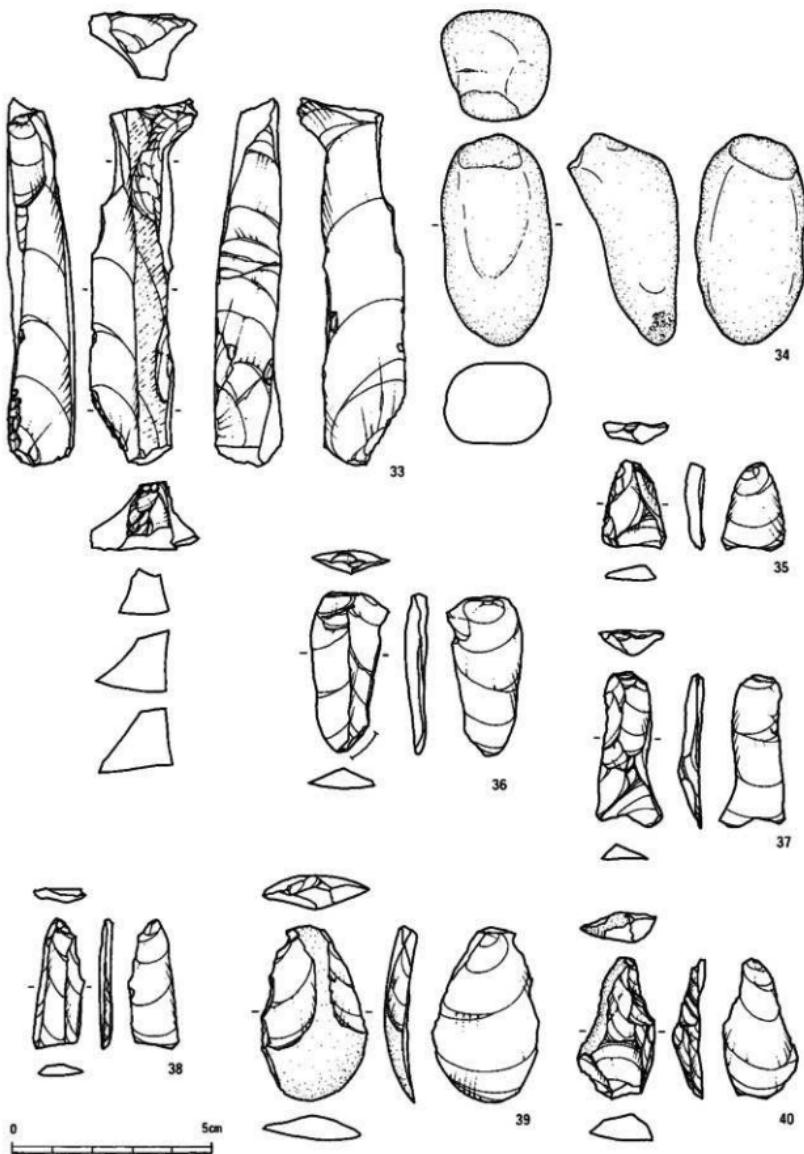
31



32

0 5cm

第18圖 石器集中2 出土石器（5）



第19図 石器集中2 出土石器（6）

ので、石刃同士の接合関係は認められない。遺跡内での剥片剝離は専ら、石刃を用いて剝片剝離・小石刃生産を行うだけである。石刃生産は、あまり安定したものではなかったのか、不揃いな石刃を持ち歩いていたのかは分からぬが、分厚いもの幅広なものなど形態的にバラエティーがある。唯一、石刃同士の接合関係は安山岩Bのものがあるが、安山岩Bを用いた剝片剝離、小石刃生産は全く行っていない。

### 第3節 石器集中地点外

#### 1 集中地点外1 (第20図、第6表、図版12)

調査区中央の台地平坦面に位置する5Z44グリッドから出土した。出土層位は第2黒色帯下部である。珪質頁岩製のやや大振りな剝片1点のみを検出した。

#### 2 集中地点外2 (第21図、第16表、図版12)

石器集中1から西へ約30mほどの地点の7Y04・7Y15グリッドから出土した。出土層位は第2黒色帯という記載がある。出土石器は砂岩の礫片1点と黒曜石製の剝片1点のみである。剝片の縁辺には刃こぼれ状の微細剝離痕が観察される。

#### 3 集中地点外3 (第22図、第6表、図版13)

調査区南端付近の緩い傾斜面に位置する7X59グリッドから出土した。出土層位は垂直分布図では第2黒色帯上部にあたる。幅広な剝片2点が出土した。1はホルンフェルス製で末端部に若干の微細剝離痕が観察される。2は砂岩製である。

#### 4 集中地点外4 (第23図、第6表、図版12)

調査区北側の5Z06グリッドから出土した。出土層位はIV層上部という記載がある。出土石器は黒曜石製の剝片1点のみである。

#### 5 集中地点外5 (第24図、第6表、図版12)

調査区中央やや南側の5X99グリッドから出土した。出土層位はIII層下部である。出土石器は珪質頁岩製のナイフ形石器1点のみである。比較的薄手の剝片を縦位に用いて、両側縁に丁寧な急角度調整を施している。

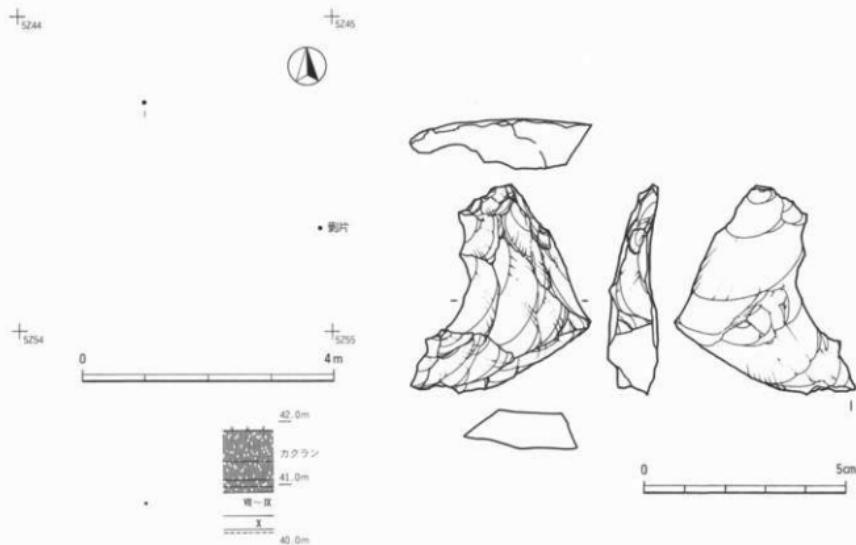
#### 6 集中地点外6 (第25図、第6表、図版13)

調査区北端の4Z17グリッドから出土した。北東方向からの浅い谷を埋める覆土中からの検出であり、通常の土層堆積が見られないため、標準土層との対比を困難なものとしている。調査時の所見では、再堆積土中から検出された可能性が指摘されている。出土石器は、黒色の珪質頁岩製の細石刃石核1点のみである。節理面によって分割された薄手の剝片を素材として、小口面を長軸方向に作業面として設定している。作業面は相対する2面に設けられ、対応する打面もそれぞれ上下に設定されている。打面は平坦面を呈し打面調整は施されていない。

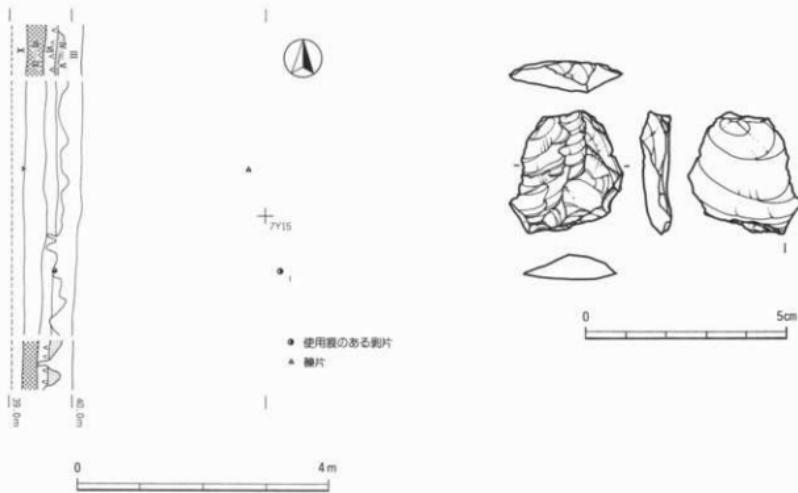
#### 7 グリッド一括資料 (第27図、第6表、図版13)

1は頁岩製の細石刃石核である。稜柱形を呈したもので、作業面と打面以外はすべて縦面に覆われている。打面は作業面側からの調整によって整えられている。最後に打面を移動して、下端から1枚細石刃剝離を試みている。7Y09グリッドから出土した。

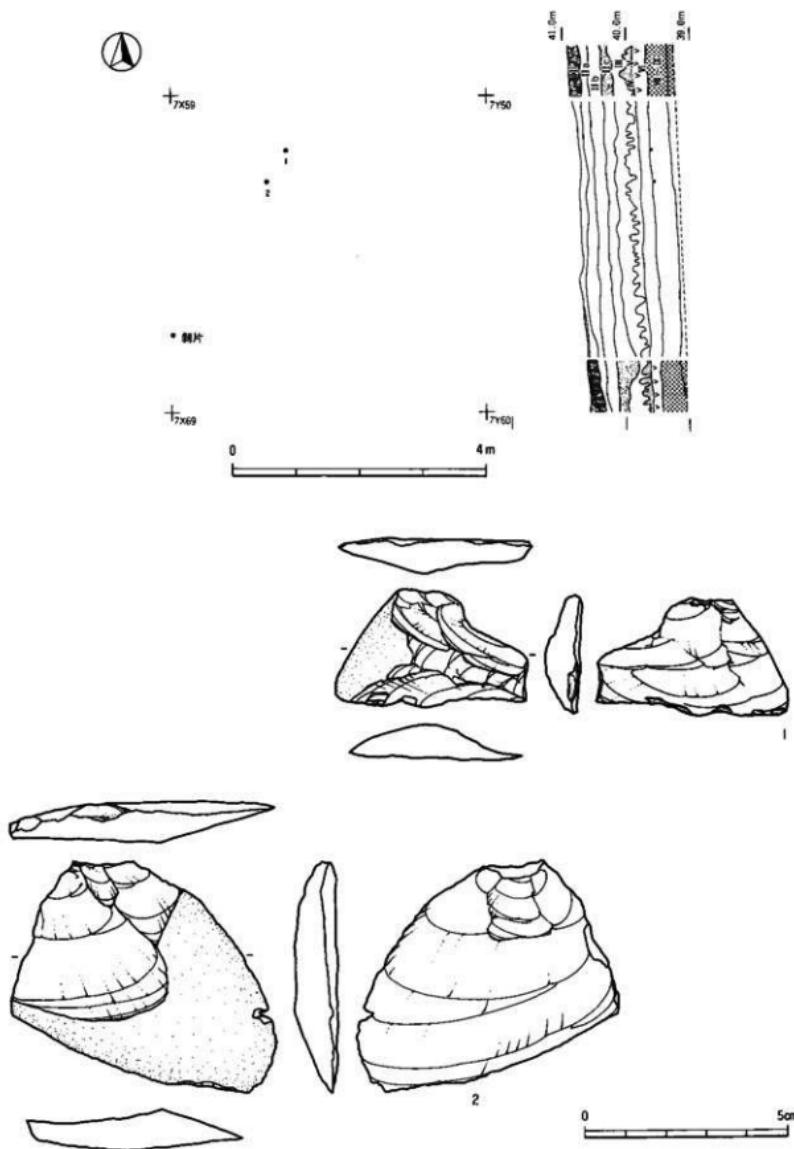
2は頁岩製の周縁加工の小型尖頭器である。幅広な剝片を横位に用いて周縁に調整を加えて尖頭部を作



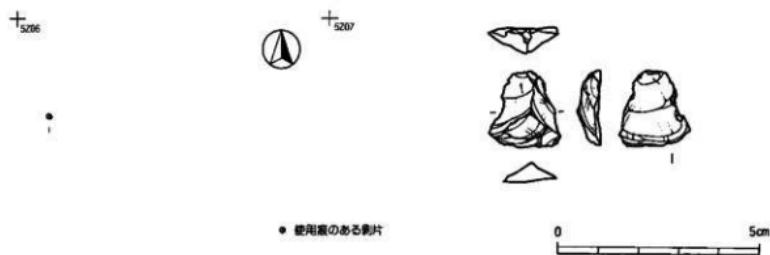
第20図 石器集中地点外1 出土状況と出土石器



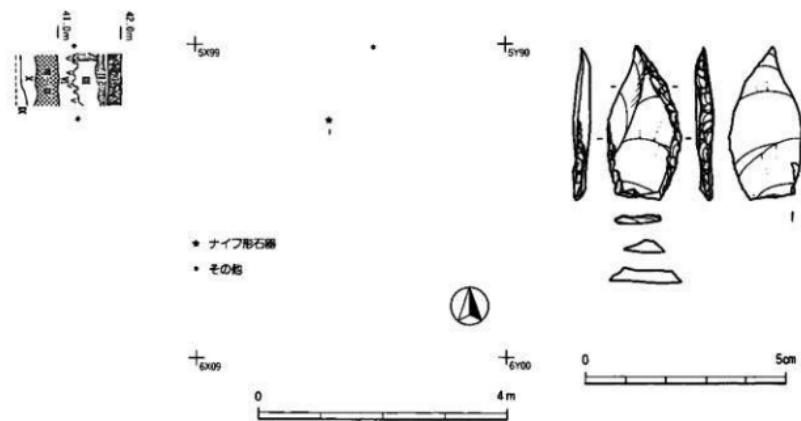
第21図 石器集中地点外2 出土状況と出土石器



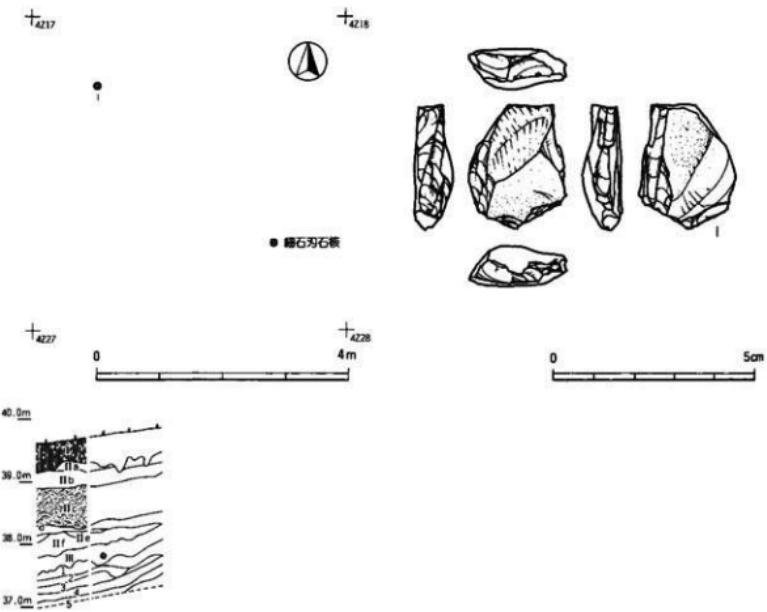
第22図 石器集中地点外3 出土状況と出土石器



第23図 石器集中地点外 4 出土状況と出土石器



第24図 石器集中地点外 5 出土状況と出土石器



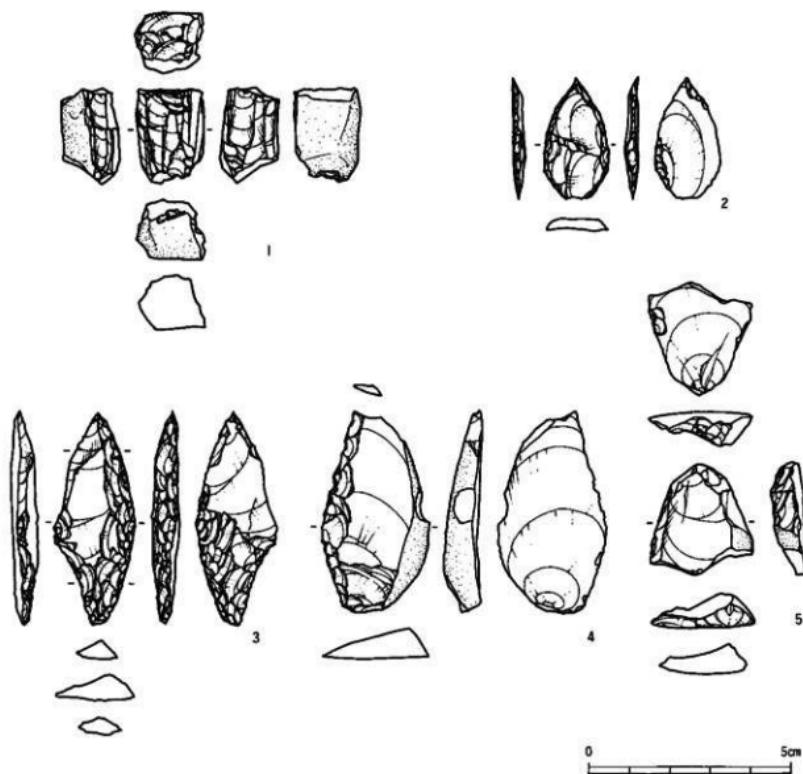
第25図 石器集中地点外6 出土状況と出土石器

出している。基部端には素材剥片の縁辺がそのまま未調整部分として残っている。7Z42グリッドから出土した。

3は頁岩製の有柄尖頭器である。右側縁は丁寧な調整によってなめらかな曲線を呈している。左側縁の基部側には内側に抉るような調整が裏面を中心に施され、全体として「く」の字形を呈している。最終的に削片剥離は左肩に施されている。6Z45グリッドから出土した。

4は安山岩製のナイフ形石器である。やや幅広な剥片を縦位に設けて比較的平坦な調整剥離が一側縁に施されている。

5は珪質頁岩製の微細剥離痕のある剥片である。全体的に水磨を受けたかのように石器の稜はトロトロとなっている。荒屋型彫刻刀形石器を伴ういわゆる「荒屋系」の細石刃石器群に伴う細石刃石核の削片である可能性がある。7Y19グリッドから出土した。



第26図 石器集中地点外 単独出土石器

観察表の見方

1. 採集図 No. 実測図を掲載した遺物の通し番号。平面分布図に付した番号、写真図版の番号と一致する。実測図を掲載しなかったものについてはグリッド、遺物No順に続けて並べた。
2. 器種 砕片については、最大長・最大幅の両者が10mm以下のものとした。
3. 最大長・最大幅・最大厚・打角 計測方法については右図に示した。
4. 打面形状 Cは自然面、Pは点状打面、Lは線状打面、Iは平坦打面、2以上は複削離打面を示し、括弧内はそのうちネガティブバブルの残る剥離面の数を示している。空欄は欠損等による打面なし、計測不可を示す。
5. 打面調整・頭部調整 観察されるものについて「○」で示した。
6. 背面構成 主要剥離面の剥離方向を基準とし、背面を構成する剥離面の加撃方向と剥離面の数を記した。ただし、変形度の高いもの（楔形石器等）は記さなかった。碎片はわかる範囲で記した。H=頭部側、T=尾部側、R=背面を正面にして右側、L=左側、D=背面側、V=腹面側からの加撃方向を示す。自然面(C)、節理面(S)を有する資料については「○」で示した。







## 第3章 繩文時代

### 第1節 遺構と遺物

#### 1 壓穴状遺構

020号（第28図、図版3）

6Z92・7Z02グリッドを中心位置する。表土除去した段階で、一辺4mほどの方形の範囲に周辺より黒っぽい部分が検出され、精査した結果、短辺4.1m、長辺4.4m、高さ4.3mの台形の平面形で、深さが中央部で15cmほど非常に浅い落ち込みが検出された。中央に0.4m×0.7mで小型の楕円形の深いピットと、西側に径0.28m、深さ0.3mで割合しっかりしたピットがある。

出土した遺物は無文土器、纖維無文土器、浮島式、晩期土器等雑多であった。石器は、礫・礫片が計36点検出された。石材は流紋岩（15点）・チャート（11点）・花崗岩（5点）・安山岩（3点）・凝灰岩（2点）が用いら

れている。ほとんどが被熱により赤化している資料である。周辺は早期燃糸文系土器、沈線文系土器と前期浮島式土器の分布圏にあり、遺構下の包含層調査で遺物が集中出土している。

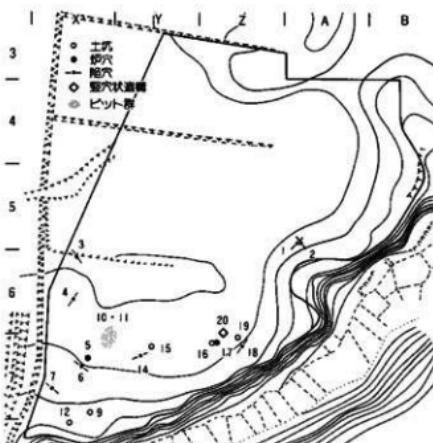
包含層から検出される土器・石器とほとんど変わらない内容をもつたため、遺構であるか微妙なところであるが、一応壓穴状遺構とする。時期は繩文時代としても新しい頃のものであろう。

#### 2 ピット群

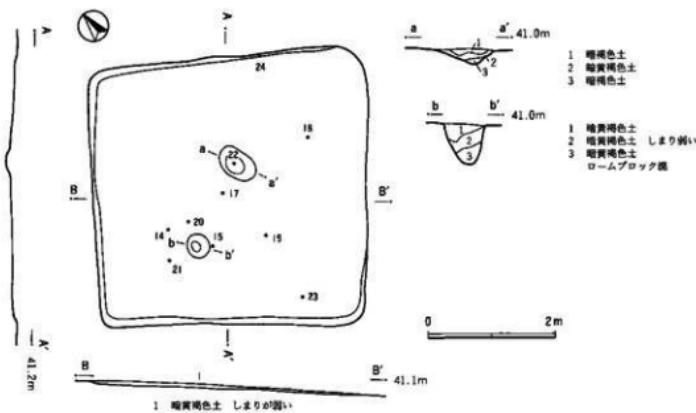
010号・011号（第29図、図版3）

7X09グリッドを中心位置する。径5.6m×7.2mの楕円形に12個のピットがまわる。北側は間隔があき、舌状に3個のピットが飛び出している。010号とした炉跡が中央部南よりに位置する。長軸方位はN-4°-Eである。ピットは径25cmから40cmほど、深さは25cmから45cmほどの内にある。南東の一本は3cmと非常に浅い。炉跡は0.9m×1.2mの楕円形で、ピット群の軸方位とはほぼ直交する。上部が被熱して焼土になっている。

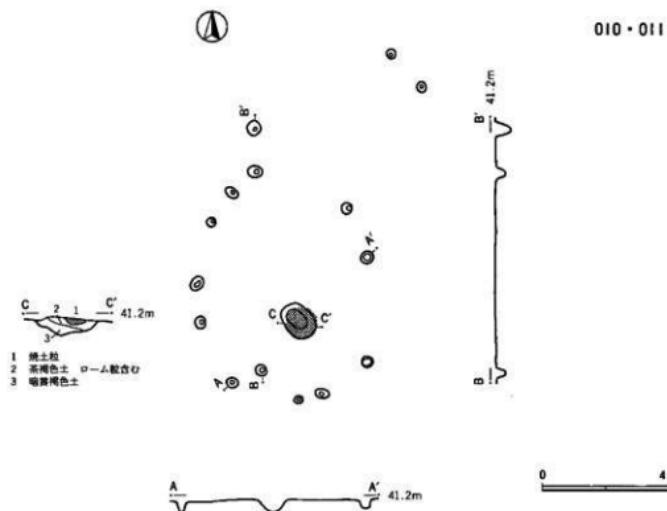
中央付近に炉のあること、柱穴が円形にめぐることから、住居跡の可能性が高い。遺構に伴う遺物は出土していないが、近接して浮島式土器が分布しているので、その時期の可能性が最も考えられる。



第27図 繩文時代 遺構配置図



第28図 壁穴状遺構



第29図 ピット群

### 3 陥穴

#### 001号（第30図、図版4）

東側の谷に面した5A91グリッドで002号陥穴と直角に接して検出された。開口部は長軸2.74m×短軸1.06mの長楕円形をなす。底面は長軸3.92m×短軸0.93mの不整な長楕円形をなす。北東端は尻尾状に徐々に細くなっている。長軸方位はN-39°-Eで、傾斜とは平行である。床は短軸方向では平坦だが、長軸方向断面では皿状である。深さは最深部で1.82mで、粘土層にまで達している。壁は短軸方向はほぼ垂直であり、長軸方向は極端な袋状を呈しており、特に北東端は底面から奥へ狸掘り状に掘り込まれている。

覆土は上部が暗褐色系の土、中位はロームブロック主体に黒色土の薄い堆積を交える。下位はロームブロックと白色粘土の混じった堆積になっている。遺物は出土していない。

#### 002号（第30図、図版4）

5A91グリッドで001号陥穴と接して検出された。001号陥穴を切っている。開口部は長軸1.78m×短軸2.02m、底面は長軸1.04m×短軸0.44mの長楕円形をなす。長軸方位はN-33°-Wで、傾斜と直交している。深さは1.62mで、掘り込みは白色粘土層上部まで達している。上部は漏斗状、下部は袋状を呈し、ちょうど巾着のような断面形をしている。上部は暗褐色から黒色の土、中位はロームブロックを主とした黄褐色土と暗褐色土が互層となっている。底面には黒褐色土の堆積がみられる。

#### 003号（第30図、図版4）

谷から奥へ入った6X09グリッドで検出された。開口部は径2.3mの円形を、底面は長軸0.7m×短軸0.3mの小さな楕円形をなし、検出面からの深さは3.0mと非常に深い。長軸方位はN-26°-Wである。V字形の断面をなし、白色粘土まで掘り込みが達している。検出面はII c層上面で、覆土は新規テフラ層のII b層が最上部にあり、上部は黒色から暗褐色の土、その下位には褐色から黄褐色の土が、中位にロームブロックと黒褐色土の互層がみられる。最下層は暗褐色土が堆積している。出土遺物はないが、時期は新規テフラ降灰時になろう。

#### 004号（第31図、図版4）

003号陥穴の南側、6X65グリッドで検出された。開口部は長軸2.14m×短軸1.7m、底面は長軸1.18m×短軸0.58mの楕円形をなす。長軸方位はN-39°-Eである。掘り込みは白色粘土まで達し、深さは2.7mである。床は平坦だが、長軸方向で端部がグラグラと上がっている。壁は、下位はほぼ垂直で、上部はかるくラッパ状に開く。

掘り込み面はII c層で、新規テフラII b層に覆われていた。覆土の上部は黒色から暗褐色の土、中位はロームブロック主体土と暗（黒）褐色土の互層、底面上には粘質土が厚く堆積していた。時期は新規テフラ降灰以前である。遺物は出土していない。

#### 005号（第31図、図版4）

7X46グリッドで検出された。開口部は長軸2.5m（推定）×短軸1.18mの長楕円形、底面は長軸1.74m×短軸0.8mの葉巻形をなす。長軸方位はN-60°-Wである。深さは1.28mで、壁は急な角度で立ち上がり、短軸方向の断面はV字状をなす。覆土は、上部が暗褐色系の土主体で、壁際に流れ込みの黄褐色土があり、下半部は黄褐色土と褐色土の互層である。遺物は出土していない。

#### 007号（第31図、図版4）

7X62グリッドで検出された。開口部は長軸2.66m×短軸1.03mの長楕円形、底面では長軸2.38m×短軸

0.28mの棒状をなす。長軸方位はN-47°-Wである。深さは1.86mで、下半部は砂質粘土層を掘り込んでいる。長軸方向断面は袋状で、床が皿状に中央がくぼむ。短軸方向の断面は垂直に近く立ち上がる。上部に暗褐色土、中位にロームブロック主体土、下位にロームブロックに加え砂質粘土、床面付近には黒褐色土がみられる。出土遺物はチャート（2点）、流紋岩（1点）の礫が計3点ある。

#### 014号（第31図、図版4）

7X13グリッドで検出された。開口部は長軸2.46m×短軸0.76mの長梢円形をなす。底面は長軸3.14m×短軸0.1mの棒状をなす。長軸方位はN-62°-Eである。深さは1.2mである。長軸方向断面は袋状で、床は皿状に中央がくぼんでいる。覆土は上部の中心よりに黒褐色土があり、それ以外には暗褐色から褐色の土が堆積していた。

覆土中から浮島式土器が出土している。

#### 018号（第31図、図版4）

7Z14・15グリッド、台地縁辺に検出された。開口部は長軸2.46m×短軸1.08mの長梢円形をなす。底面は長軸2.15m×短軸0.44mのレンズ形をなす。長軸方位はN-51°-Eである。深さは1.08mである。短軸方向の断面は壁が急峻に立ち上がる。覆土は上部に暗～黒褐色土があり、下位には明褐色の土が堆積していた。遺物は出土していない。

### 4 炉穴

#### 005号（第32図、図版5）

7Z26グリッドでIIb層上面で検出された。径0.6mほどの略円形をなす。約20cmの厚さに焼土が認められた。時期は不明である。

#### 017号（第32図、図版5）

7Z11グリッドで検出された。1.0m×0.6mの梢円形を呈し、20cmの厚さに焼土を含む土がみられる。長軸方位はN-85°-Eである。

無文土器の破片とチャートの礫が2点出土している。

### 5 土坑

#### 009号（第32図、図版5）

7X97グリッドで検出された。開口部は1.8m×1.2mの梢円形を呈する鍋底状の土坑で、0.8mの深さを持つ。長軸方位はN-25°-Eである。覆土中位で炭片があった。また沈線文土器の破片、花崗岩の礫1点が出土している。

#### 012号（第32図、図版5）

南側斜面の8X04グリッドで検出された。開口部は0.8m×2.6m、底部では0.5m×2.0mの長梢円形の平面形をなし、深さは0.7mである。長軸方位はN-76°-Wである。上部は風倒木に壊されている。覆土はロームに似た褐色土がみられた。平面形は長梢円形で、標高も低く、陥穴の底面近くが残ったものともとれそうだが、確証がないので土坑としておく。

**015号（第32図、図版5）**

7X14グリッドで検出した。開口部の平面形は1.82m×0.96mの不整橿円形をなす。床面は涙滴形をなし、南側が広く幅0.62m、深さ0.74mで、北側に向かい幅が狭まり浅くなっている。覆土は黒褐色土が中心にあり、壁・床際は褐色、黄褐色土になっている。

浮島式土器が出土している。形が不整であり、遺構とするにはやや迷う。

**016号（第32図、図版5）**

7Z11グリッドで検出された。平面形は1.2m×0.84mの略円形で、皿状の掘り込みを持つ。

**019号（第32図、図版5）**

7Z04グリッドで検出された。平面形は1.2m×1.4mの略円形で、皿状の掘り込みを持つ。覆土で沈線文系土器と流紋岩（2点）・チャート（1点）の疊が出土している。

## 6 遺構出土の遺物

### [土坑]

**009号（第33図、図版14）**

田戸下層式土器が出土した。

1は底部付近の約3分の2が残されている。尖底で、端部が丸味を帯びている。文様は上端部に二本組の細沈線を方向を変えて斜施文しており、羽状か菱形の文様パターンをとるとみられる。底部付近は縦ナデ痕が残る。胎土に細砂を多く含む。

2～4は二本組の斜沈線が施文されている。2・3は1と同一個体であろう。4は1より幅の狭い二本組沈線である。胎土、調整は1と似ている。

**015号（第33図、図版14）**

浮島式土器が出土した。5是有肋貝殻文が施文されている。6は横位の半截竹管の沈線文を持つ。地紋に貝殻文がわずかにみられる。7は半截竹管の沈線文、有助貝殻文が併せ施文されている。3点とも内面は磨かれている。

**019号（第33図、図版14）**

8は横位条線を挟んで斜条線、斜格子目の沈線が施文されている。三戸式か田戸下層式土器とみられる。沈線は「V」字断面で、角のある施文具を用いている。

### [縫穴]

**014号（第33図、図版14）**

9は斜めの半截竹管の沈線がみられる。弧状施文になるかもしれない。浮島式土器である。

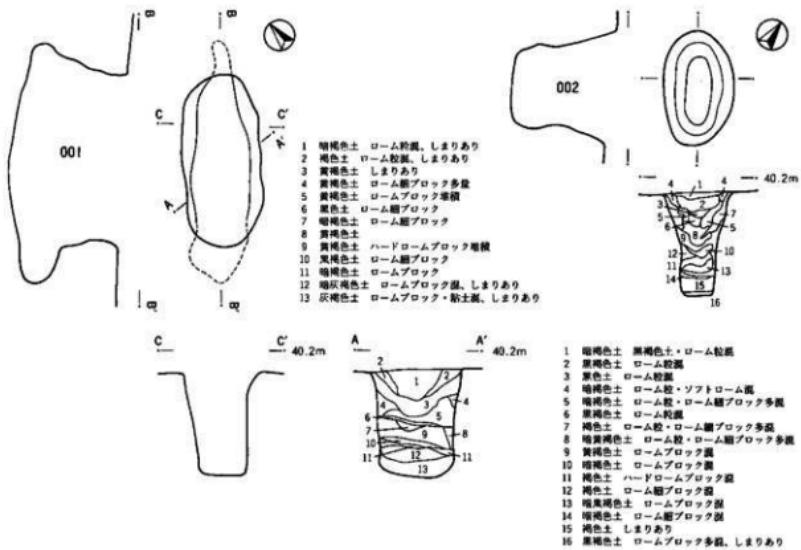
### [竪穴状遺構]

**022号（第33図、図版14）**

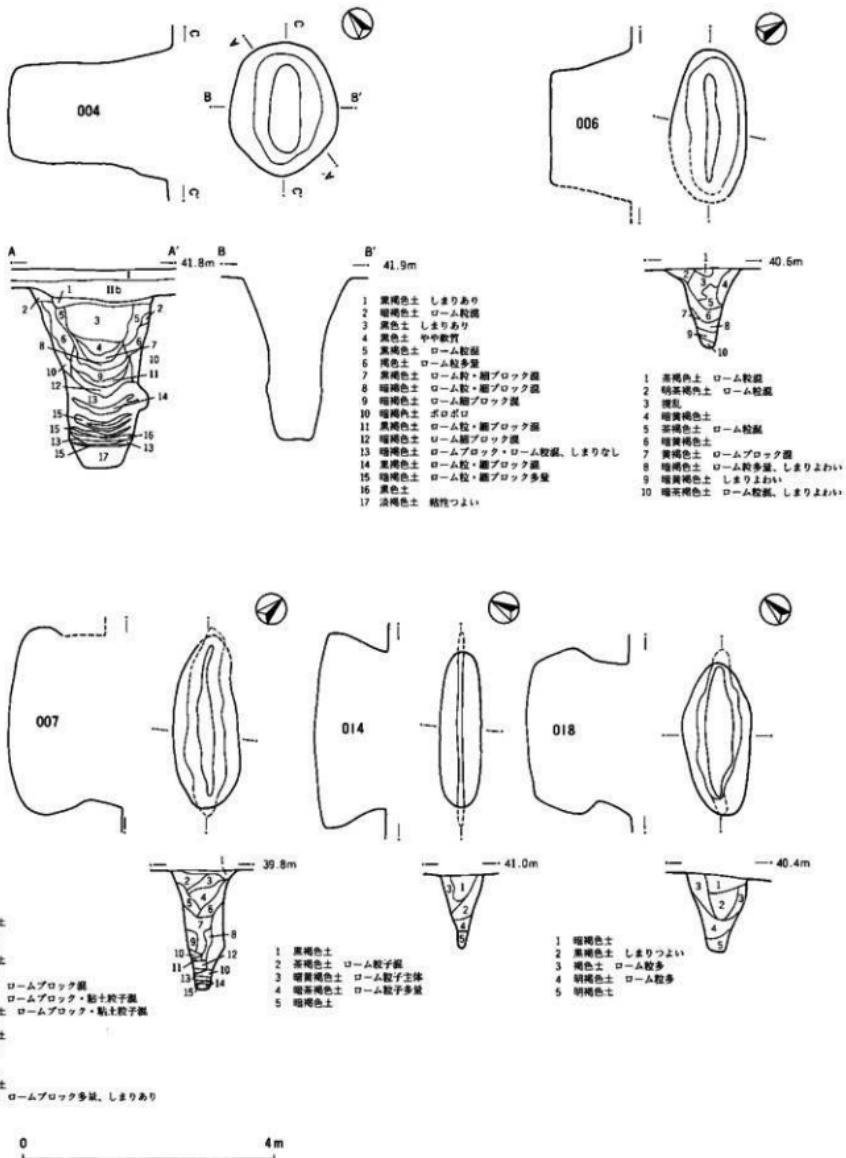
無文土器が主である。無纖維の無文土器、纖維無文土器、浮島式、晩期土器等が得られた。

10は角頭の口唇を持つ。浅い横位太沈線を持つ。11は無文のもので、縦ナデ痕を持つ。これらは田戸下層式土器である。

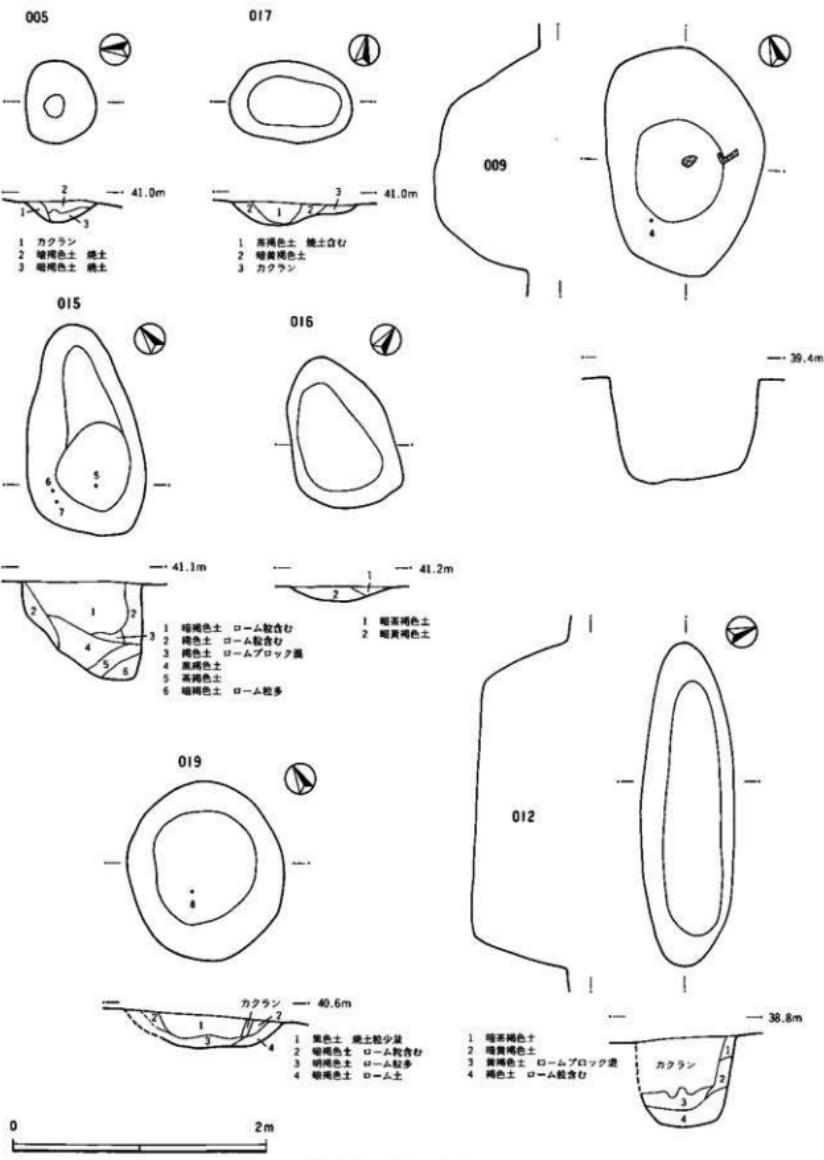
12～16は田戸上層式か子母口式に含まれる無文的な土器である。12は無文で、外側調整はぞんざいである。胎土に纖維を含む。縦位に浅い太沈線がみられるが、破片なので沈線文であるかどうかよくわからぬ



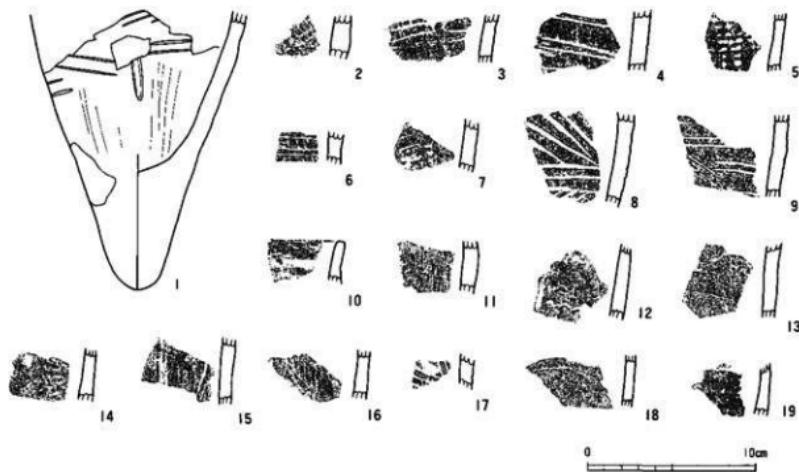
第30図 陥穴（1）



第31図 韻穴 (2)



第32図 炉穴・土坑



第33図 遺構出土土器

い。13・14は無文のもので、胎土に微細砂と繊維を含む。15・16は外面にタテヘラ痕がみられる。胎土に繊維を含む。

17は半截竹管の沈線をもつ。内面はよく磨かれている。浮島式土器である。

18・19は安行式土器で、細い弧状沈線がみられる。内面は平滑になっている。胎土には微細砂が多量に含まれ、砂っぽい。18の器面には炭化物が少量付着している。

## 第2節 包含層と遺物

### 1 包含層（第34図、図版6）

台地の縁辺部で、埋没谷をはさんで北側（約2,000m<sup>2</sup>）と南側（約6,600m<sup>2</sup>）で包含層が検出された。遺物はこの包含層を主体に、総数で約2,800点が出土した。南側のほうが密度は濃く、範囲も広い。

第7表 繩文土器グリッド別出土状況

大グリッド	5X	6X	7X	8X	5Y	6Y	7Y	5Z	6Z	7Z	5A	5B	合計	比率		
I群 繩文系								7	22				29	1.0%		
田戸下層 田戸上層			2				101	12	2	171	117	84	489	17.7%		
II群 無文 繊維無文				2			1	16	56	2	133	431	119	48	1.7%	
								13	24		97		8	768	27.7%	
II群小計	0	2	2	0	1	117	81	4	328	693	203		8	1,439	52.0%	
III群 条痕文					2				8					10	0.4%	
IV群 前期繊維						148	11		12		39		1	211	7.6%	
V群 浮島	1			42				41	317	1	208	84	42	69	805	29.1%
VI群 前期末～ 中期									131		2	1	36	2	174	6.3%
VII群 後・晩期									4		19	11		34	1.2%	
									22	20	24			66	2.4%	
合計	1	2	196	11	1	180	573	5	627	811	282	79	2,768			

## 土器分類と分布状況

第Ⅰ群土器（第35図） 早期燃系文系土器である。南側、7Z区で地点的にまとまって出土した。

第Ⅱ群土器（第35・36図） 早期沈線文系土器である。無文を含めた出土量は1,439点で52%と最も多い。

田戸下層式は北側の5A区、南側は6Y・6Z・7Z区のほぼ2地点での集中がみられる。田戸上層式は南側7Z区で部分的に集中がみられた。繊維を含む無文土器もほぼ同様の分布であり、田戸上層式に含まれるものが多いのであろう。

無繊維の無文土器の出土傾向では田戸下層有文のものに加え、さらに南西側7Y区にも広がりがみられる。全体では第V群とは異なる出土傾向である。7Y区では第V群の分布もみられることから、その無文が入っているかもしれないが、口縁で見た限り、大半は田戸下層のものと思われる。

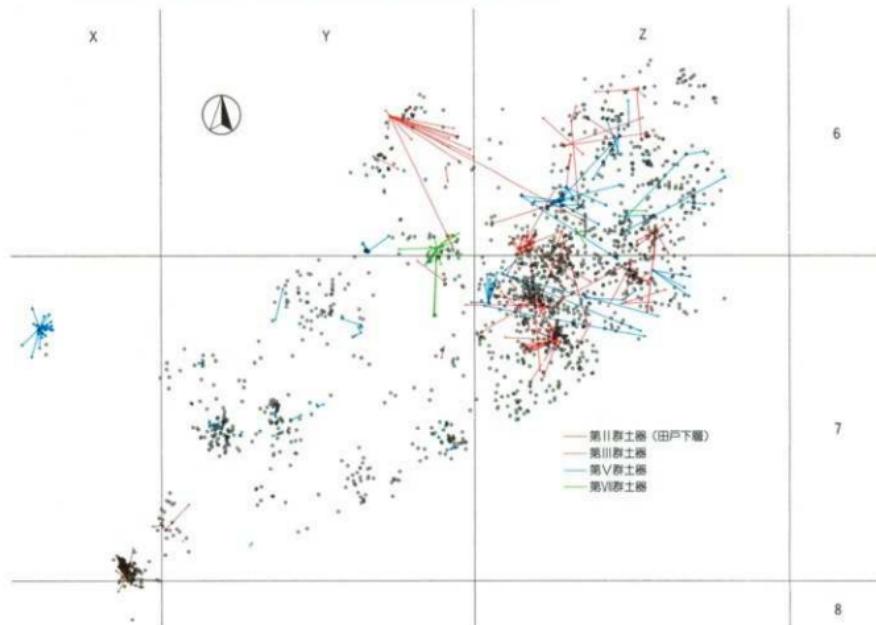
第Ⅲ群土器（第36図） 早期条痕文系土器である。出土点数は10点と非常に少ない。

第Ⅳ群土器（第36図） 前期繊維土器である。黒浜式を主体とする。南側3個所にブロック的に集中している。

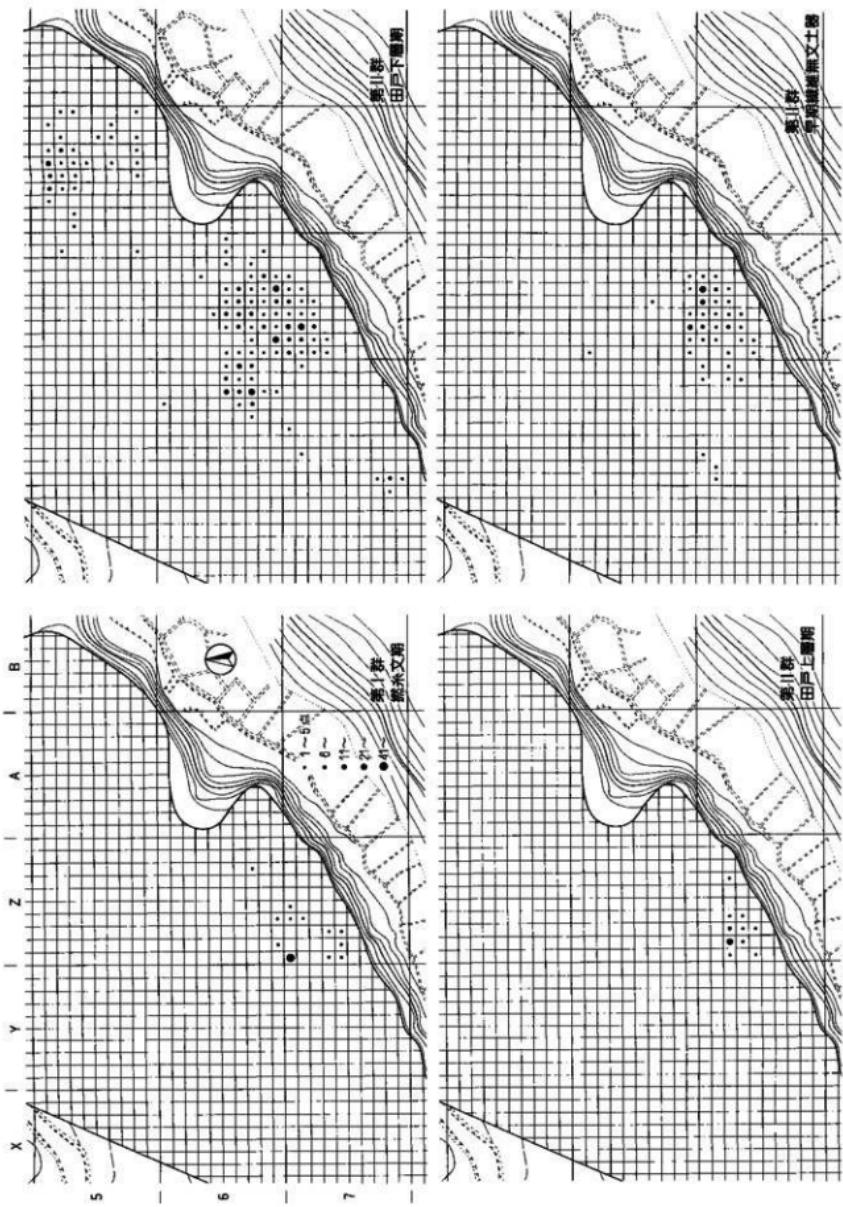
第Ⅴ群土器（第36図） 前期浮島式土器を主体とする。包含層全域で出土しているが、とりわけ南側の方が濃い。出土点数は805点（29.1%）と沈線文系土器に次ぐ出土量である。

第Ⅵ群土器（第37図） 前期末～中期初頭・中期の土器を一括した。全域で、散漫に出土している。

第Ⅶ群土器（第37図） 後・晩期の土器を一括した。南側で検出されたが、量は少ない。6Y・7Y区および6Z区で、竪穴状遺構（020）の周囲の2か所に集中している。

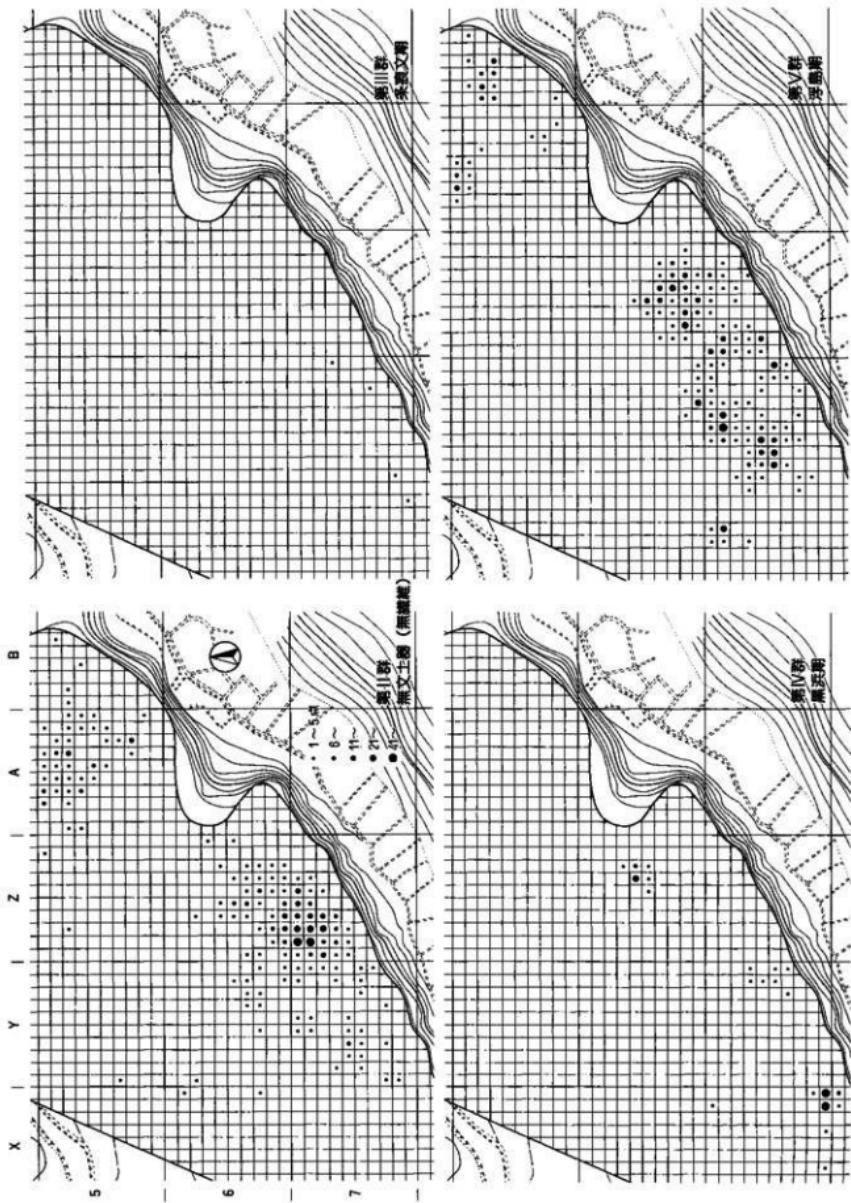


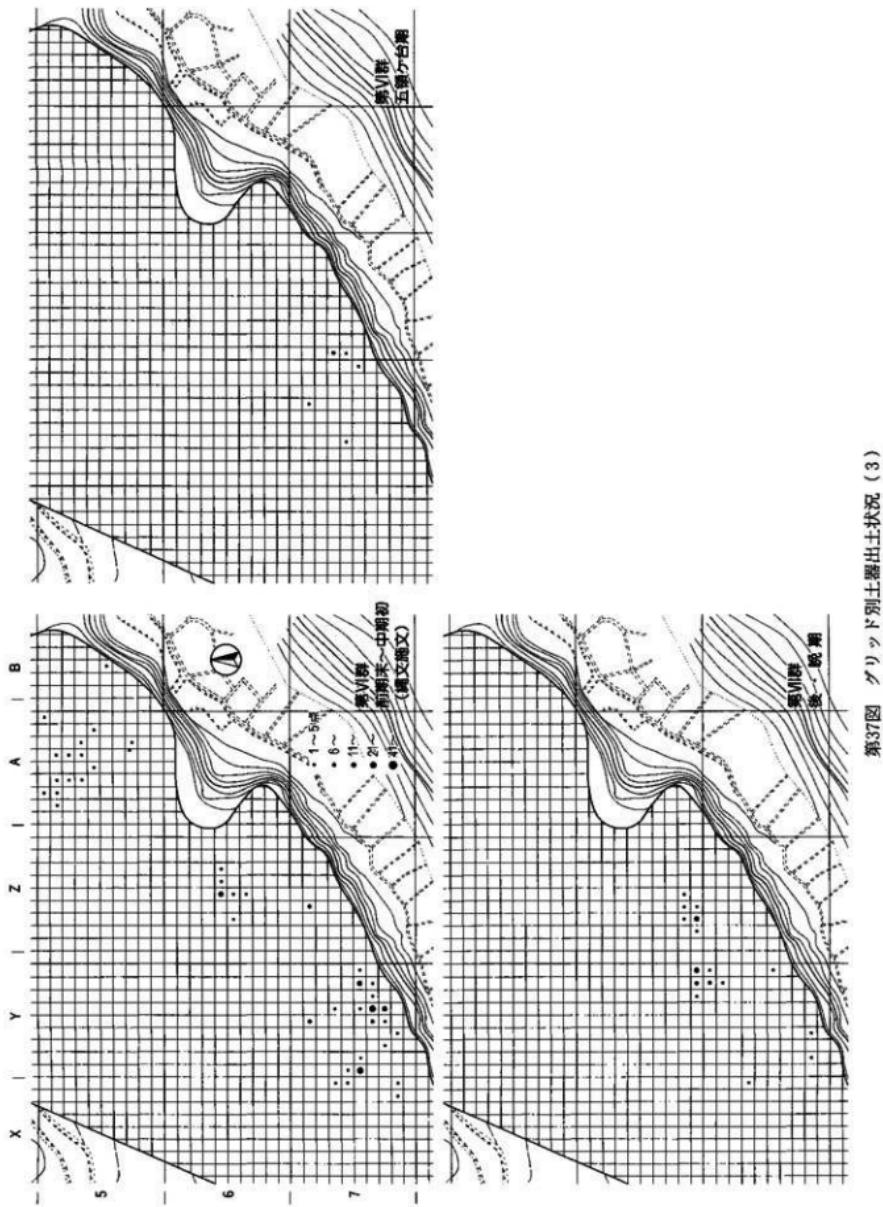
第34図 包含層北区 土器出土状況（接合関係）



第35図 グリッド別土器出土状況（1）

第36図 グリッド別土器出土状況（2）





## 2 出土土器

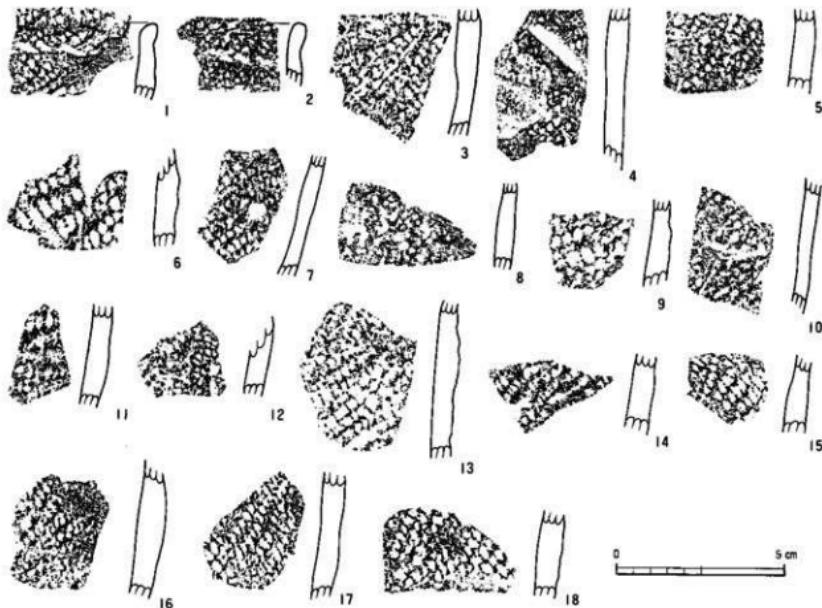
### 第I群土器（第38図、図版14）

7Z01グリッドを中心に出土した。単節LR斜縄文が施文され、口縁には押圧縄文をもつ。早期撚糸文系土器の流れを汲む土器である。出土地点はまとまっており、作りも似ているが、原体からは3種以上に分類できる。ただそれが別個体があるいは、同一個体の部分的な差なのかは判然としない。

1・2は口縁部で、端部に押圧縄文を持ち、若干くびれる。口径に比して薄手で、内面はミガかれていな。胎土に微細砂を含む。1は口縁内面上端部に縄文が施文される。2では口唇部上面に縄文が施文され、平らになって角頭状をなす。

3～18は胴部片である。3・4・7は内面に凹凸があり、5・8は胎土に疊が目立つ。原体をみると6・10は施文される縄文の筋が大きく、9は筋が不明瞭である。また14～17では筋が詰まっている。

これらは典型的な撚糸文系土器とはいえない。押圧縄文と斜縄文を持つものは、撚糸文系土器末期の花輪台式土器がまず念頭に浮ぶが、口唇施文ではなく、作りもしっかりしている点で本遺跡のものとは異なる。一方で、撚糸文系土器の初現期に押圧縄文をもつものの存在が知られている。やや粗雑な調整・施文のしかたなどからみても、そのころに位置づけるのが妥当かと思われる。



第38図 第I群土器

## 第II群土器（第39図～45図、図版15～20）

本群は早期沈線文系土器を一括した。

### A種 細沈線による横位文様が施されたもの（1～40）

1～7は口径15.5cmで、口縁上端で若干外反する器形をなす。口唇角頭である。横位細条線で区切り、上段に格子目文、下段に斜沈線に腹縁文を充填する文様を施す。1・3では爪形刺突文が付されている。胎土に纖維をわずかに含む。内面は平滑にナデられている。

8～12は口径20.1cm、推定高36.0cm、直線的な口縁で、かなり細長い器形を呈し、鋭角な尖底になる。口唇はナデられて円頭をなす。文様帶は横位に2段である。横位太沈線で区切り、上段に格子目細沈線を巡らす。下段は上下を沈線で区切り、鋸歯状太条線を施している。底部付近は無文である。内面は平滑なナデがみられる。胎土に若干纖維状のものが含まれる。

13～18は口径19.0cmである。直線的な口縁で、口唇は円頭をなす。口縁上端部を横位沈線で区切り、以下に大柄な格子目細沈線を施している。内外面とも平滑なナデがみられる。外面には、最初鋸歯状太条線が施文されたようで、それが中途半端にナデ消された上に格子目文が施文されている。

19～26は鋸歯状条線が施文されている。

19は2～3本組の細い沈線による。20～22は太めの条線のもので、21・22は同一のもので、下位に文様帶区切り線が施されている。23は口縁上端に沈線を持つ。口唇は内そぎ気味である。24～26は口縁上端に沈線を持つ同一のもので、口唇は角頭である。

27～33は斜沈線ないし条線のみられるものである。

27～29は間隔の開いた沈線である。30は太目の斜条線と横位の爪形文が施されている。

34～40は横条線文のものである。

34は口径25.4cmである。浅く太目の条線文のもので、口縁に3cmほどと、胴下半部は無文となっており、外面はケズリ痕が残されている。

口唇角頭をなす。内面はよくナデられている。

35・36は口唇は円頭をなす。37・38は同一個体、39は沈線が太目である。40は26と似ており、同一個体かもしれない。

### B種 太沈線によるもの（41～70）

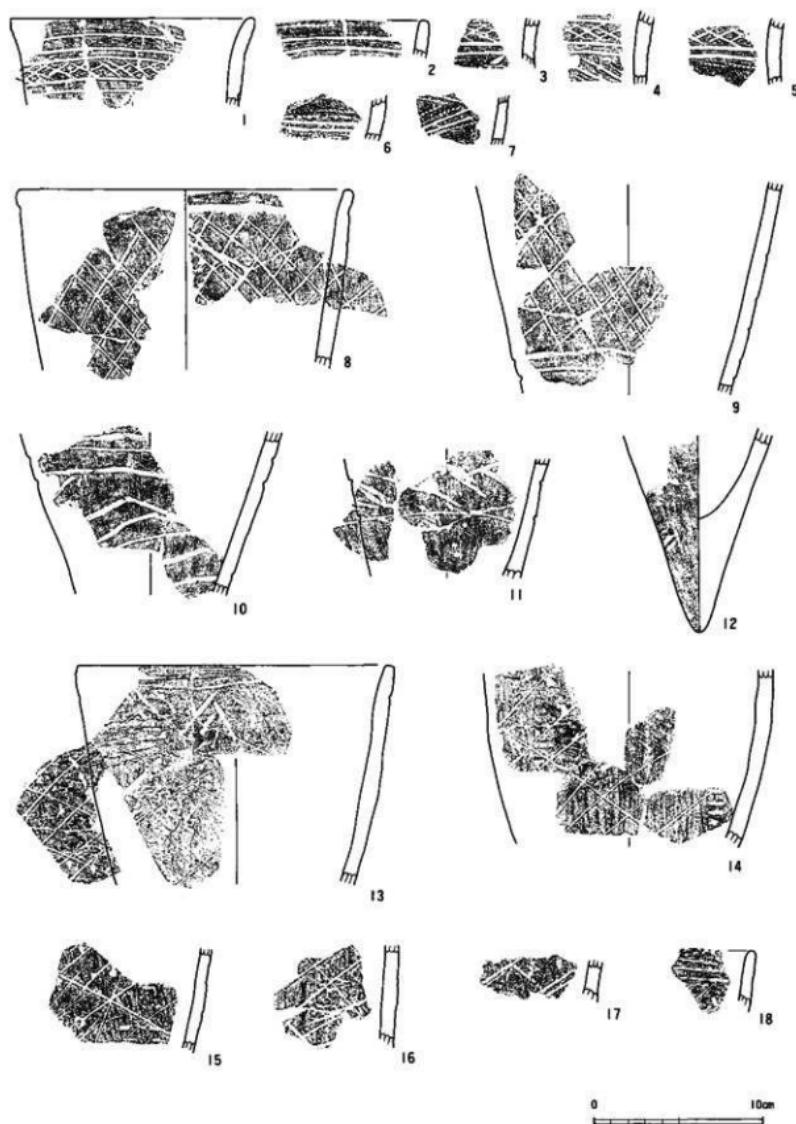
41～48は同一個体である。口縁部に鋸歯状太条線、以下は横位条線区切りを介して縦・横の組み合わせの梯子条線、弧状線がみられる。直線的な口縁で、口唇円頭である。内面は平滑にナデられている。

49・50は同一個体で口縁上端も横沈線で区切られる。上段に鋸歯状条線、下段に斜条線がみられる。内面はきれいにナデられている。

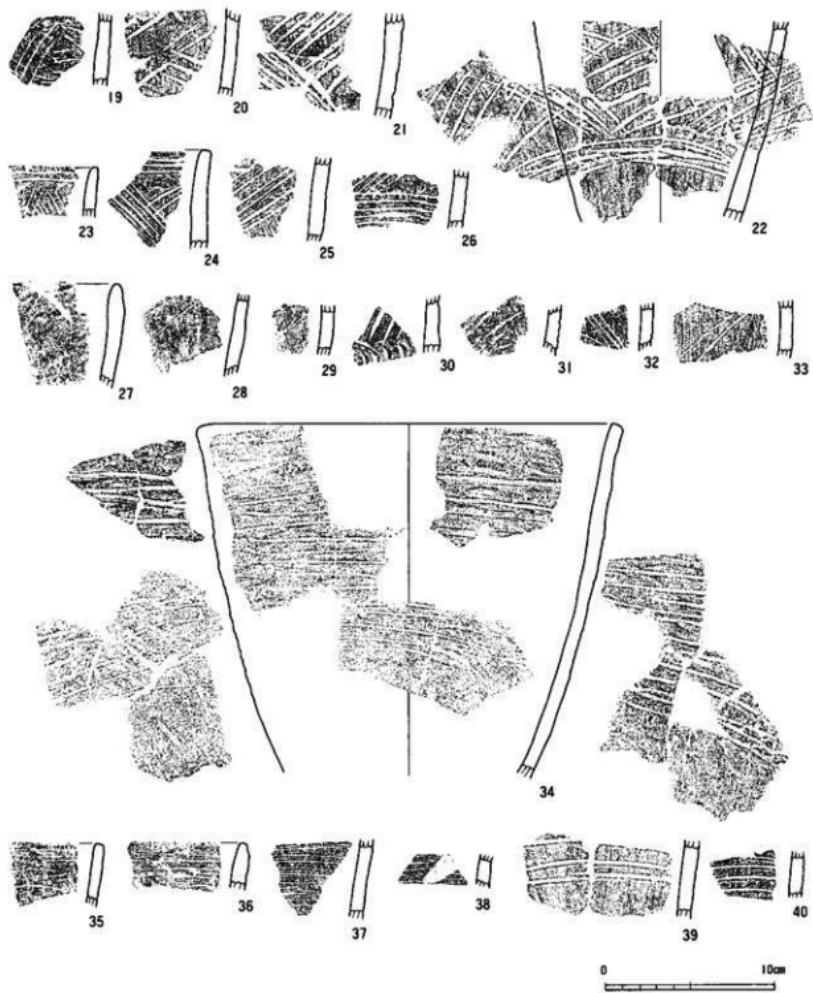
51～65は太沈線（条線）主体に爪形連続刺突文が施文されるもので、よく似た個体である。内面は平滑にナデされている。51・52・56は口縁で端部が沈線によって区切られ、縦条線・弧状線が施文される。53～55は連続刺突文が横区切り線と併置されている。57・60も弧状線がみられる。口縁部であろうか。59・63・64は斜沈線がみられるが、鋸歯状か菱形を構成する一部であろう。また、64では太沈線に細沈線が添えられて施文されている。

65は底部に近いもので、浅い横位条線を持つ。

66は横位短条線を持つ、外反する口縁である。

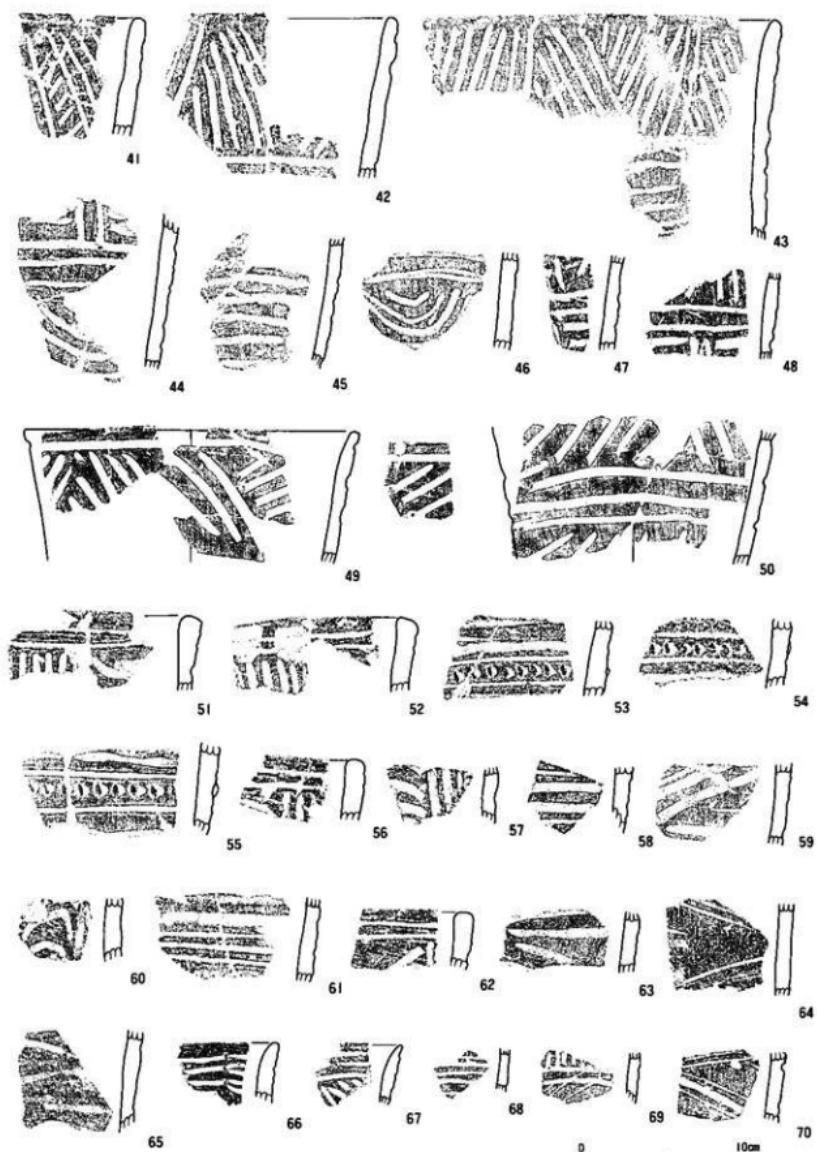


第39図 第II群土器（1）



第40図 第II群土器（2）

67は口端部に横位区切り線があり、以下斜条線がみられる。68は横、69は縦の太条線がみられる。67・69は同一個体で、口縁文様は鋸歯状条線になり、下位には斜沈線がみられる、2段以上の構成になるものであろう。68は胴下部のものだが、腹縁文が上部にあり、繊維を含む胎土で1～7と同一の可能性がある。70は太沈線に細沈線が添えられて施文されている。



第41図 第II群土器（3）

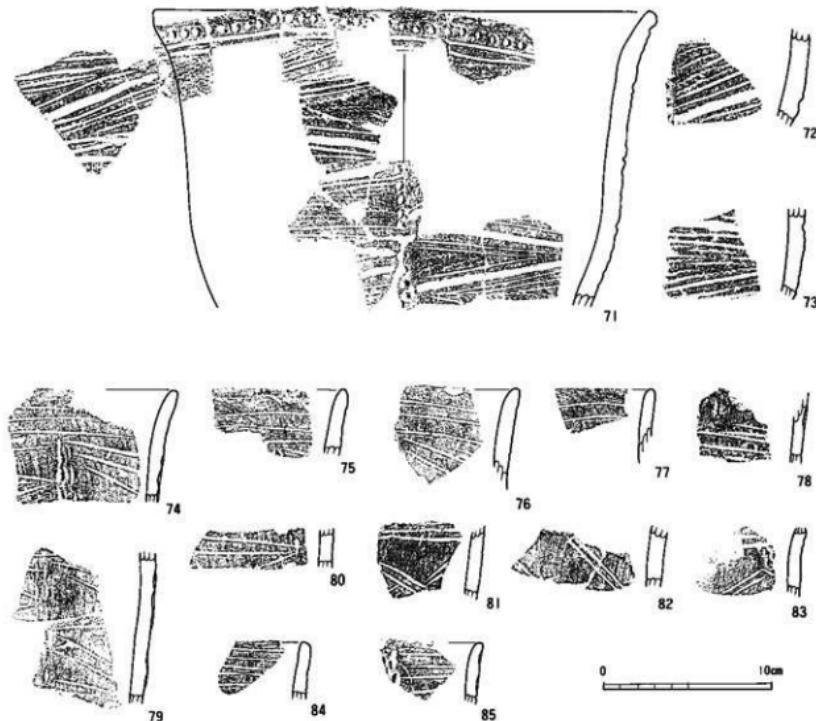
C種 縦区画文様を構成するもの (71~85)

71~73は同一個体である。口径30.2cm、平縁の深鉢形土器で、口縁端部で薄くなり、かるく外反する。口縁上端を横位刺突列・沈線で区切り、以下を4単位の垂下刺突文を施して縦割りした区画に、太・細の沈線を組み合わせたもので鋸歯状文を描き、さらに貝殻腹縁文で充填している。内面は平滑にナデられている。

74~80は同一個体である。器形は71のものに類する。平縁で口縁上部に横位条線があり、以下、垂下爪形文を施して縦割りした区画に、二本組の細沈線で鋸歯状文を描く。内面は平滑にナデられ、口唇も円頭になっている。

81~83は垂下爪形文と二本組斜沈線をもつもので、74以下に似る。82では沈線の端部に短沈線が付されている。

84~85は口縁に横位条線と垂下刺突文を有する。器面が平滑にナデられ、円頭口唇になる。



第42図 第II群土器 (4)

#### D種 連続刺突文を主文様とするもの (86~91・94~96)

86は口径20.5cmの平縁深鉢で、横位条線が角押しの連続刺突文をはさんで施されている。口縁上部でややくびれ、外反する。内面は平滑にナデられ、口唇も円頭をなす。

87は6単位の波状口縁をなし、頸部がややすぼみ、口縁が内湾気味に開口する、キャリバー形の器形である。胴部は膨らみを持つ。口径は33.9cmである。口縁直下、頸部、胴上部に2本組沈線による条線を巡らし、口縁には波状線、胴部には入組文描く。胴部文様帶内には明神裏III式の特徴とされるベン先連続刺突文が沈線に添えられている。地紋に条痕あるいは浅い条線が施文されている。内面は、口縁付近は平滑にナデられているが、胴部はケズリ痕が残されている。胎土に纖維が含まれている。

88~90は同一個体のもので、88・89では連続爪形文、爪形の連続短刻線が横位沈線間に重疊施文されている。90では横位文様帶の一部とみられる斜沈線が施文されている。

91は横位短刻線と沈線施文が、94は連続爪形文と沈線が施文されている。

95・96は条間の開いた条線の上部にベン先連続刺突文が弧状に施文されている。内面・口唇は摩滅している個所もあり。整形痕は不明瞭である。擬口縁かもしれない。

#### E種 腹縁文が施されたもの (92・93・97)

92・93は横位沈線、条線と腹縁文があわせ施文されている。92では縦短沈線があり、縦区画の充填文のものかもしれない。

97は角頭の口唇を持ち、深く粗い腹縁文が斜施文されている。

#### F種 条痕を主文様とするもの (98~104)

98は外面に不規則な条痕様の施文を受ける。浅い太沈線とも見えなくはないが、99以下とも類似しており、ここに入れておく。99~102は不明瞭な条痕地に、不規則な斜沈線が施文されている。内面にも縦条痕が主にみられる。103は内外とも不明瞭条痕のものである。104はケズリ痕が内外面に顕著にある。胎土に纖維を含む。

#### G種 無文土器 (105~133)

105は平縁で、内湾気味に立ち上がる。鉢形土器であろう。口縁に横位隆起帯を1条持つ。隆起帯上、口唇の内外縁に刻み目が施されている。内面はよくミガかれる。外面はわずかに条痕を残す。

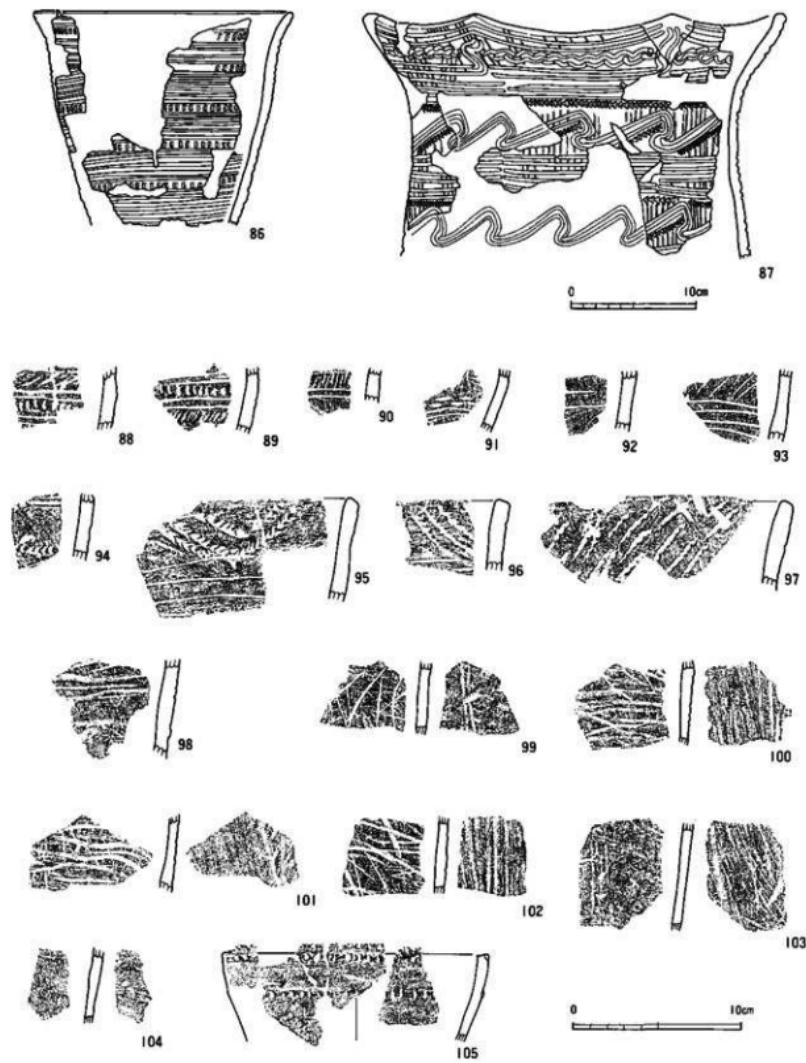
106~115は無文平縁で胎土に纖維を含む。

106~108は円頭口唇で、内外に雑なナデがなされている。胎土に細砂とともに纖維を多量に含む。110~112は円頭口唇で、内外、特に内面は平滑にナデされている。113は外面の縦ナデ痕が顕著である。114は口唇を欠く口縁である。115・116は同一個体で、径は20cmほどと思われる。内面はミガかれている。

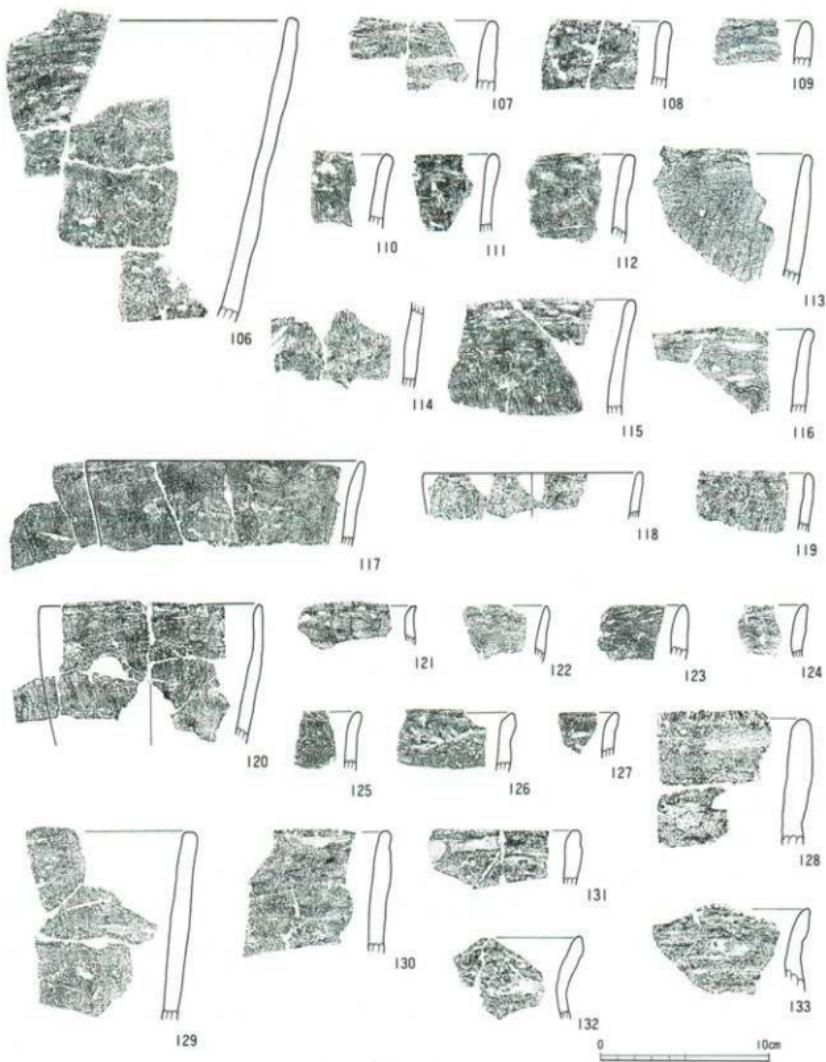
117~128は無文平縁で、胎土に纖維を含まない。

117は口径16.5cmである。口唇円頭で、内外面は平滑にナデられ、特に内面の調整はミガキといつてもよい。撚糸文系土器の無文的なつくりである。118・119は薄手のもので、径は13.0cmほどになる。120は口径13.2cmで、口唇内そぎのものである。胎土には細砂はみられない。121は薄いもので、外そぎで端部が外反しており、外面に調整時の指痕が残されている。胎土に細砂がみられない。123・124はケズリ痕を持つ。125~127は胎土に白色礫を含む。内そぎの口縁になり内面はミガキが顕著である。128~131は厚手で、大型になりそうである。胎土灰質目立つ。接合部で割れ、割れ口が摩滅している。

129・130は波状口縁のものである。上端で外反する。調整は軽めで、砂粒が浮きでたままである。



第43図 第II群土器（5）



第44図 第II群土器（6）

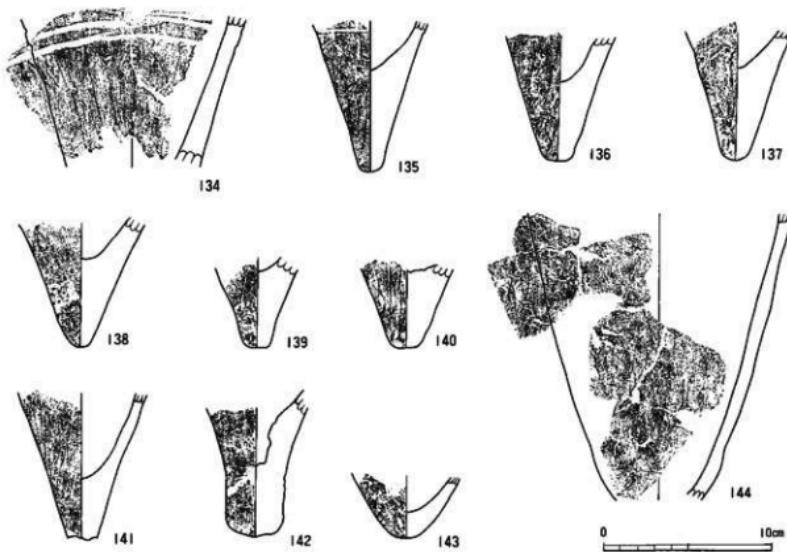
H種 底部 (134~144)

134は胴下部片で、横位沈線がある。

135~139は鋭角な尖底のものである。端部はわずかに平坦となっているもの、摩滅しているもの等がある。135は上部に横位沈線がある。胎土にわずかに繊維を含む。140は末端部は広く平らになっている。142は端部が柱状に突出する。部分的に斜沈線がみられる。

143は鈍角な尖底のものである。

144は纖維を含む、あまり調整が顕著に残されないもので、田戸上層式あたりのものと思われる。



第45図 第II群土器 (7)

#### 第三群土器 (第46図、図版21)

早期条痕文系土器である。茅山下層式に該当しよう。

1は7X98グリッドを中心に出土した。内外条痕文の土器で、口縁に4条の刺突列を有する。かるく開く深鉢形の器形で、口径37.0cm、推定高41.0cmになる。口唇には斜刻線が連続して施され、方向を変えて鋸歯状になる個所がある。胎土に纖維が多く入り、もろい。2は1の底部で、平底で裏面にも条痕が施されている。

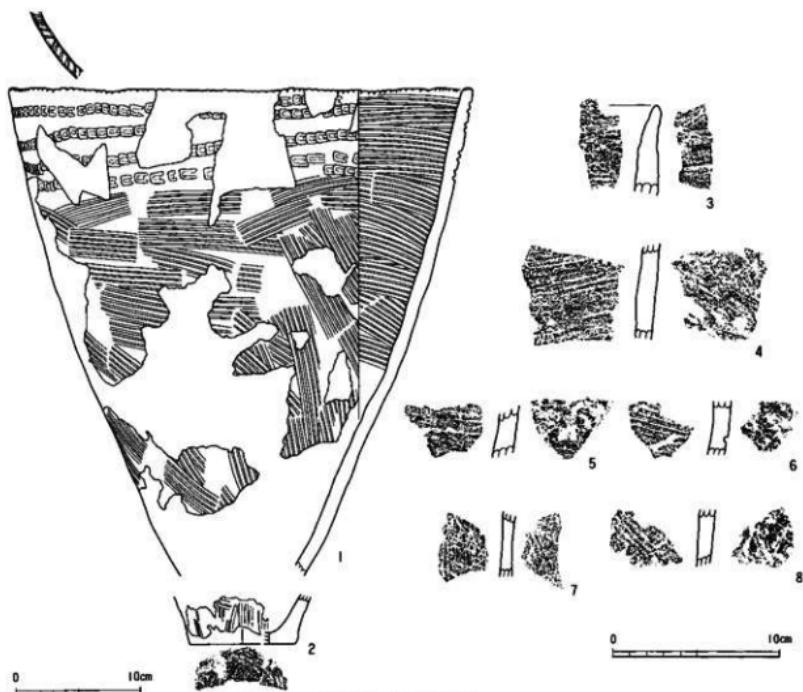
3～6は7Y67グリッドで出土したもので、同一個体と思われる。胎土に纖維、微細砂を含む。3は尖頭状口縁になる。口縁上部はヨコナデされ、条痕が明瞭ではない。4は胸部に内外条痕文が施文されている。

5・6は外面部条痕を持つが、内面は剥落が激しい。

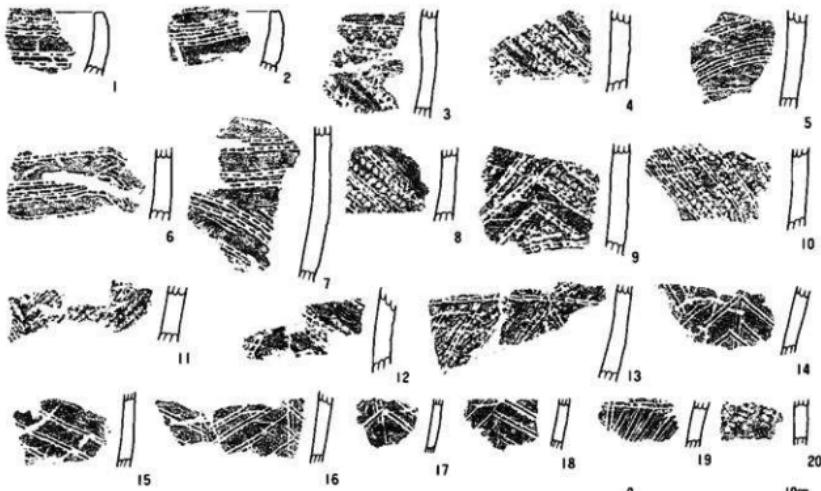
7・8は7Y39グリッド出土である。内外面部条痕文施文を受ける。薄く、小型と思われる。胎土に纖維を多量に含んでいる。

#### 第四群土器 (第47図、図版21)

前期纖維土器である。黒浜式の新しい時期で水子式といわれる類にあたる。



第46図 第IV群土器



第47図 第IV群土器

1～13は結節沈線文で幾何学文を描くものである。口縁はやや内湾しており、キャリバー状の器形になると思われる。かなり大きな個体であろう。沈線文間に繩文が施文される部位と、ナデられて無文帯になる部位がある。内面はミガかれている。

14～18は半截竹管の沈線を綾杉状に配し、肋骨文を描いている。19は半截竹管による幾何学文のみられるものである。

20はLR単節斜繩文が施文されている。内面はナデ程度である。

#### 第V群土器（第48図～53図、図版22～26）

前期の浮島式土器を中心としたもので、若干の諸磯式を伴う。

##### （1）諸磯b式土器（第49図、図版22）

4はLR斜繩文と結節沈線文がみられる。内面はミガキが入る。

5～7はLR斜繩文を地文に半截竹管の沈線文が施文されている。内面にミガキが入る。胎土は細緻をまじえる。8・9は斜繩文が施文されている。原体はLRとみられるが燃りがはっきりしない。胎土に細緻をまじえるもので、これらは出土地点が7Y区で、同一個体のものかもしれない。

##### （2）諸磯c式土器（第49図、図版22）

24は横位の綾杉条線、耳たぶ状貼り付けを有する口縁部片で、諸磯c式である。

##### （3）浮島I式土器（第49図、図版22）

地紋に燃糸文を持つことを特徴とする。

10～18は同一個体で、地文に間隔のあいた燃りのゆるいRの斜行燃糸文を施文しており、二本組沈線で横位文様帶を形成する。口縁上端は横位、以下は波状に施文がみられる。内面はざらついている。

19～21は地紋に間隔のあいた燃糸文が斜位施文されており、同じ燃糸による結節文も施文されている。19では変形爪形文も加えられている。内面はミガキがなされている。同一個体である。

22・23は間隔のあいたr燃糸文を縦に波状施文している。内面はミガキが入る。胎土には微細砂を多く含む。

##### （4）浮島II式土器（第48・50図～53図、図版22～26）

A種 変形爪形文が施文されたもの（1・25～72）

ア 爪形文間に短刻線を伴う

25～31は同一個体である。口縁は端部にかけて肥厚し、口唇外縁に刻み目を有する。爪形は大きめで、口縁上端では沈線が伴っている。30では細い半截竹管沈線が、31では変形爪形文の下部に波状爪形文が施文されている。

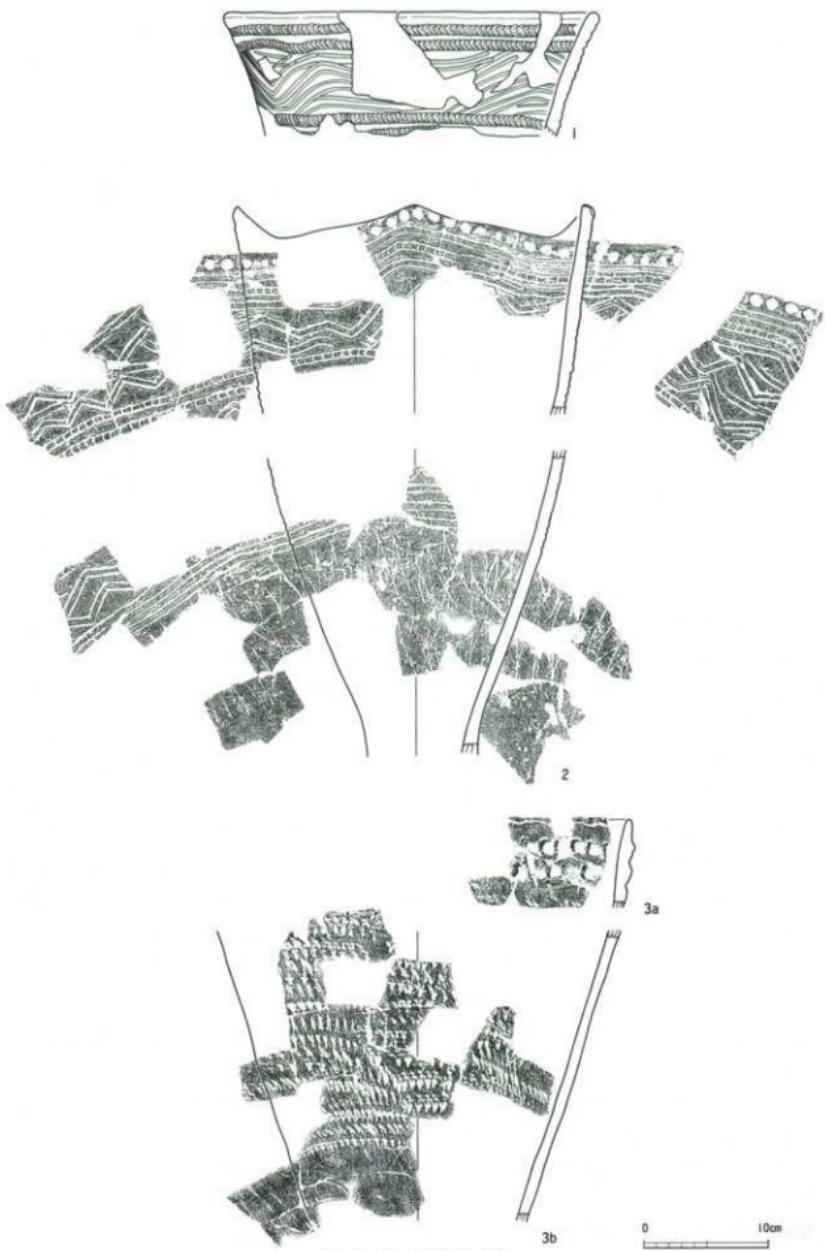
32～37は口唇に太い刻みを持つ。60・61とよく似る。爪形文は深く施文されている。

38～41は薄手、小型の土器で、爪形文、沈線とも細い。40では沈線区画内に半截竹管での刺突文がみられる。口唇内面ともミガキが入る。

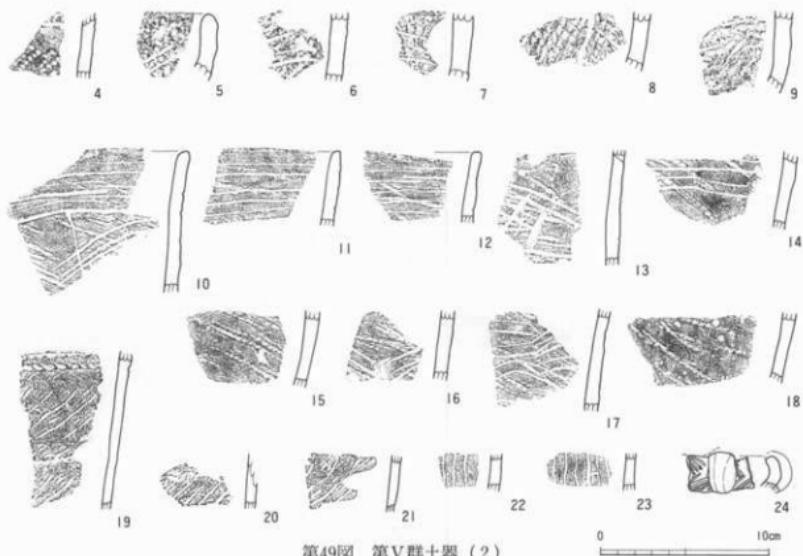
イ 短刻線を伴わない

1は2条の変形爪形文で上下を水平に施し、文様帶区画内に波状の半截竹管沈線を施している。胎土には細砂が多くみられる。口唇円頭で、口唇・内面は平滑にナデられている。

42～67は変形爪形文を横位に巡らし、文様帶を区画しているもので、区画内は半截竹管の斜沈線の組合



第48図 第V群土器 (1)



第49図 第V群土器（2）

0 10cm

わさった文様が施されている。

42は大柄な変形爪形文が二本組沈線を伴っている。文様帶内は鋸歯状に組み合った条線文がみられる。43～46は同一個体で、区画内は斜行沈線の組み合わせた文様である。49～52も同一個体で、52では短沈線が施されている。55～57は同一個体である。58・59は小型個体である。60・61は口唇に太い刻みを持つもので、口径約30cmになる。胎土に細砂が多い。内面横ナデされている。62～67は同一個体とみられる。

68～72は斜沈線の組み合わせがみられる胴部破片で、連続刺突文を伴う。区画内の文様であろう。

#### B種 沈線で横位文様帯を形成するもの（2・75～136）

2は4単位の波状口縁をなす深鉢形土器である。かるく外反する口縁をなす。半截竹管の横位沈線、押引手法による結節沈線で2段の文様帯を区切り、区画内に波状を基調とした文様を施文している。口唇部には太い連続刺突文が加えられている。胴下半部は大柄な波状爪形文が2列横位施文されている。底部附近は無文である。胎土は細砂を含むもので、4の土器に近似しており、結節沈線も共通している。

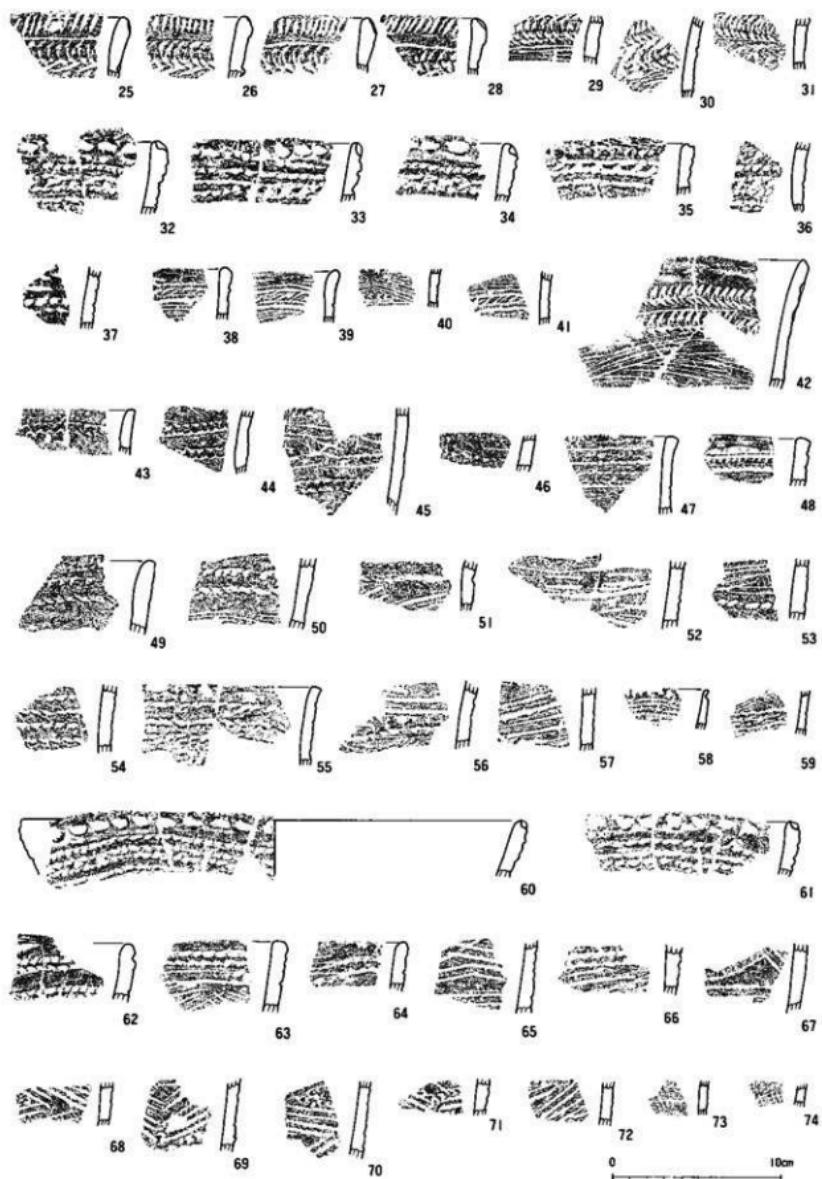
諸磯b式に近似しており、沈線文の意匠は浮島I式にも共通性がある。波状爪形文はII式の特徴的な文様である。浮島I式の新しいところか、II式の古手のものであろう。

75～83は同一個体で、口縁直下に横位、以下横位波状に半截竹管沈線が施文されている。胴下部は縦に近い斜めになる。

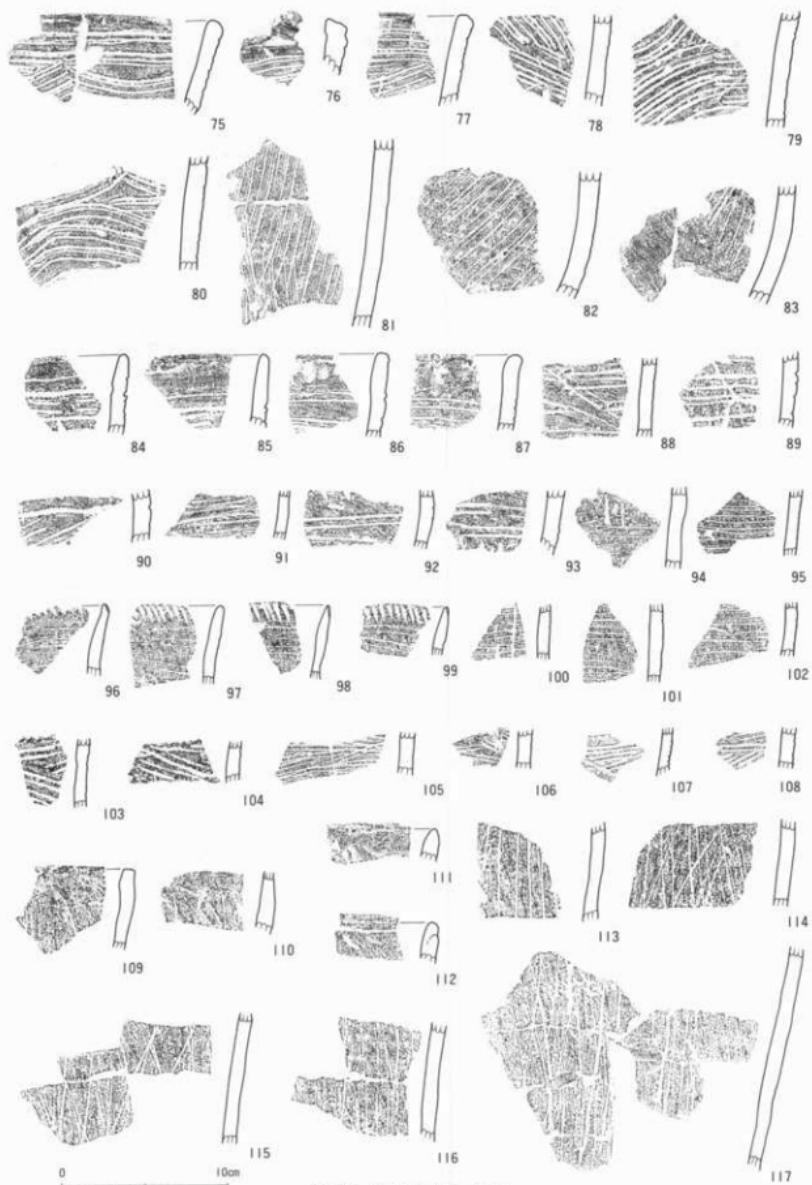
84～94は半截竹管の沈線が横位施文されている。地点が近いが、84・85と86・87は別個体であるので、2個体以上はある。93は沈線の下位に波状爪形文がある。

95～102は口唇尖頭で外縁に縦短刻線を持つ。文様は半截竹管による横位の細い条線文をなす。同一個体である。

103～108は半截竹管で斜沈線がみられる。105～108は竹管の細いものが使われている。



第50図 第V群土器（3）



第51図 第V群土器 (4)

#### C種 縦沈線を主文様とするもの (111~136)

111~117は条線を持つもので、口縁部ではほぼ綫位であるが、胸部綫長の格子目状になる。条線は外面に接合痕が残り、112では沈線状になる。細砂を多く含む胎土であり、砂が器面に浮き出る。接合部で水平に割れている。

118~122は縦波状沈線を持つ。一見すると条線だが、幅広の叉状工具を用いている。また左右端を交互に支点にして回転して移動していく波状文になる部分がある。口唇に刻みを持つ。内面には細かい擦痕の横ナデがある。胎土に微細砂を多量に含み、砂が器面に浮き出ている。

123~130は外面に接合痕が残され、縦条線が接合痕をつぶすように施文されている。接合部で割れる。

131~133は細かい縦条痕文がみられる薄手の胸部片である。

134・135は接合部で水平に割れており、折り返し状になるかもしれない。斜ないし弧状の条線があり、一部は接合部に彫刻手法で鋸歯状の刻みがみられる。口唇にも刻み目を有する。136は斜条線がみられる。口唇にも同じ条線が施されている。

#### D種 指頭圧痕文を持つもの (3・137~163)

指頭圧痕文は粘土帯接合部を水平に連続して指で器壁をつまみ上げて、凹凸文を施したもの。ケズリやミガキ調整が口縁部外面ではなく、接合部が消され切れずに残されているものがある。

3はバケツ形になる深鉢形土器で、口径34.0cmである。口縁は2列の指頭圧痕文があり、胸部は波状爪形文、底部付近は縦ナデが入り、無文である。胎土は砂が多い一般的なものであり、口縁外側は調整が少ないので、砂の粒子が浮いてざらついている。内面は平滑化されているが、剥落が目立つ。

同一個体のセットは(137・138)、(141~143)、(145・146)、(147~150)、(151~156)、(157~162)である。

141・142は尖頭の口唇になる。151・152は口唇に刻み目を有する。153・154では口唇の刻み目に加え、口縁上端に横位沈線を有している。139・144・163は貝殻文を下位に伴う。

#### E種 波状貝殻文を持つもの (164~203・216)

164~184はおそらく肋のない貝を用いたとみられる波状爪形文を持つものである。

164~166は間隔が広い波状である。164の口唇は内傾している。167~170は密な施文である。口縁は尖頭になる。173~175、182~184も密な施文である。

171・172は工具の両端部だけが押捺された変形なものである。179も変形であり、181は不規則な縁の爪形工具で、密接に施文されている。

185~203は肋のある貝を用いた波状貝殻文のものである。

185は口唇が外傾し、連続刺突文が施されている。186は小型品であり、貝殻文は密である。189は変形爪形文を伴う。貝殻文は押し引き型であるが、同一個体の190では波状をなしている。

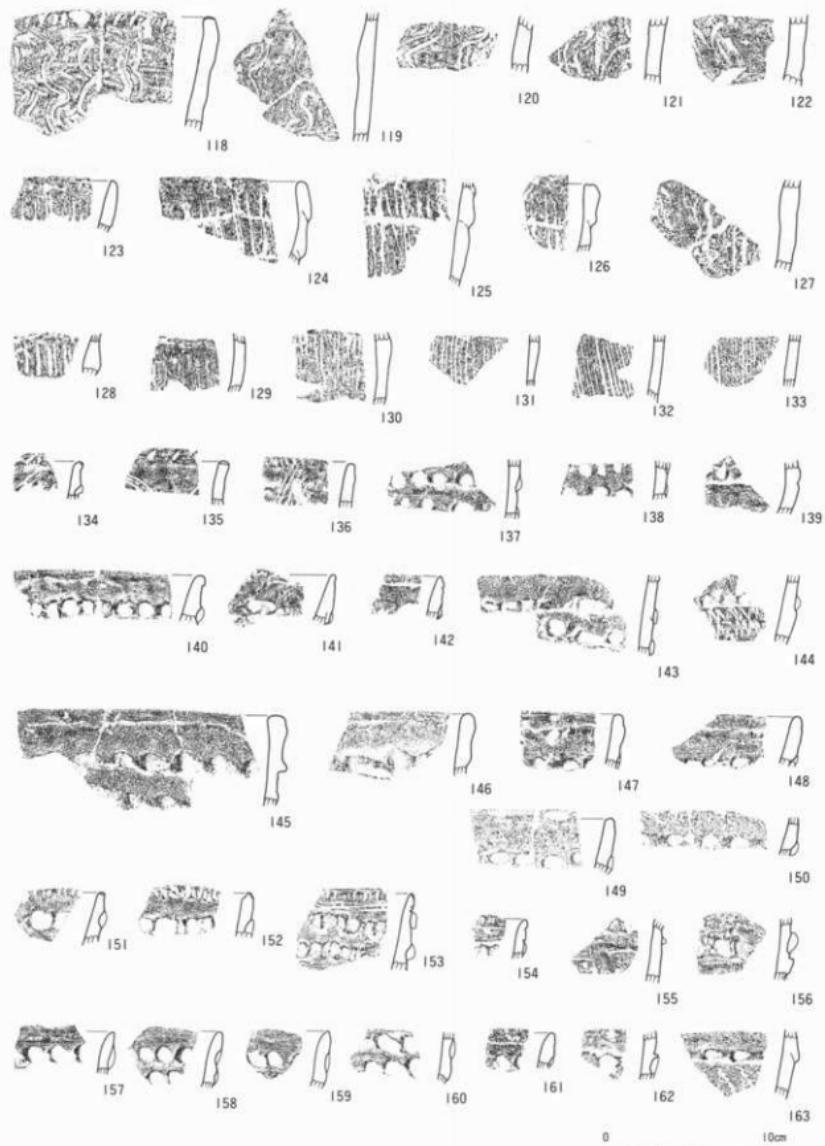
216は横位条線に有肋の波状貝殻文が添えられている。

#### (5) 浮島式III式土器 (第53図、図版25)

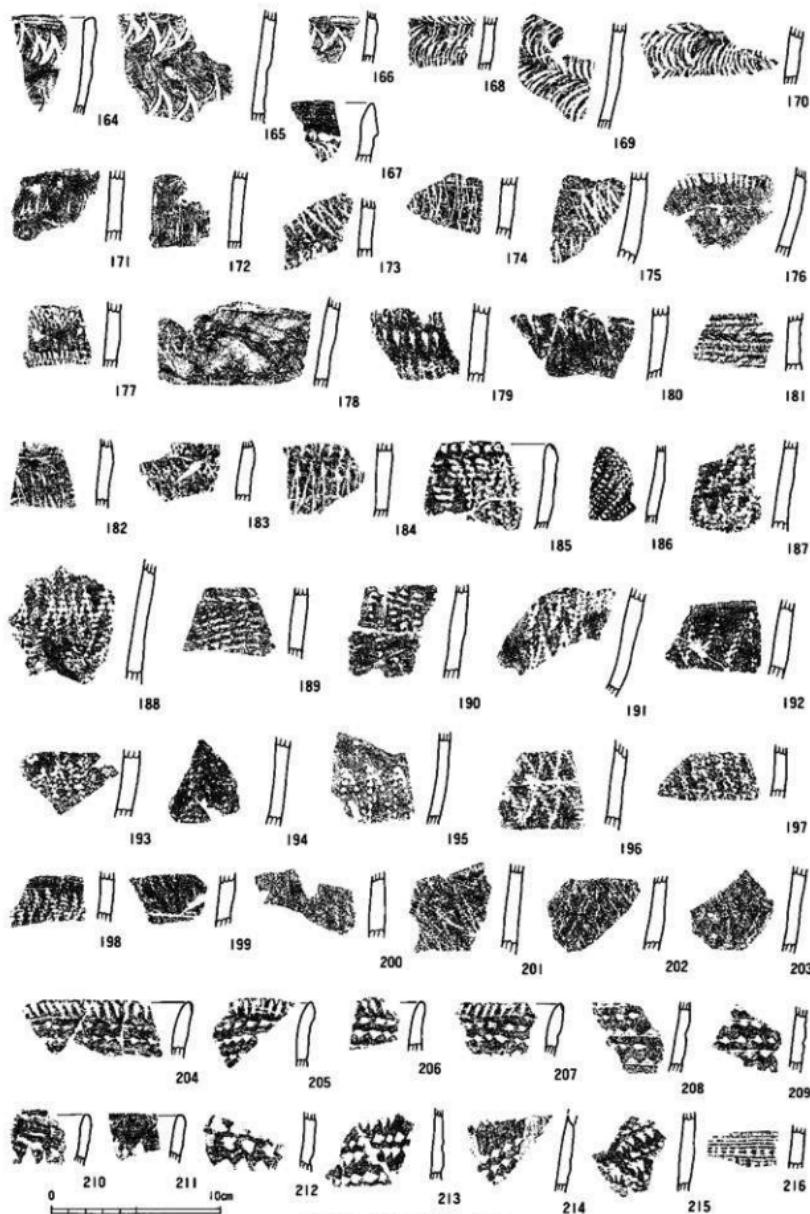
いわゆる三角文を施文されたもので浮島III式である。

204~209は同一個体である。口唇尖頭で、外縁に縦刻みを持つ。内面は平滑である。210・211は口唇に刻み目がない口縁で同一個体である。先端に向かい薄くなっている。

212~215は胸部である。



第52図 第V群土器 (5)



第53図 第V群土器 (6)

(4) 興津式土器（第50図、図版23）

73・74で、沈線区画内に有肋貝殻腹縁文を充填している。

第VI群土器（第54図、図版27）

(1) 前期末から中期初頭の斜縄文土器（1～20）

1～6は口縁に3条の連続刺突文、口唇部指頭刻みを有する。綾縁り（結節）を持つ斜縄文が地文になっている。胎土には白色礫が多くみられる。

7～9は細かい無節L斜縄文を有するもので、口縁は折り返し状をなす。外面縦ナデ痕が残る。内面は荒れてざらついている。

10・11は横位斜縄文のもので、10は波状口縁の突起部で折り返し状口縁をなす。11は綾縁り文があり、一部は方向を変えて羽状をなす。内面は平滑に調整されている。胎土に砂は少ない。12・13はLR斜縄文施文のものである。12は胎土や調整は11に近い。

15～17はRL結節斜縄文を持つものである。

18～20はLR綾位斜縄文を持つものである。18は口縁で、円頭の口唇になる。上端に凹線が巡る。20には綾縁り文がみられる。胎土に白色礫を多く含む。五領ヶ台式になろうか。

(2) 五領ヶ台式土器（21～27）

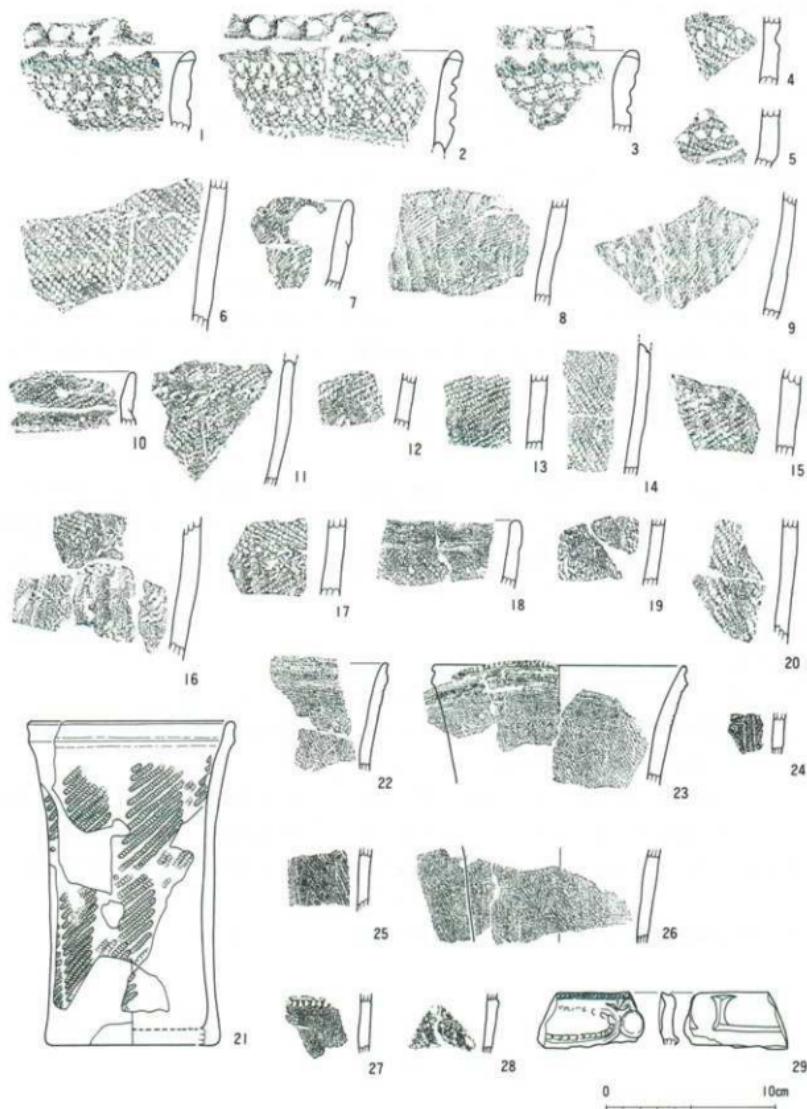
21は糸巻き形をなす平縁の小型深鉢形土器で、口径12.5cm、高さ18.4cmである。口縁に隆起線を1条巡らせ、綾位斜縄文を帯状に配している。胎土には砂が少ない。内面は平滑である。

22～26は21と同様、口縁部に隆起線を有し、糸巻き形の器形を持つもので、口径は約15.0cmである。口縁以下は撚糸文を地文として、細沈線に連続刺突文を添えて幾何学文を描く。口唇が端部で外反し、隆起線と接続して細い棒形を形成し、さらに沈線・刺突文が加えられている。その下位にも細沈線・連続刺突文を添えて棒形文を複数段構成している。側面に環状突起の剝落した個所がある。突起部からは沈線が垂下する。突起は4単位であろう。撚糸文はタテ無節Rで縄巻き的である。胎土は砂が少ない。内面は平滑である。

27は横位沈線に連続刺突文が添えられている。内面にはミガキが入る。胎土に細砂を含む。五領ヶ台式に含まれるか。

(3) 阿玉台式土器（28・29）

28は曲線の隆起線文がみられる。胎土に細砂を含む。29は折り返し状の口縁で、外面には貼り付け文、細い角押し沈線による棒形文様があり、ボタン形・波状貼付文も加えられている。内面はよくミガかれ、彫刻手法による鍵の手状刻線がみられる。口唇部にも角押し沈線がある。胎土は細砂がみられる。これらは阿玉台式土器になろう。



第54図 第VI群土器

#### 第VII群土器（第55図、図版28）

後・晩期の土器である。

1は舟形土器である。底部・口縁の平面形が横円をなす浅鉢形土器で、3分の1程度の残存度である。高さは5.4cmである。平らな底部から体部へ緩やかに立ち上がる。口縁は外反している。底部の両面はよくミガかれ、体部に疎らなヨコミガキがみられる。後期のものとみられる。

2は後期の浅鉢形土器の口縁部で、内湾し、内面にミガキが入る。

3・4は横位無文帯を挟んで鋸齒状沈線が上下に施されているもので、加曾利B式のものと思われる。底部付近は無文である。胎土には微細砂が含まれる。

5は姥山II式の精製深鉢形土器で、口径16.8cm、胴部最大径18.8cm、高さ24.7cmで、3分の2が残存している。B字形小突起を持つ平縁で、頸部が幅広く、胴が張って底部が極端にすぼまる。底径は4cmほどである。沈線で横位無文帯を区切り、沈線と縄文を施す横位文様帯が配されている。頸部には横V字文と入組文を組み合わせ、V字内は磨消されている。胴肩部にも縄文を組み合わせた入組文がみられる。胴部下部にはケズリ痕が消され切れずに残っている。内面は上部はよくミガかれている。胎土には細砂が含まれる。

6～12は晩期安行式の粗製土器とみられる。6・7は横位弧状条線の土器で、口縁上端に連続刺突文を伴う。不明瞭だが、地文に縄文がありそうである。円頭、肥厚する口縁で、内傾する。胎土には微細砂が含まれる。8～12は薄手で縄文を地文に斜位細沈線を施された胴部である。下位は無文で、被熱により剝落が激しい。ススの付いたものもある。

#### 底部（第56図）

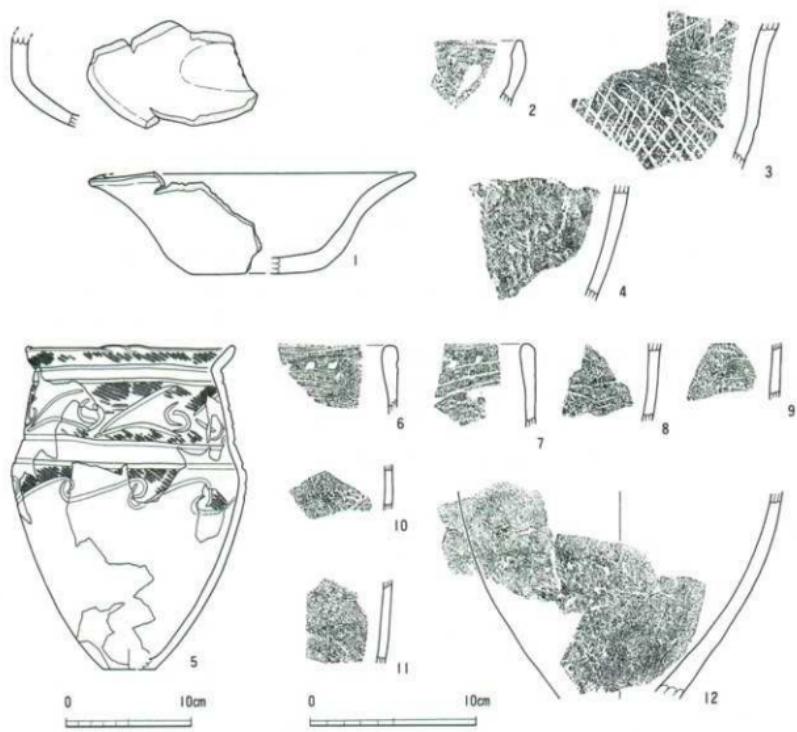
平底の底部である。口縁・胴部の量から類推して浮島式が多いとみられる。

1～4は底板が極端に張り出す。外面はミガキに近くナデが入り、底面は平滑でミガキといってよい。1は小型で、爪形文がみられる。浮島式である。

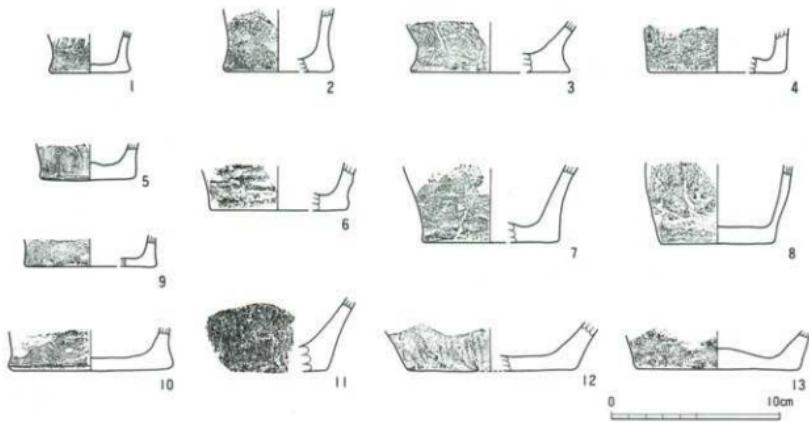
5～8は底板が張り出し気味もので、底面はミガかれている。7は外面に横位のナデ痕が沈線状に残されている。8は胎土に何か混ざっているようで、器面に細かい抜けた孔がある。種子かもしれない。

9・10は直角に近く立ち上がるものであり、底面はミガキが入る。9は底板と粘土帯の接合部が観察される。

11～13は底端部から斜めに立ち上がる。12は外面から底裏がミガかれている。



第55図 第VII群土器



第56図 底部

### 3 出土石器

縄文時代の包含層から検出された石器群は、約14%(点数比)のグリッド一括資料以外の1,259点(34,045.5 g)について出土位置が計測され、平面図の作成が可能であった(第57図)。

包含層出土の土器・石器群の分布は大きく北区・南区の2地点に分かれる。両地区の間には現地形でも確認できる台地の抉入部が存在する。いわゆる埋没谷であるが、当時は、もう少し明確に谷を形成していた可能性が高い。

#### a. 北(集中地)区(第58図~61図、第8・12表、図版29)

**分布** 北集中地区は5A・5B区を中心にひろがる。東西約60m・南北約50mの範囲に土器包含層と重複して、視覚的に4か所の集中域を形成している。土器と石器の分布はその量比によって、石器を主体とする集中域3・4と土器を主体とする集中域1・2に分けられる。石器の接合関係は集中域内に収まる傾向が強いが、1個体だけ集中域3と集中域4に接合線がまたがる。

垂直分布図から、南東方向に下る斜面上に遺物集中が広がっていることが理解される。

石器集中域に重複する出土土器は南区と比較して少ない。早期田戸下層式・前期浮島式が見られるが、量的には後者の方が主体を占める。石器群がどちらの時期に属するのか判断は難しい。

**出土石器** 石鐵4(第59図1~4)、調整痕のある剝片1(6)、剝片9(5)、敲石1、礫64、礫片131点の合計210点が出土した。

石鐵は4点出土した。1の基部は浅い抉りが入っていたと思われるが、両脚は欠損している。2・3は基部に浅い抉りがみられ、側縁が外湾する資料(2)と内湾する資料(3)にわけられる。4は茎部を欠損しているが有茎石鐵である。1が黒曜石、2~4がチャートを用いている。

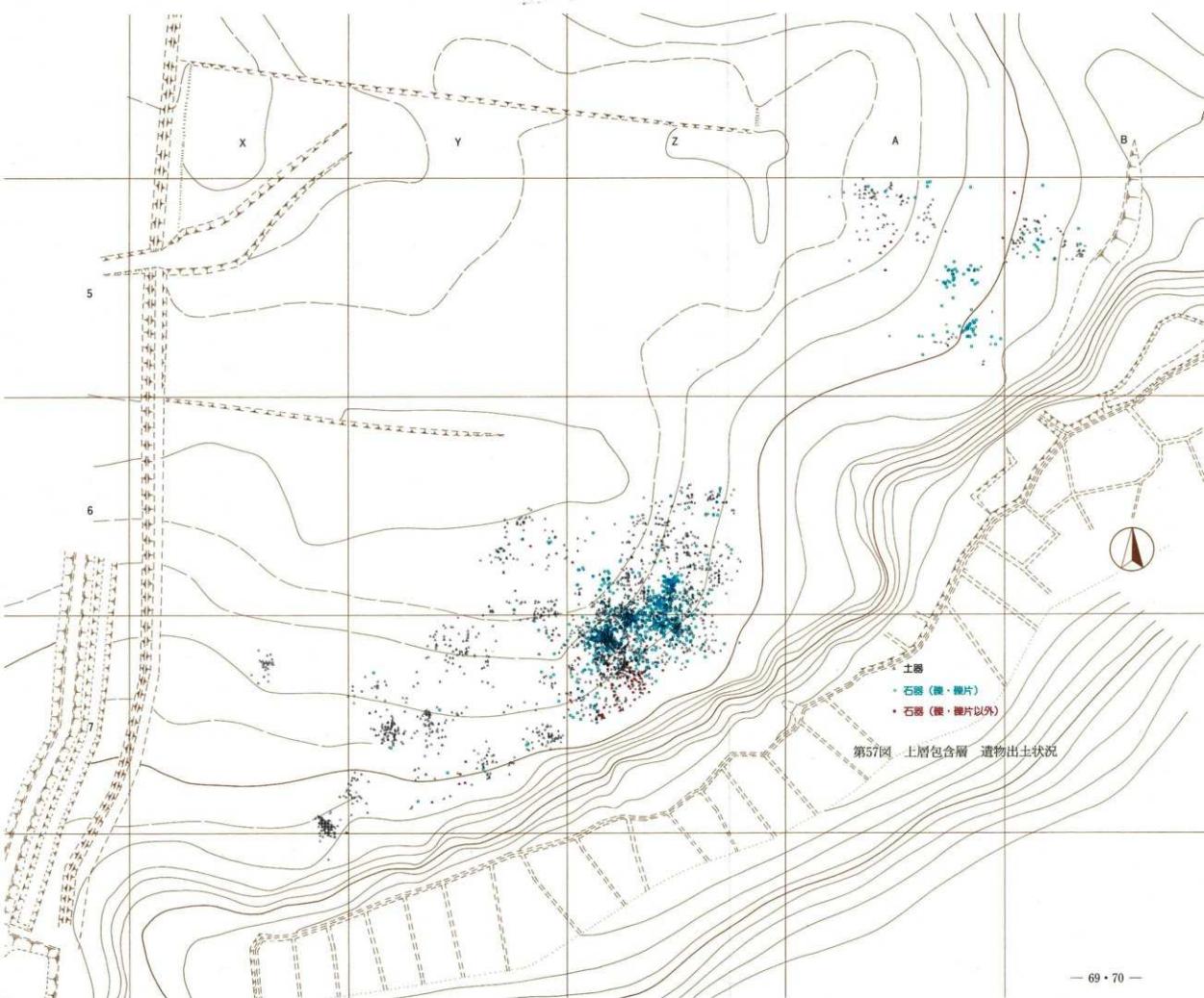
剝片石器の点数は少なく、北区では積極的な石器製作は行われていなかったと考えられる。剝片石器に用いられた石材は黒曜石・安山岩・チャートを主体とする。

また、焼跡が集中する礫群を數基検出した。破損礫は集中域3と集中域4に割合で集中した状態で検出され、完形礫は、土器が主体を占める集中域1と集中域2に散漫な状況で出土するなど、その状況は礫の遺存状況により大きく異なる。大半の礫・礫片の表面は、被熱により赤化しており、礫片の大半の破損面についても同様に赤化している。

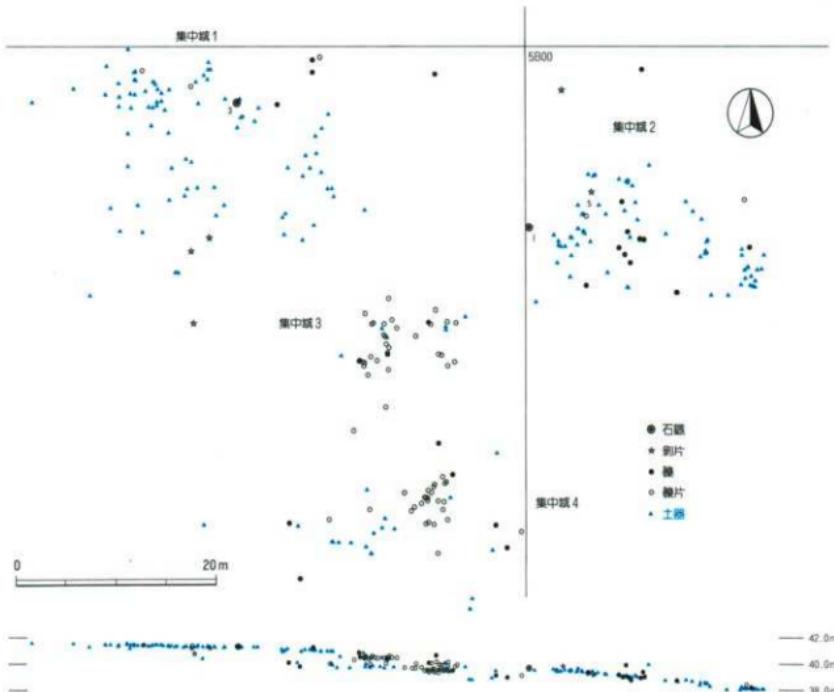
礫群を構成する礫・礫片の石材は流紋岩・チャートを主体に花崗岩・砂岩が加わる。

第8表 北区 石器組成表

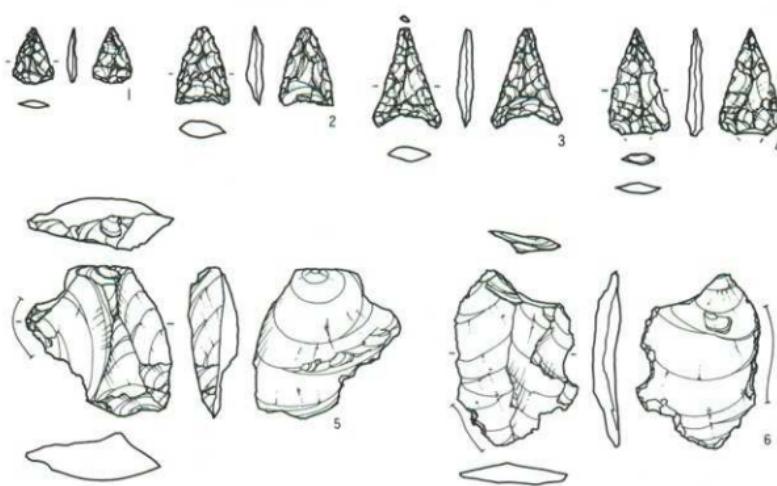
石種	調整痕 のある 剝片		剝片	敲石	礫	礫片	合計	組成比
	3	3.2						
流紋岩					20	53	73	34.8
					657.9	1,357.4	2,015.3	45.3
チャート	3	3.2			35	25	67	31.9
					532.7	325.9	861.8	19.4
花崗岩			229.7		2	19	22	10.5
					33.3	995.9	768.9	17.3
砂岩					1	16	11	5.2
					16.8	272.8	283.6	6.4
安山岩		5				3.3	6	2.9
		16.1					19.4	8.4
安山岩B					31.1	31.1	0.7	0.9
トロトロ石					17.2	1	1	9.5
						17.2	0.4	
黒曜石	1	1	3			5	2	2.4
	0.2	6.7	14.1			21.0	0.5	
ホルンフェルス					1	2	3	1.4
					5.7	57.5	63.2	1.4
粘板岩						2	2	1.0
						11.1	11.1	0.2
凝灰岩						1	1	0.5
						8.3	8.3	0.2
結晶石岩						1	1	0.5
						51.7	51.7	1.2
蛇紋岩						1	1	0.3
						4.9	4.9	0.1
頁岩			1				1	0.5
			0.1				0.1	0.0
片麻岩						1	1	0.5
						24.6	24.6	0.6
不明					4	16	14	6.7
					33.1	236.8	269.9	6.1
合計(点数)	4	1	9	1	64	131	210	100
合計(重量)	3.4	6.7	30.3	229.7	1,278.0	2,903.6	4,452.1	100
組成比(点数)	1.0	0.5	4.3	0.5	30.5	62.4	100.0	
組成比(重量)	0.1	0.2	0.7	5.2	28.7	65.2	100.0	



第57図 上層包含層 遺物出土状況



第58図 北集中区 石器出土状況－器種別



第59図 北集中区 出土石器





0

20m

5800

- 流紋岩
- ▲ チャート
- 花崗岩
- 砂岩
- ★ 黒曜石
- △ 安山岩
- ◆ 安山岩日
- \* ホルンフェルス
- 馬岩
- 片麻岩

第60図 北集中区 石器出土状況－石材別



0

20m

5800

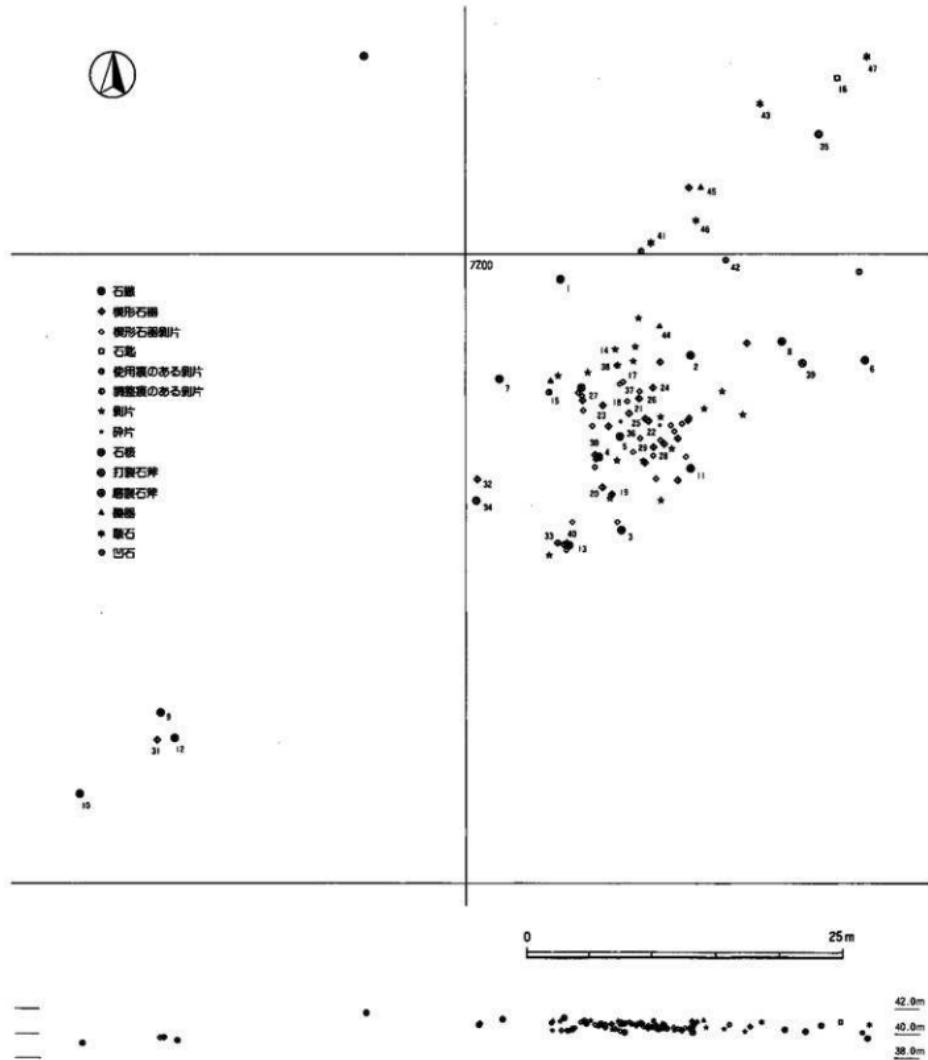
- 0~10g
- ~50
- ~100
- ~200
- ~500
- 500以上

第61図 北集中区 磚群重量別分布図

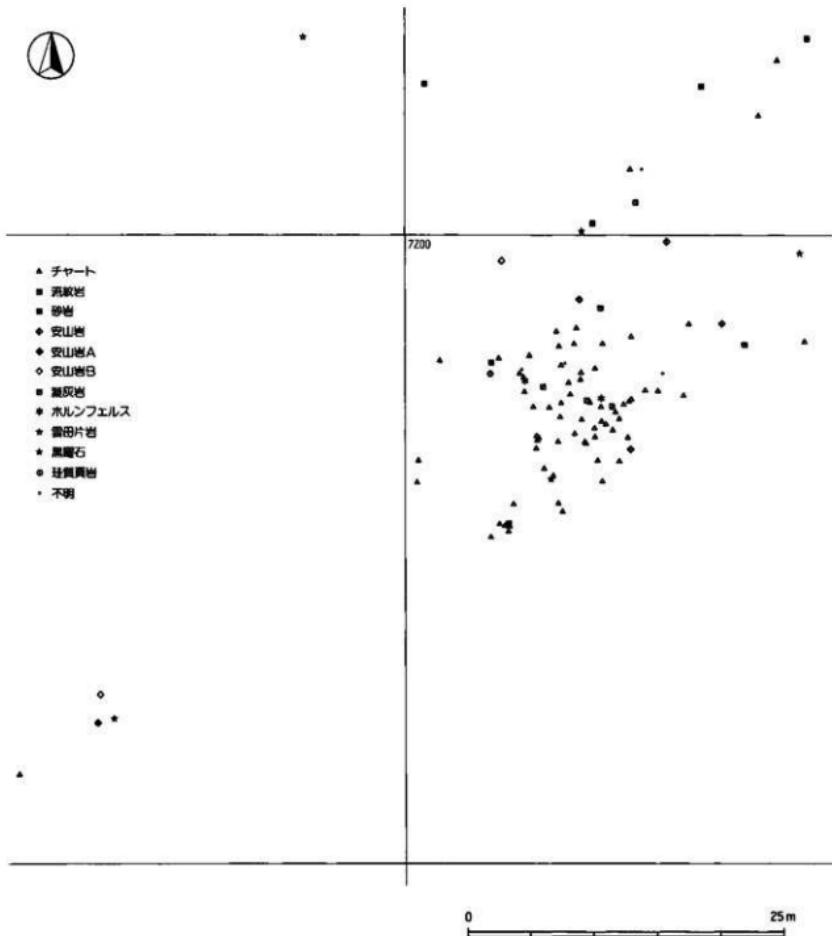




- 石器
- ◆ 楕形石器
- 楕形石器剝片
- 石器
- 使用面のある剝片
- 調整面のある剝片
- \* 剝片
- △ 鈎片
- 石核
- 打製石片
- 感覚石片
- ▲ 鏽核
- \* 駆石
- 出石



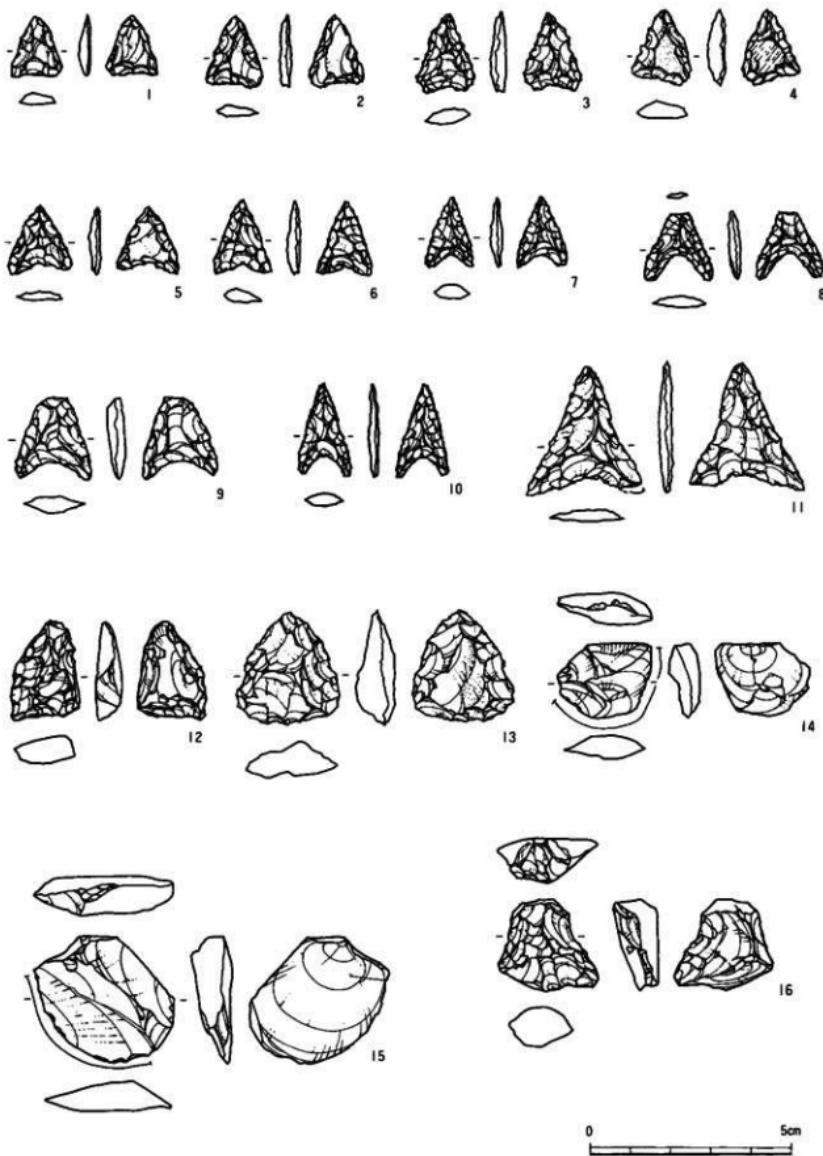
第62図 南集中区 石器出土状況（礫・礫片以外）—器種別



第63図 南集中区 石器出土状況（礫・礫片以外）－石材別

いが、中には、90度回転して打撃方向を変えている資料もある（21・30）。また比較的大型の素材を用いて両極剥離を繰り返した資料もあり、厚みのある石核状のもの（34）と剥離が進行して柱状を呈するもの（35）が特徴的に存在する。

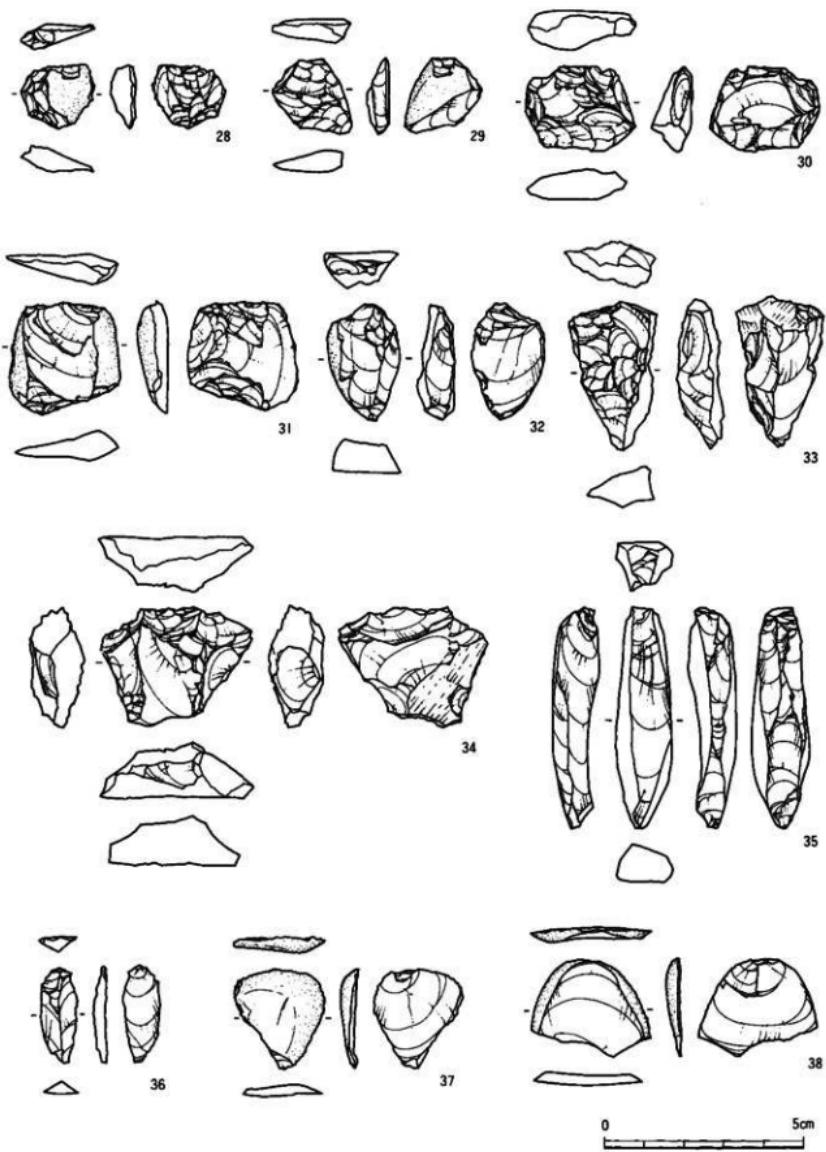
これら石鋸や楔形石器をはじめとする剥片石器はチャートを主体的に用いて、黒曜石・凝灰岩等がこれに加わる。



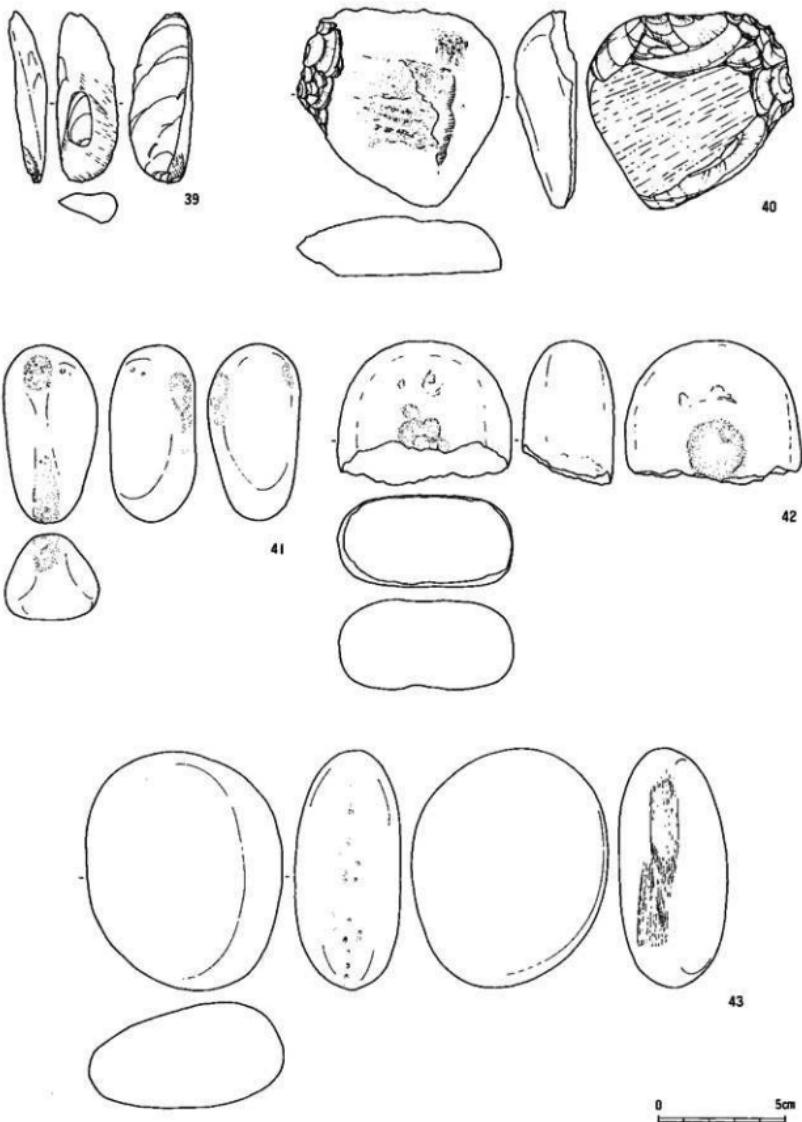
第64図 南集中区 出土石器（1）



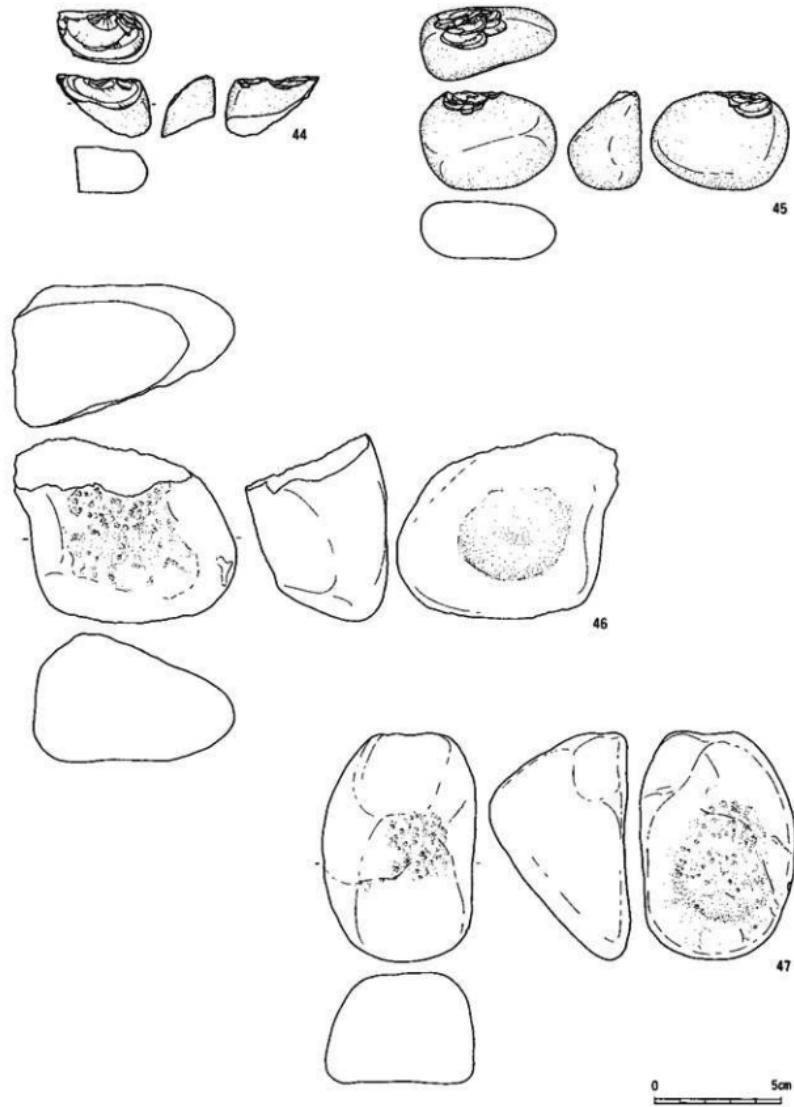
第65図 南集中区 出土石器（2）



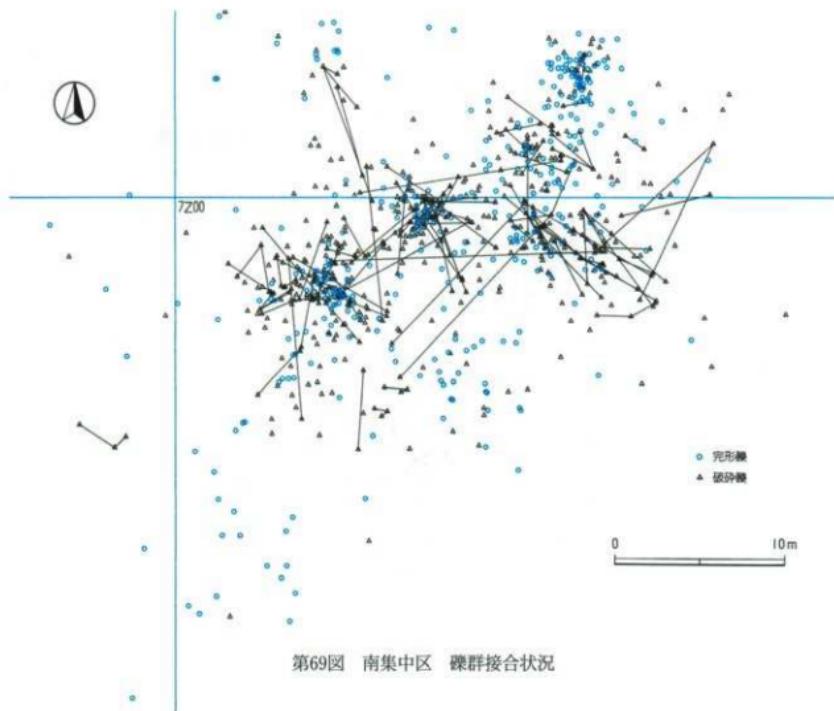
第66図 南集中区 出土石器 (3)



第67図 南集中区 出土石器 (4)



第68图 南集中区 出土石器 (5)



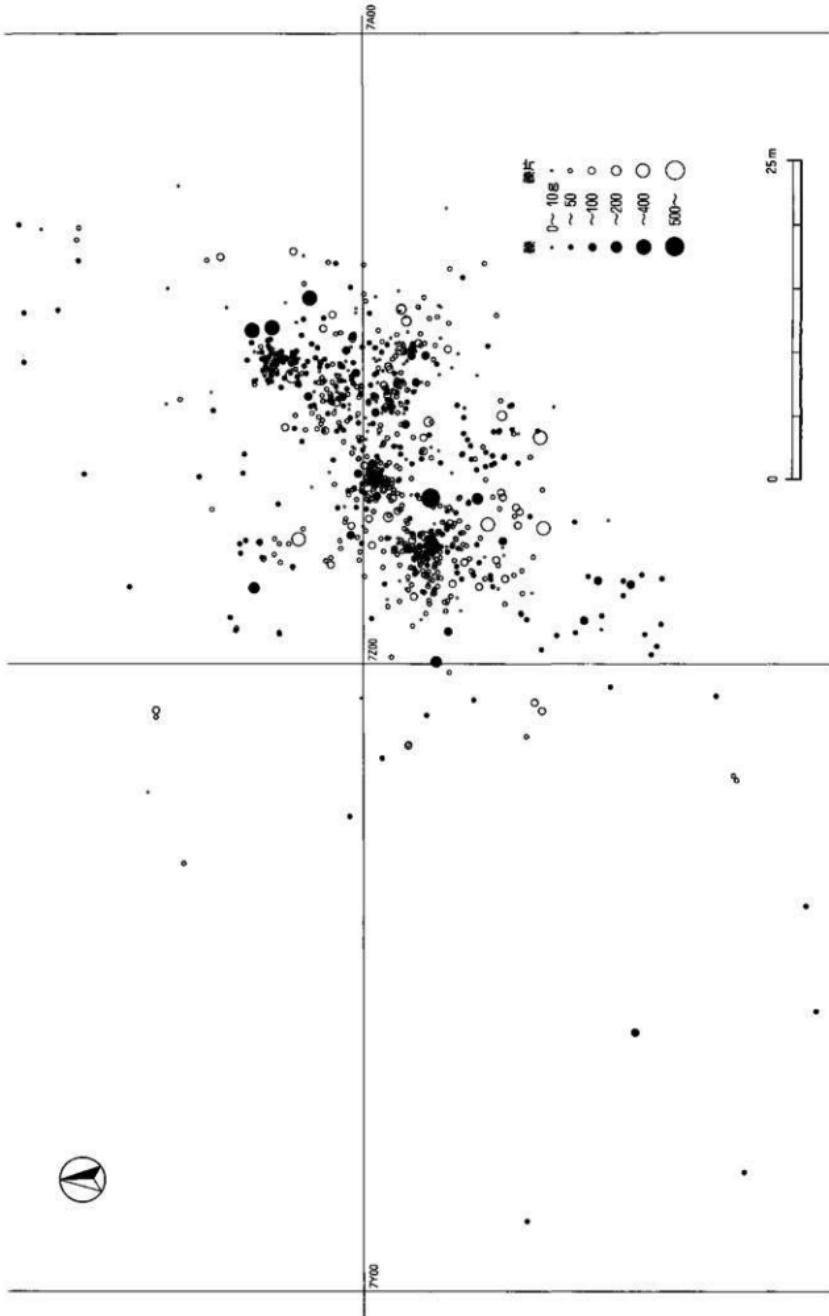
第69図 南集中区 碓群接合状況

石斧や敲石などの礫を素材とした石器の分布は、傾向として、両極剥離を主体とした集中域の周縁に位置する。磨製石斧は刃部が1点検出されている(39)。40はチョッパー状の刃部をもつ礫で原礫面平坦部には引っ掻き傷のような敲打痕が観察される。41は小型梢円礫の端部に敲打痕が観察される。敲打痕の観察される資料は他に46と47があるが敲打痕が、礫の端部以外の平坦部にも及んでいることは特徴として指摘できるかもしれない。両極剥離に使われたハンマーもしくは台石であった可能性もある。42は平坦部中央に浅い凹部をもつ石器である。43は扁平円礫の縁辺に摩耗状の平坦部が観察され、一部には敲打痕がみられる。

礫・礫片は1,010点(29,546.4g)が検出された。平面図を作成すると南西から北東方向に帯状に比較的密集した集中域(礫群)を捉えることができる。破損礫の接合関係などから4~5地点の礫群を想定できそうである。全体的に西側の集中域(礫群)の方が密集し、まとまった状況を見る能够である。東側の集中域(礫群)は一部完形礫が集中している地点以外では、明確な密集部を形成していない。この分布状況の違いは接合線の密集状況にも反映しているが、接合線自体は基本的に各集中域で収束し大きく離れることが少ないので、このような、分布密度の違いの原因は礫群使用後の人為的な改変と強く関係していることが予想されるが、礫群の使用方法を想定した上での検討が必要であろう。

礫・礫片の大きさは長軸20mm~60mm(平均40.8mm)、短軸15mm~40mm(平均27.9mm)に集中し、重量も20g~30gをピーク(平均29.3g)に分布する。チャートは完形礫でも小型のものを多く含んでいるため、流

第70圖 南集中区 簿群重量別分布図









## 第4章 中・近世

### 第1節 造構と遺物

#### 1 溝

溝状造構 2条が検出された。

##### 溝1 (第73図、図版7)

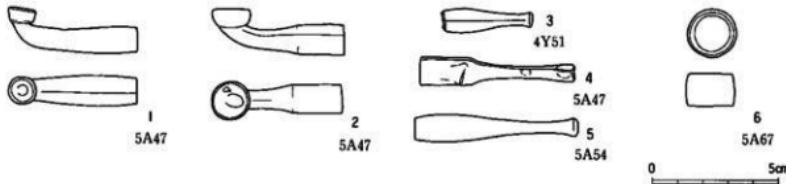
調査区北端で、4Y区から4A区にかけて、緩やかに蛇行しながら、ほぼ東西方向に延びる。全長は99m以上、幅は、上端で1.1m～2.0m、下端で0.4m前後を測る。また、断面形は最下面が平坦な逆台形状で、検出面からの深さが0.4m～0.6mである。遺物は出土していない。

##### 溝2 (第73図、図版7)

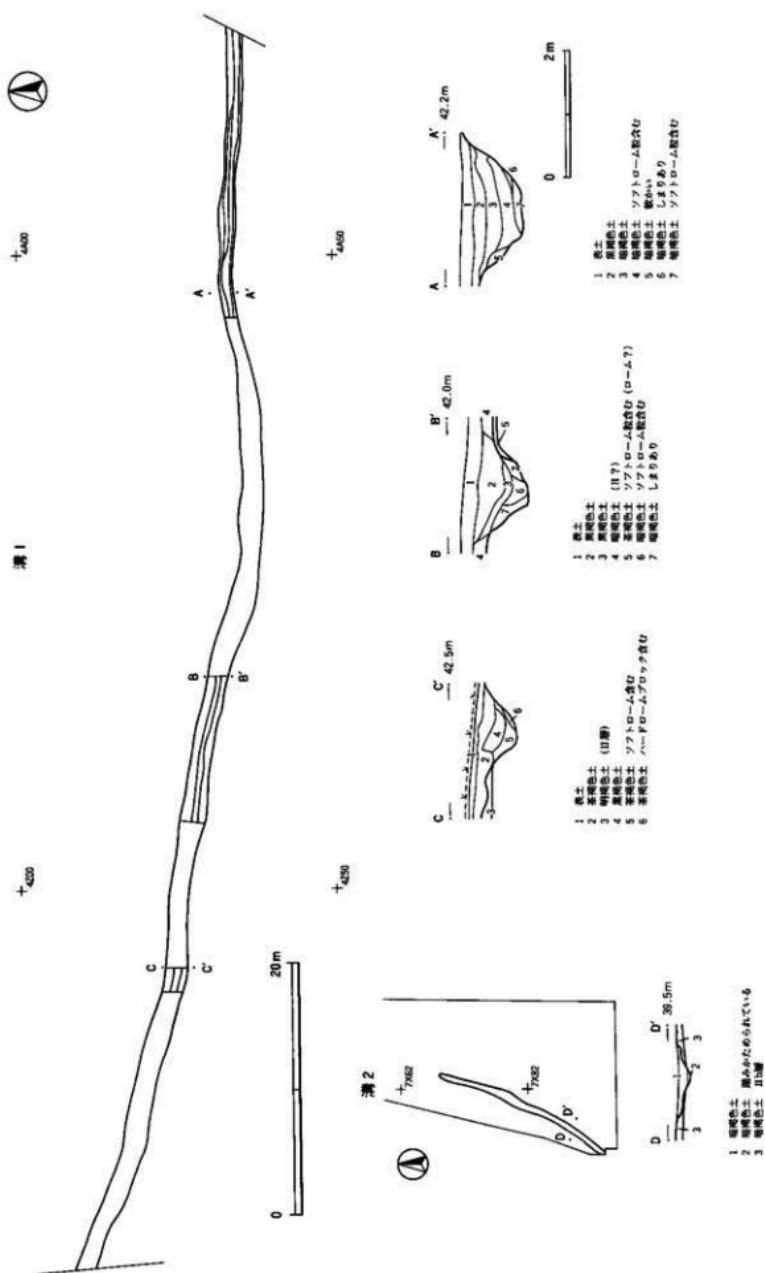
調査区南端で、7X62グリッドから7X90グリッドにかけて、北北東から南南西方向の斜面の傾斜に沿って延びている。全長が14m以上、幅は、上端で0.4m～0.5m、検出面からの深さが0.2m前後と非常に浅い。溝の中央部が一段深くなる。遺物は出土していない。

#### 2 グリッド出土遺物 (第72図、図版30)

1、2は煙管雁首部、3から5は煙管吸口部で、いずれの吸口にも羅字を残している。すべて銅合金製で、1から4には折り曲げて製作した際の接合痕が見られる。6は円筒形の鉄製留金具である。



第72図 出土遺物



第73図 清水遺跡

## 第5章 まとめ

### 第1節 旧石器時代

本遺跡では2地点の石器集中地点が検出された。

石器集中1 X層（旧VII層）中から検出された台形様石器を主体とした零細な石器群である。台形様石器は、幅広の剥片を横位に設定したもので、基部端に調整を施したものと側縁に急角度調整を施したものがある。打面部や折断面を側縁に利用し、平面形は基部側が窄まる形態を呈している。分厚い剥片（もしくは節理面に覆われた分割線）を素材とした石核を用いて、幅広な小型剥片を剝離している。

石材はチャートを主体としてメノウ・流紋岩がこれに伴う。チャートは、いずれも良質とはいえず、節理が縦横に走る。数種に母岩分類されたが、それらは素材の部位によって“顔つき”が異なるものを示しているのかも知れず、すべて同一母岩である可能性もある。

隣接する一鉢田甚兵衛山南遺跡（空港No12遺跡）では、同一層準からいくつかの石器集中地点が検出されている。現在整理中で詳しくは触れられないが、本遺跡で特徴的な節理が入ったチャートと酷似する石材を用いた集中地点もあり、その関連性が注目される。

石器集中2 VI層下部から第2黒色帯上部を中心に検出された石器群である。現在の標準土層でVII層に相当する。東北産の珪質頁岩A（チョコレート色頁岩）を用いた石刃を主体とする。石刃生産は遺跡内では行われず、すべて搬入品である。搬入された石刃は折断面から石刃の縁辺に沿って櫛状剝離が施され、小石刃（削片）が剝離される。このように櫛状剝離が施された石刃を本報告では「有櫛石刃」と呼称しているが、有櫛石刃自体が石器として用いられる場合（彫刻刀形石器を代表とする）と小石刃を剝離する石核として用いられる場合の二者が想定される。石器の形態や肉眼的な観察では、基本的には両者を分離することは難しい。いわゆる「新田効果」とよばれるリダクション（変形）が顕著な石器群として位置づけられる。

ナイフ形石器は石刃の打面側を基部に設定し、先端側一侧縁に対して急角度調整が施され、尖頭部を形成している。石材は一部の有櫛石刃・小石刃に用いられたものと同一母岩（珪質頁岩A3）を利用していている。

珪質頁岩A以外では安山岩A（ガラス質黒色安山岩）と安山岩B（トロトロ石）がともなう。安山岩Aには石刃素材のナイフ形石器、安山岩Bには石刃同士の接合資料を含んでいる。ただし、有櫛石刃は珪質頁岩Aに限られる。

先に指摘したように、遺跡内では石刃生産は行われず、搬入石刃を用いた折断・調整剝離・小石刃剝離（刃部再生）がなされているに過ぎない。安山岩Aには比較的小型の縦長削片が見られ、遺跡内での剥片剝離の可能性が指摘されるが、石核や接合資料は見られず即断はできない。

空港予定地内では、香山新田中横堀遺跡（空港No7遺跡）<sup>20</sup>で有櫛石刃を主体とした石器群が検出されている。遺跡は本遺跡と同様に、九十九里方面へ南流する木戸川最上流域にある。出土層位はVI層を中心としたVII層（第2黒色帯）の一部にかかるとされている。本遺跡と同様に現在の立川ローム層の標準土層に比べ、VI層の層厚がやや厚いため、本来は第2黒色帯上部（標準土層でVII層）に相当する石器群であるといえよう。出土層位や石器群全体の様相は、本遺跡と酷似するが、ナイフ形石器・石刃の形態、有櫛石刃の素材

とその用い方、石材構成の諸点においていくつかの相違点を見いだすことができる。これらの比較検討は、周辺地域にみられる同種の石器群の検討とともに今後の課題として残された。

## 第2節 繩文時代

**遺構** 繩文時代の遺構は堅穴状遺構1基、ピット群1基、陥穴8基、炉穴2基、土坑2基が検出された。各遺構とも調査区南半部に集中する。陥穴は底面が長楕円形を呈するもの（形態a：001・006・007・014・018号）を主体として、ほぼ円形を呈した井戸状のもの（形態b：003・004号）、両者の中間的なもの（形態c：002号）の大きく3種に分かれる。分布状況は陥穴の形態に応じて特徴的な配置を見せ、形態aが台地縁辺の際に沿って等高線に平行に、間隔を置いて分布するのに対して、形態bは台地縁辺部から離れ、比較的標高の高い位置に近接して分布する。形態cは1基しかなく、その傾向を探るには心許ないが、形態aと同様に台地縁辺にある。

狩猟対象獣の行動パターンを熟知していたであろう繩文時代の人々は罠を仕掛けるにあたって、最も効率よく獲物を捉るために、おそらく細心の注意を払って陥穴の形態を選択し設置したことが本遺跡の状況から推察することができる。

### 出土土器

**第I群土器** 押圧繩文をもつ、斜繩文土器が単独に近い状況で出土している。多繩文土器に後続し撫糸文系土器との間にあたる型式として、表裏繩文土器・外面斜繩文土器が、繩文の回転施文された土器の走りとして位置づけられている。近い例では香取郡山田町山倉大山遺跡<sup>3)</sup>のものが挙げられる。空港予定地内の調査では、整理作業の進捗により、芝山町香山新田新山遺跡（空港No10遺跡）、成田市東峰御幸畠東遺跡（空港No62遺跡）、十余三稻荷峰遺跡（空港No67遺跡）などで類例が見つかっている。それらの詳細は本報告に譲るが、今後集出し検討を加えてゆきたい。

**第II群土器** 三戸式は、沈線施文の典型的なものはみられない。条痕文、無文には口唇内削ぎのそれらしいものがあった。田戸下層式土器には各種がみられたが、沈線のものは三戸式に近いものが主である。新相とされる、横区画の文様が主になるものは非常に少ない。第43図87の明神裏III式類似のものは、田戸上層式との過渡期のものであろうか。

**第IV群土器** 諸磯式、浮島式土器を主体とし、出土量は第II群土器に次いで多い。浮島II式が主で、浮島I式、III式は少ない。浮島II式はまとまっており、良好な一括資料である。

**第V群土器** 繩文施文土器では、連続刺突文をもつものが特徴的である。口縁の連続刺突文、口唇の指頭圧痕刻みを持つ点は浮島式の特徴のひとつである。しかし脣部の結節斜繩文は下小野式である。十余三稻荷峰西遺跡（空港No68遺跡）<sup>4)</sup>では浮島II式に結節斜繩文の施文されたものがあつたが、これは東北南部の繩文施文土器の影響で取り込まれた文様とみられ、今回出土したものも、北の系統のもので浮島式に併行するものであろう。また典型的な下小野式土器も少量みられた。下小野式の存在は疑問視されている向きもあり、細かな検討が必要であろう。

**第VI群土器** 散発的な出土で量も少ないが、舟形土器、安行IIIa式の完形土器の出土など、目立つものがあった。空港予定地内では、後・晩期の土器は遺構を伴わずに単独で出土する傾向があるが、当遺跡でも同様であった。時期的な特徴かも知れない。

**出土石器** 土器の包含層と同様に、5 A・5 B区に広がる北集中区と6 X・6 Y・7 X・7 Y・7 Z区の広範囲に広がる南集中区に、埋没谷を挟んで分布域が分かれる。検出された土器と同様に石器群も、南集中区の方が北集中区よりも分布密度が高い。北集中区の石器群は大きく4つの集中域に分かれ、小規模な疊群と零細な剝片石器群で構成される。一方南集中区では、100点規模の剝片石器群1か所と1,000点以上の疊・破碎疊によって構成される疊群が数基存在する。剝片石器群は両極剝離を基盤とし、楔形石器と楔形石器剝片が多く、石材にはチャートを主体的に用いている。空港予定地内の天神峰最上遺跡（空港No64遺跡）の分析によるとパターン3（トゥール+剝片）の構成を示し、同様のパターンを示す石器群に天神峰最上遺跡（空港No64遺跡）の石器集中06J・08J・09J、東峰御幸畠西遺跡（空港No61遺跡）の6C一括集中を挙げることができる。いずれも沈線文期を主体とする土器群に伴う石器群とされ、本遺跡についても時期的に近接するものと考えられる。

**総括** 田戸下層式・浮島II式の時期は土器の出土量も多く、一定期間の居住があったと見られる。ただし、住居跡が検出されていないので、長期にわたる定住的な集落ではなく、キャンプサイトに近いものであろう。また、同一型式内の土器には、細かな時期差が認められており、従って断続的に土地が占用されていて、結果として出土遺物が多くなったことも考慮にいれなければならない。疊群についても、そのような回帰的な遺跡利用を示しているものととらえれば一時に数基の疊群が形成されたと考えるのではなく、移動を繰り返す狩猟生活の一部として疊群（調理施設）の利用を位置づける必要がある。

その他の時期では、出土量は少ないものの、先に指摘したような、注目すべき遺物の出土を得る成果があった。

注1 田村 隆 1992「遠い山・黒い石—武藏野II期石器群の社会生態学の一考察ー」『先史考古学論集』第2集

新田浩三 1995「下總型石刃再生技法の提唱」『研究紀要16~20周年記念論集ー』(財)千葉県文化財センター

矢本節朗他 1996「多古町千田台遺跡」(財)千葉県文化財センター

2 西川博孝・西口徹他 1984「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書IV-No 7遺跡ー」(財)千葉県文化財センター

3 藤原 正・高野安夫他 1983「山倉大山遺跡調査概報」北總考古学研究会

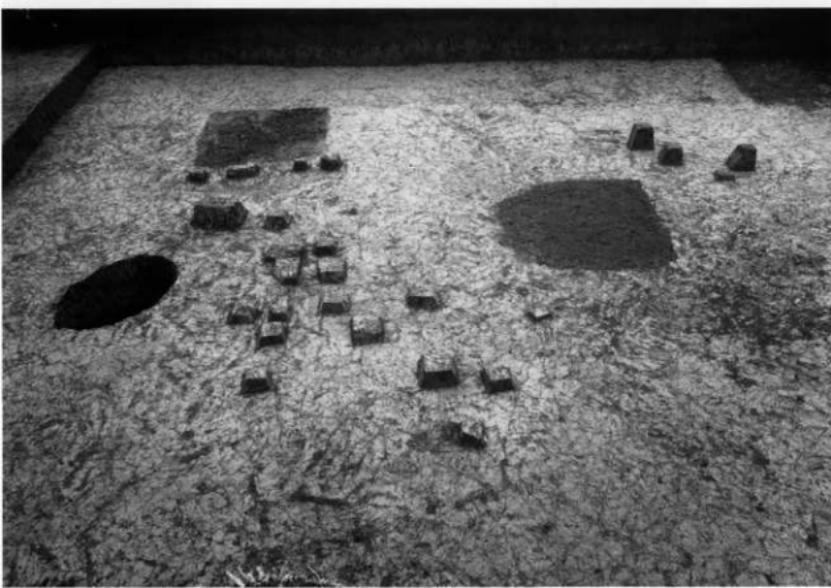
4 宮 重行・水塚俊司他 2000「新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書X II -十余三船荷峰西遺跡（空港No68遺跡）-」(財)千葉県文化財センター

# 写 真 図 版



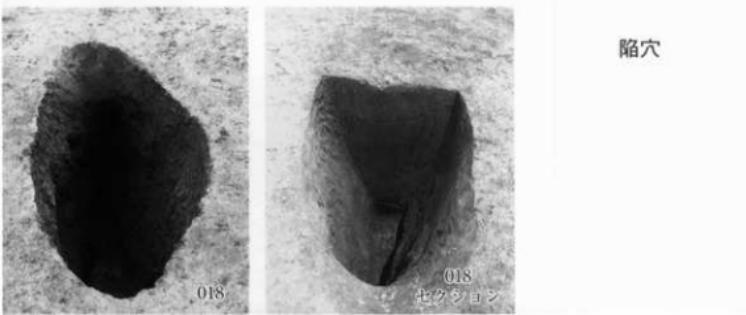
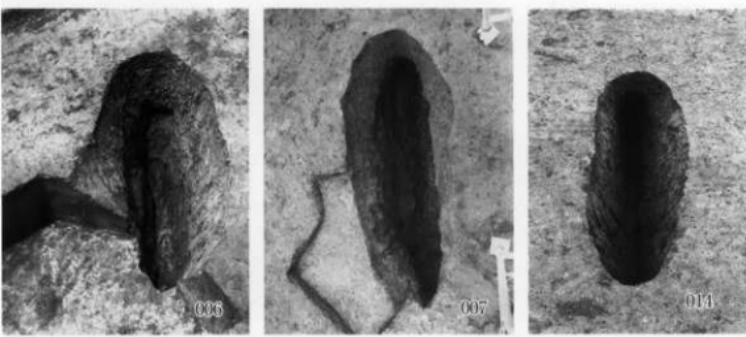
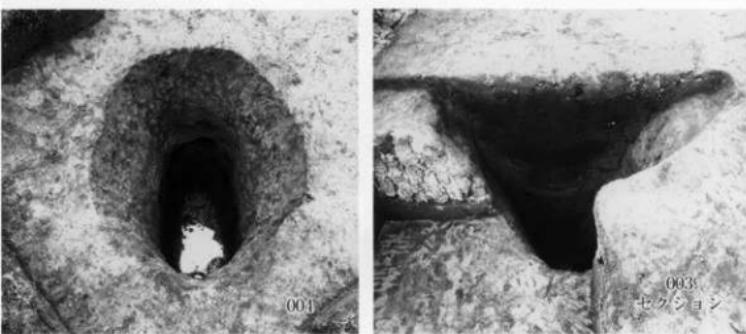
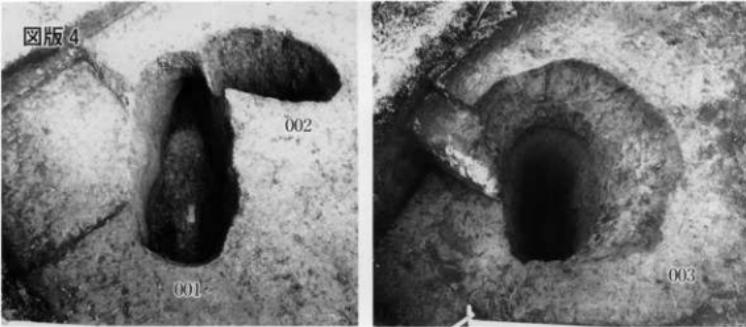


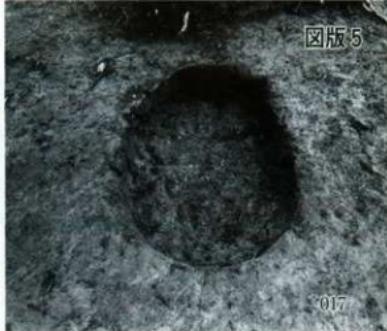
石器集中1



石器集中2







炉穴  
土坑







縄文晩期包含層  
(6Y98・99付近)



図2

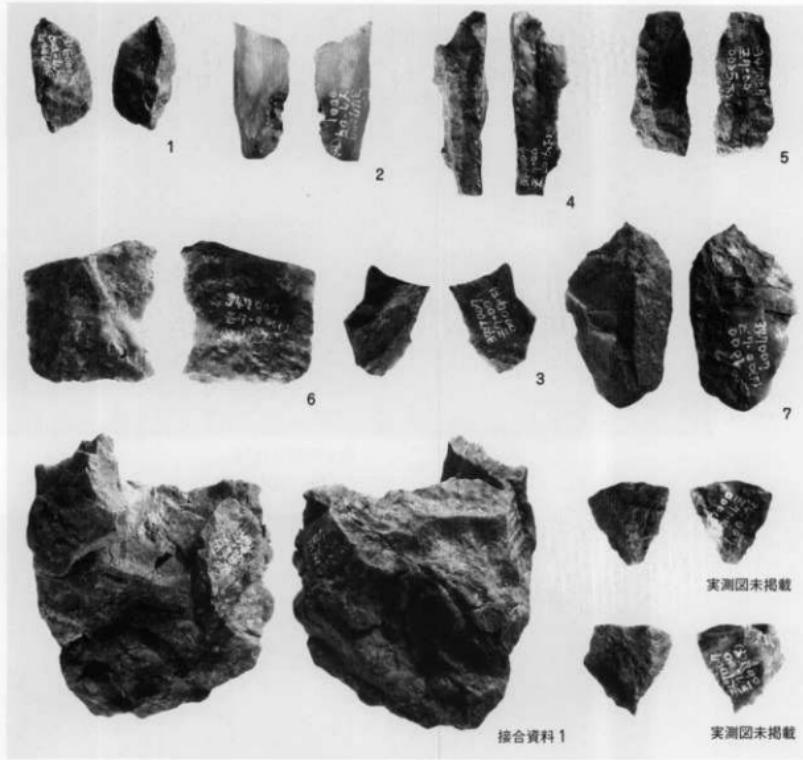


図1

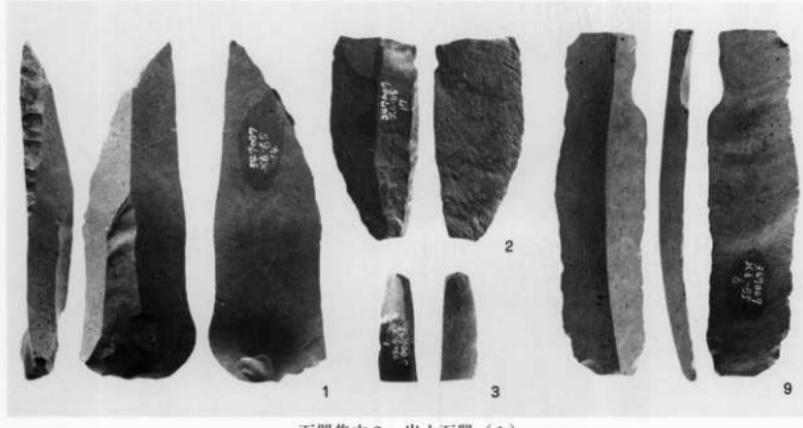


図3

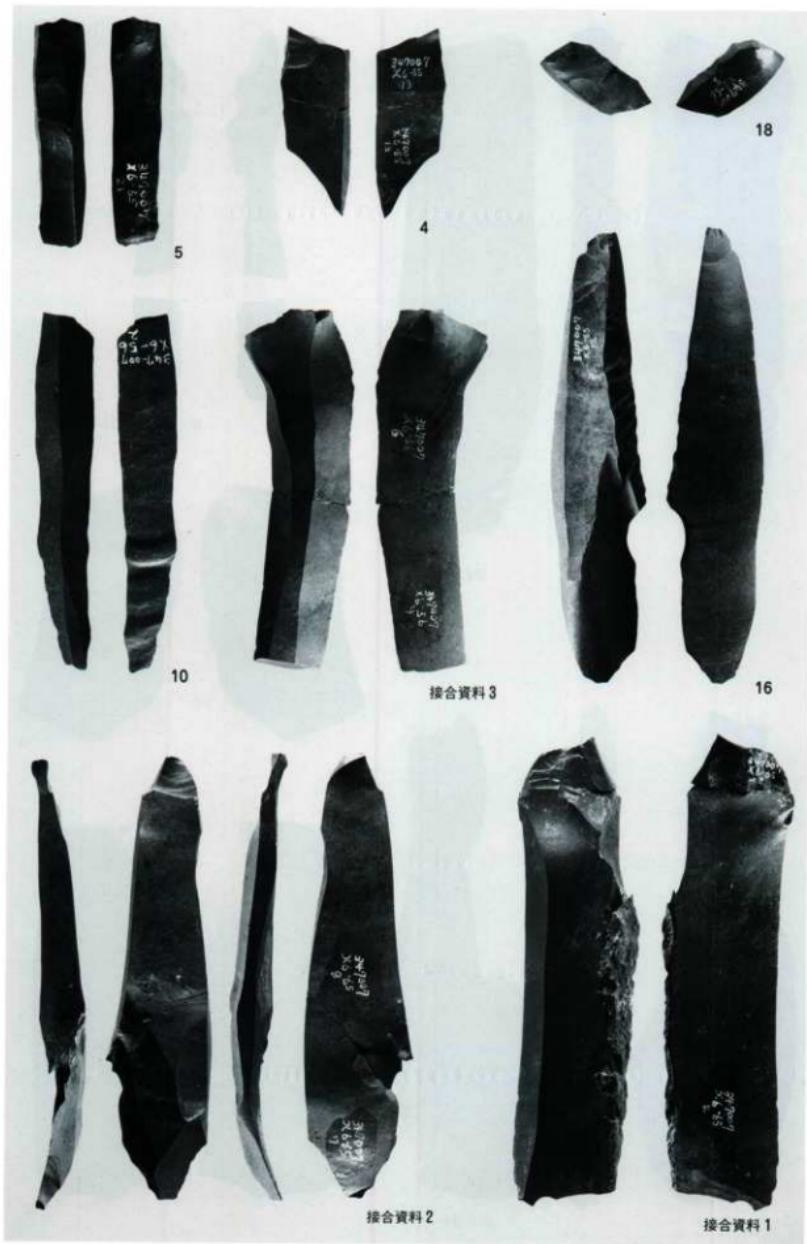
溝状造構



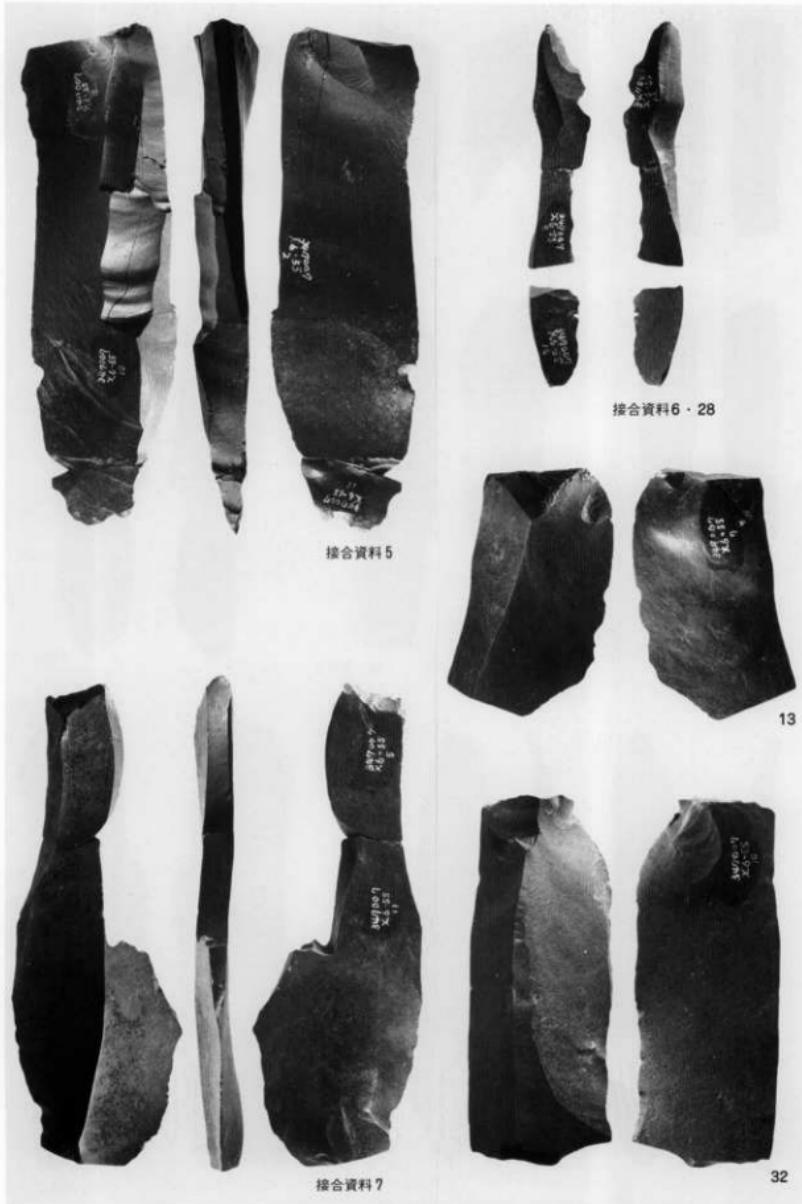
石器集中 1 出土石器



石器集中 2 出土石器（1）



石器集中 2 出土石器 (2)



石器集中2 出土石器（3）

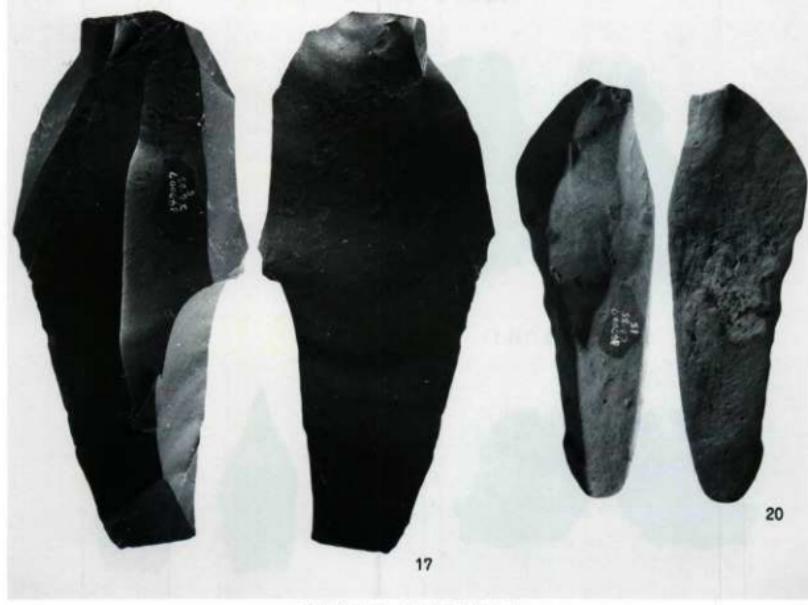
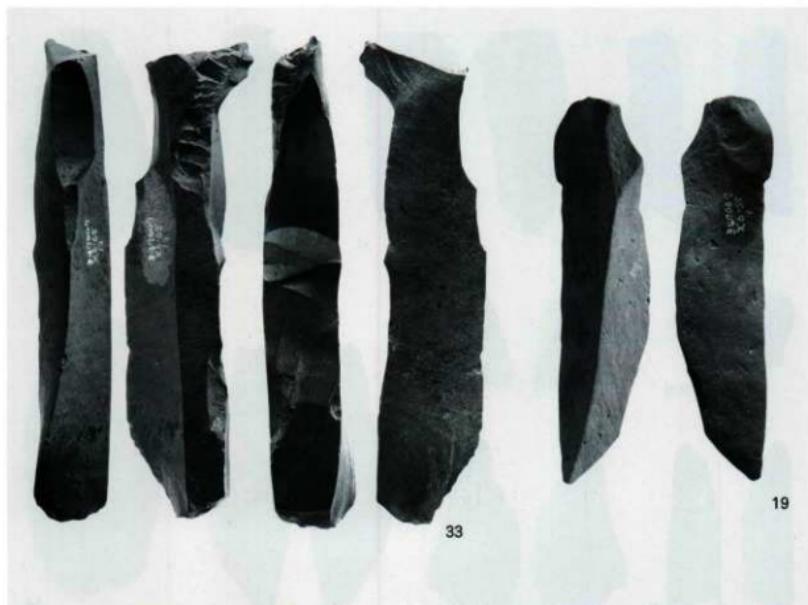
32

13

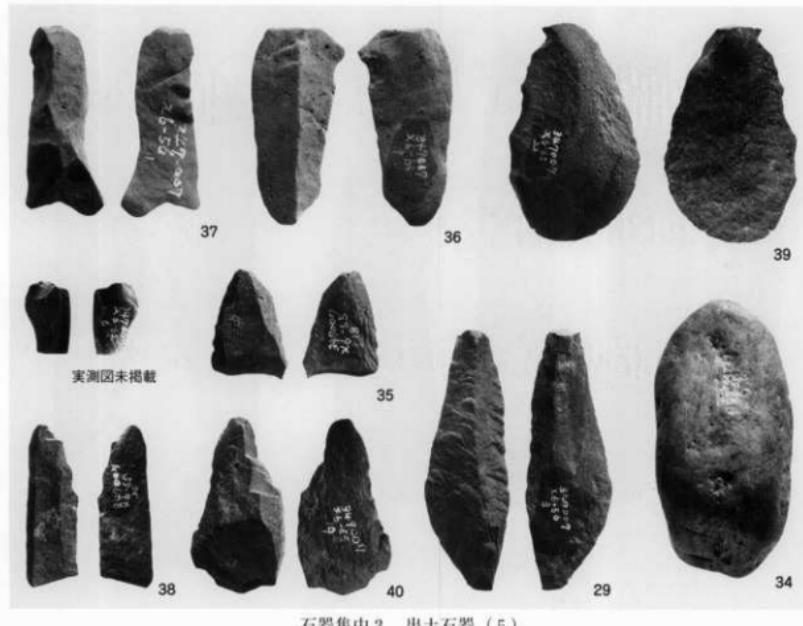
接合資料6・28

接合資料5

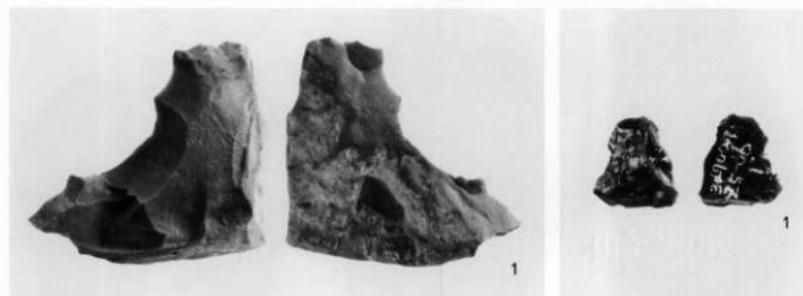
接合資料7



石器集中2 出土石器（4）



石器集中2 出土石器(5)



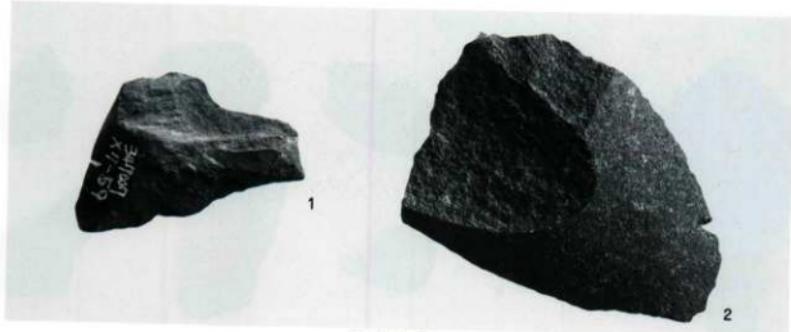
集中地点外1

集中地点外4

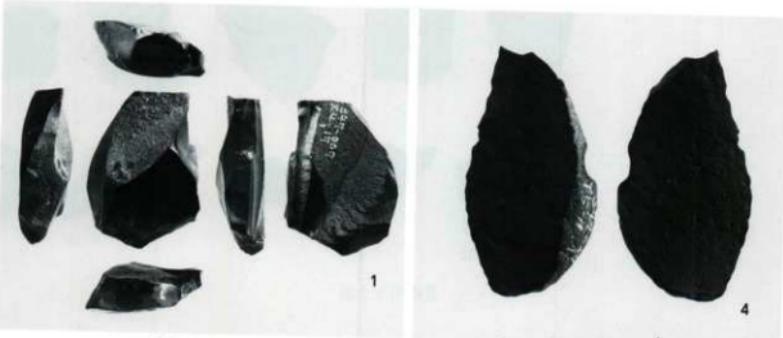


集中地点外2

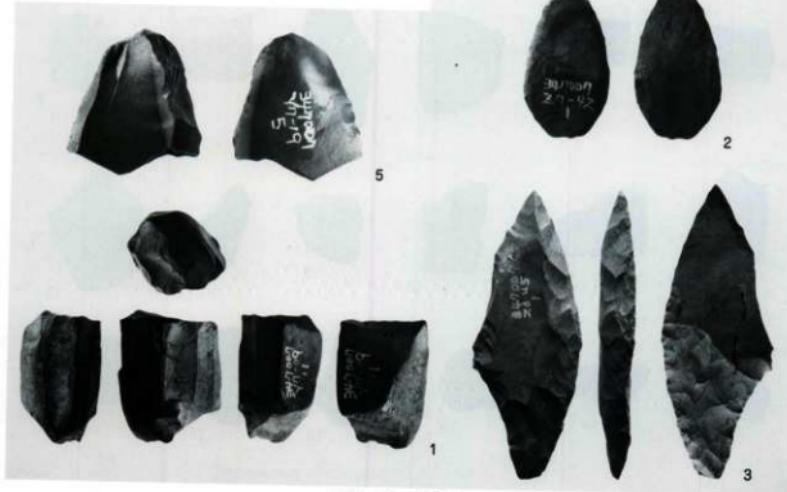
集中地点外5



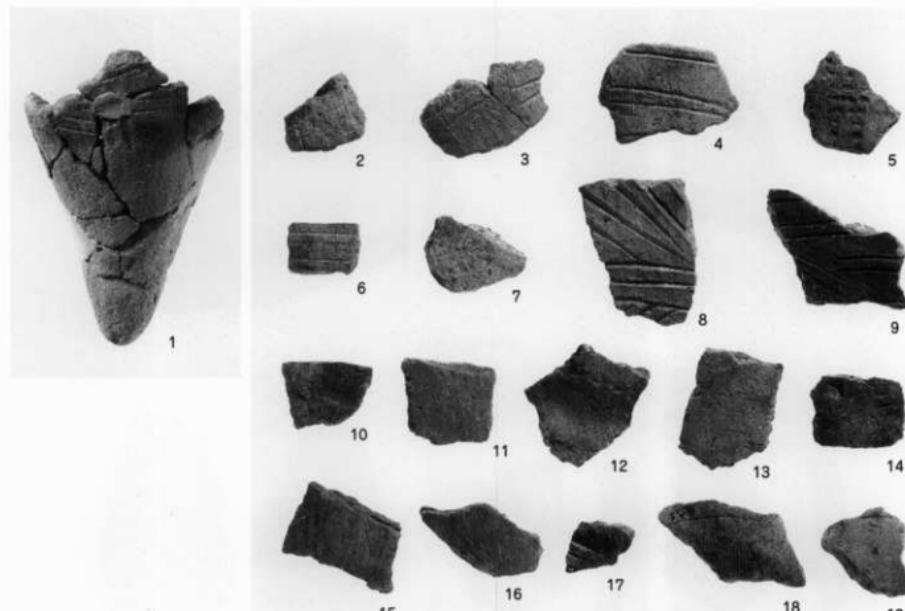
集中地点外 3



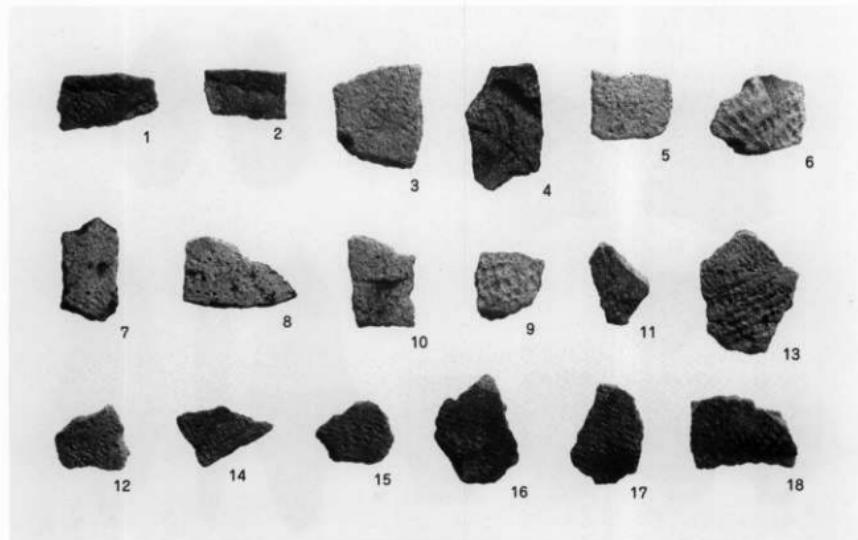
集中地点外 6



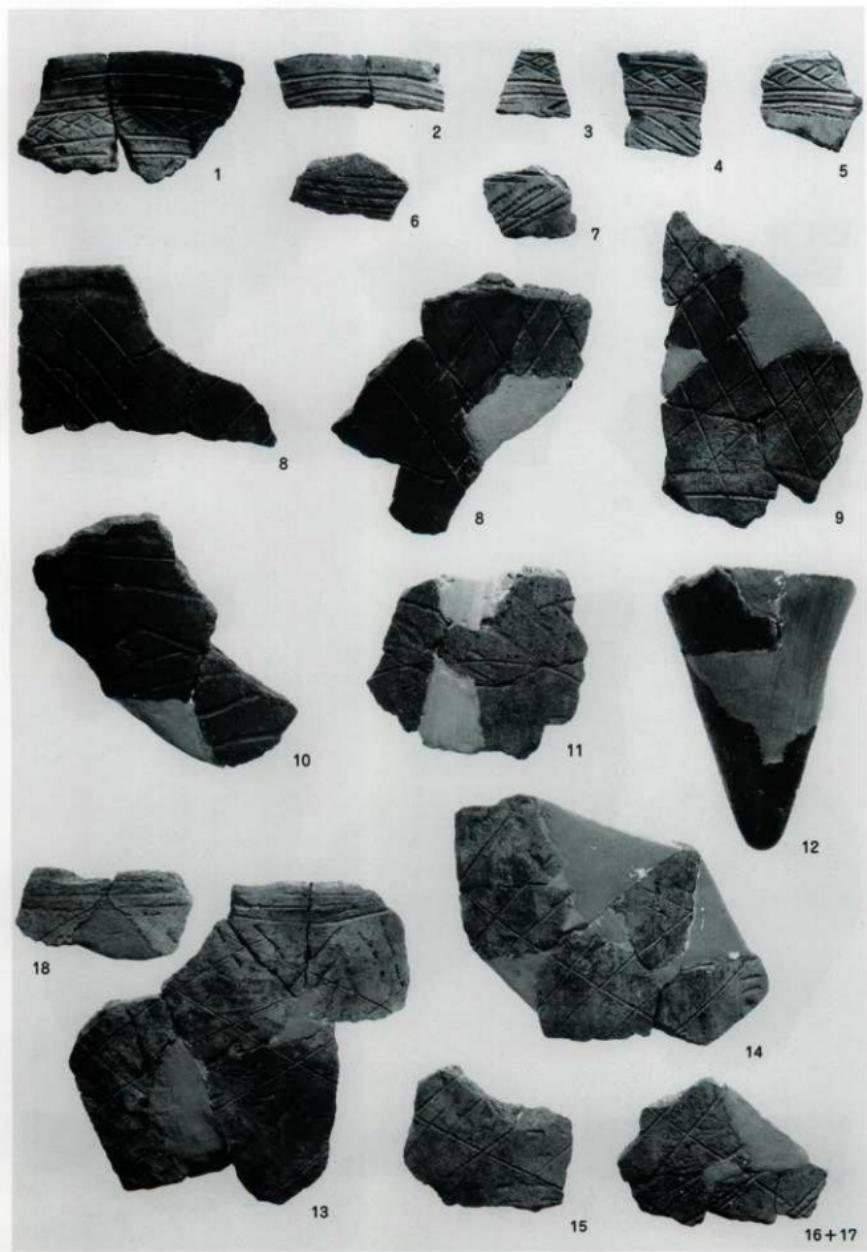
グリッド一括資料



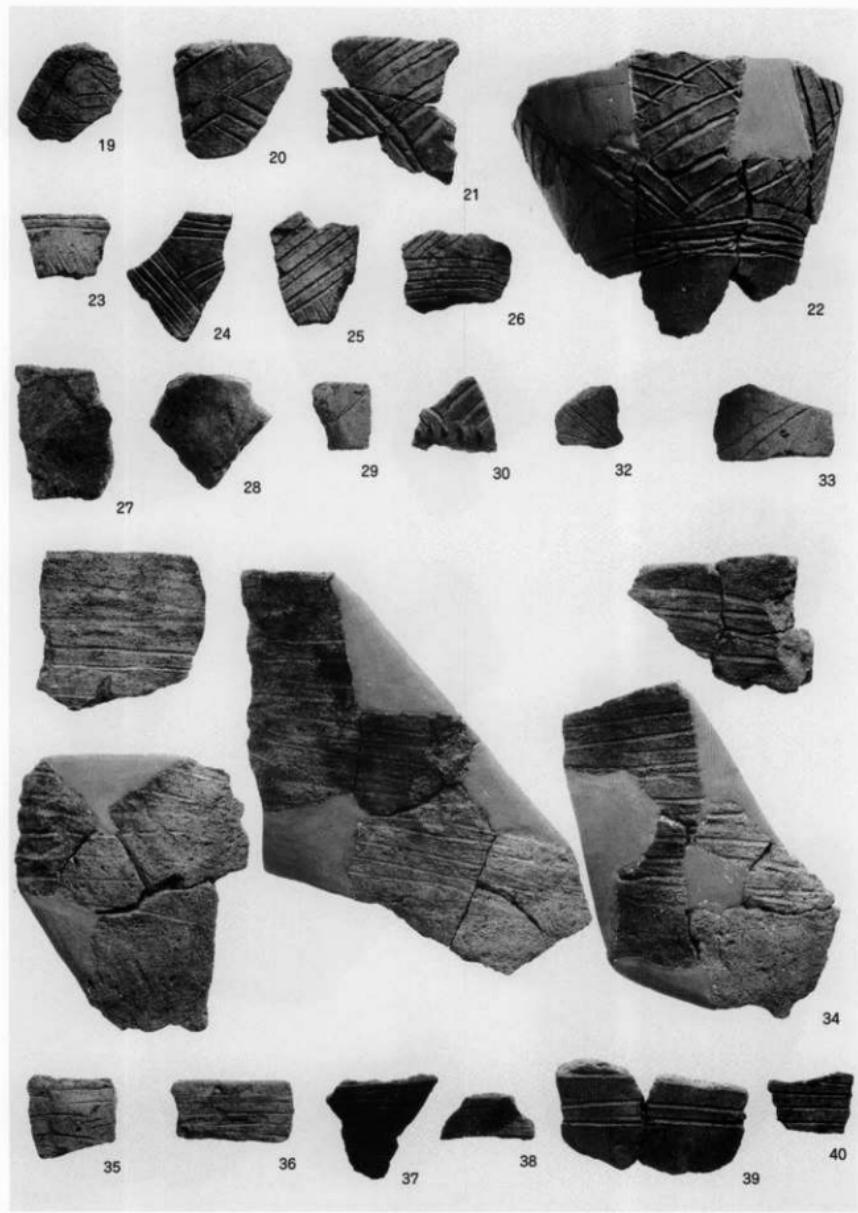
遺構出土土器



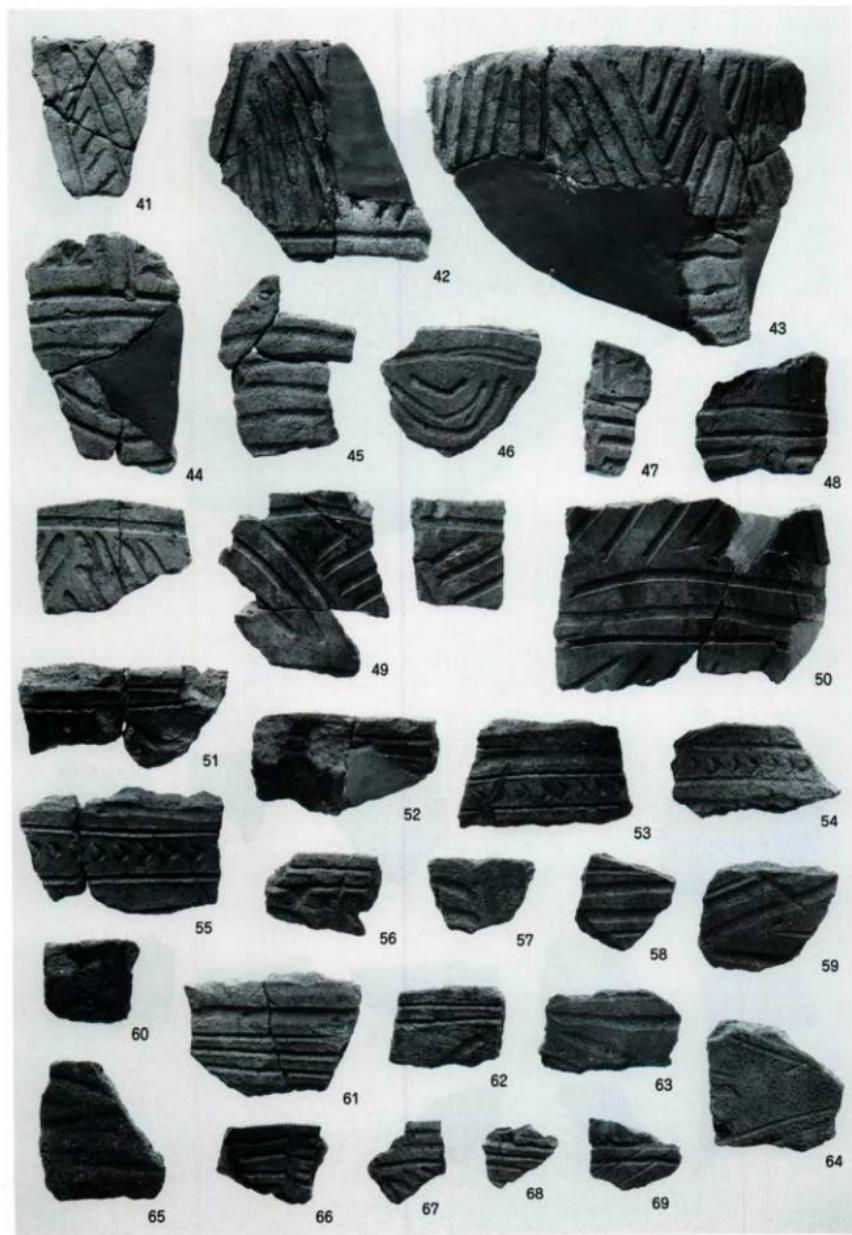
第Ⅰ群土器



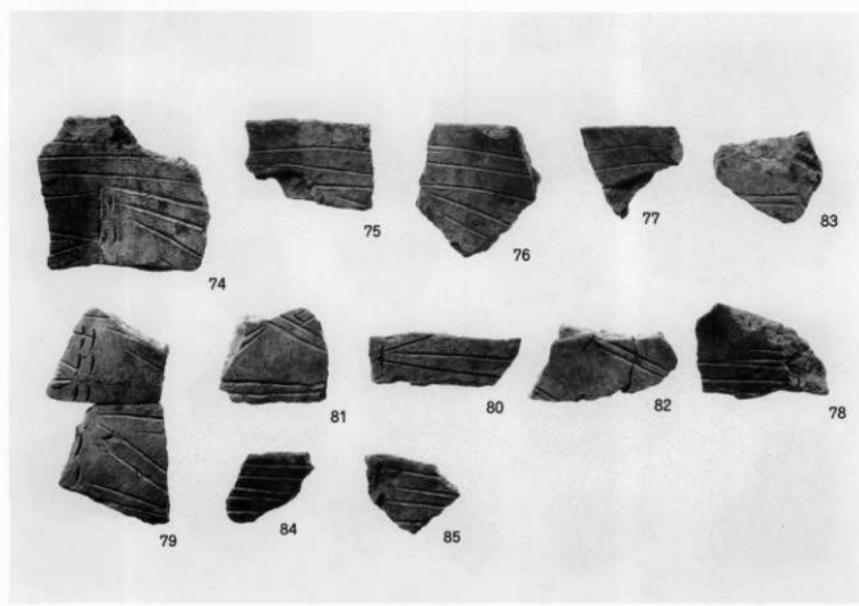
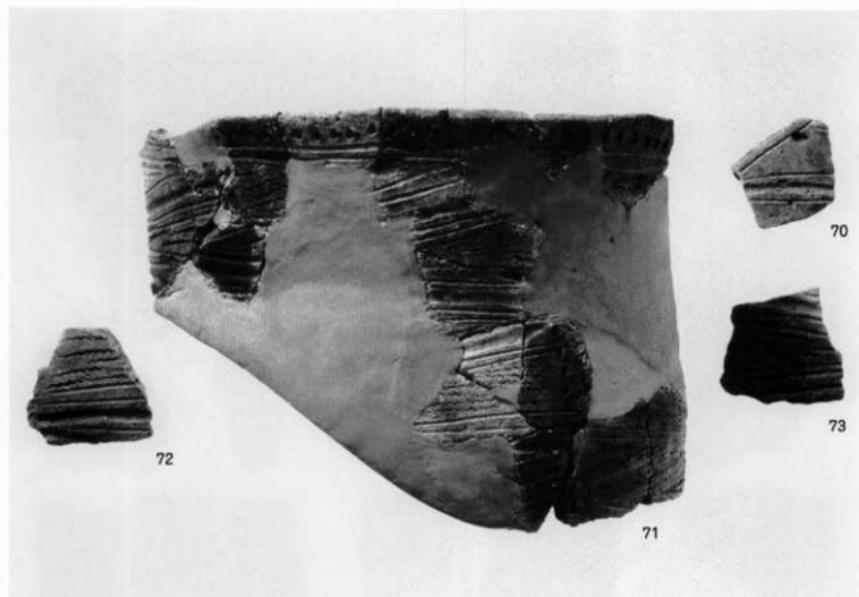
第II群土器（1）



第II群土器 (2)



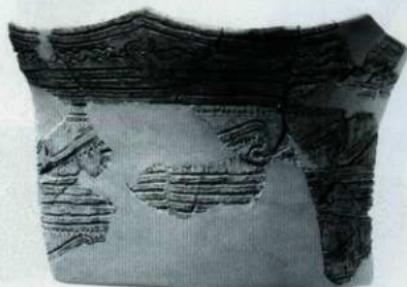
第II群土器（3）



第II群土器（4）



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103

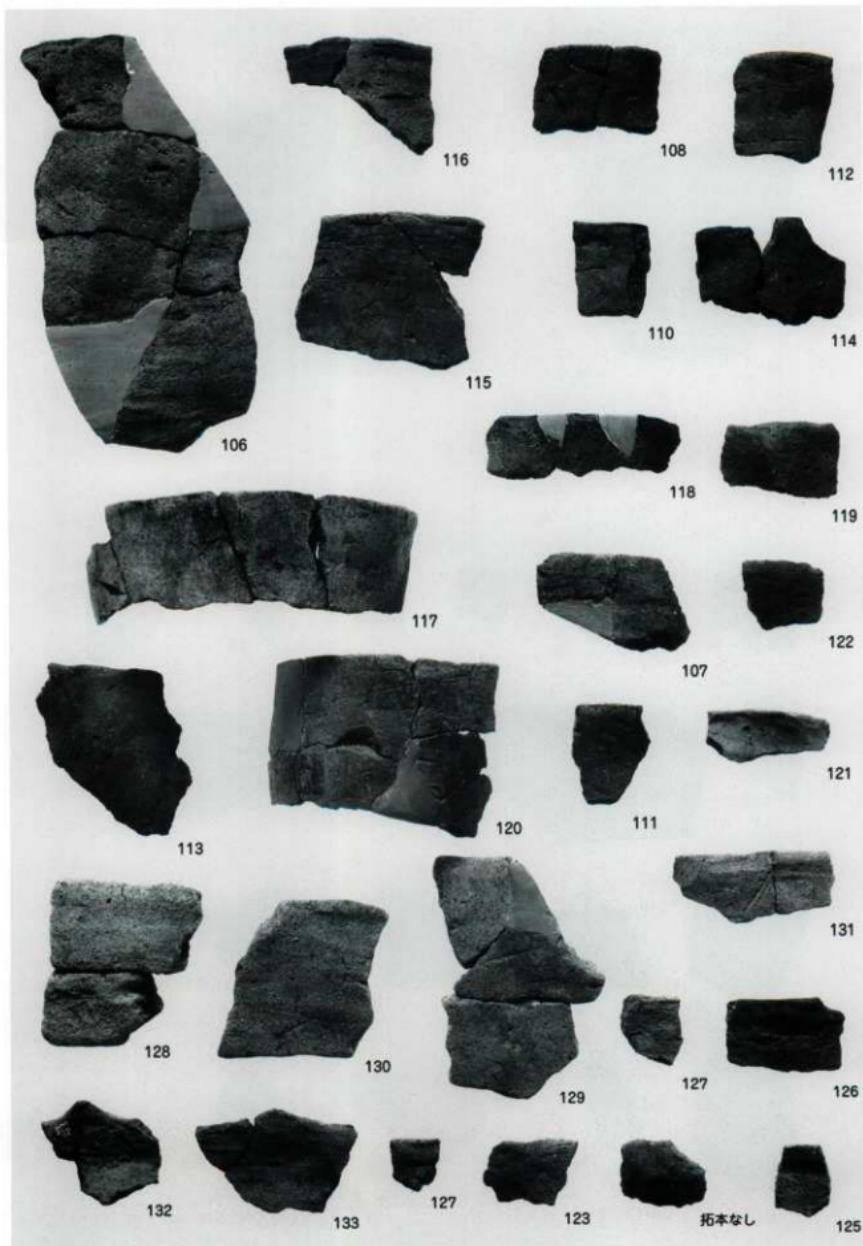


104

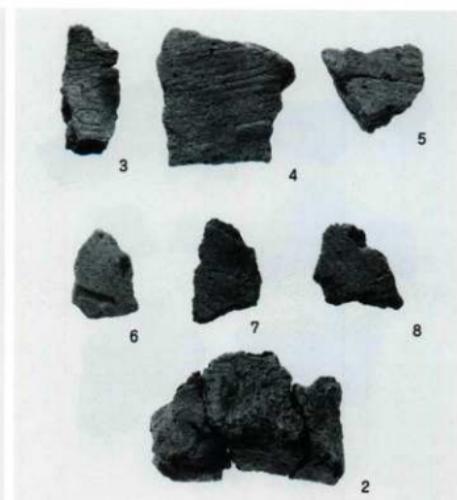


105

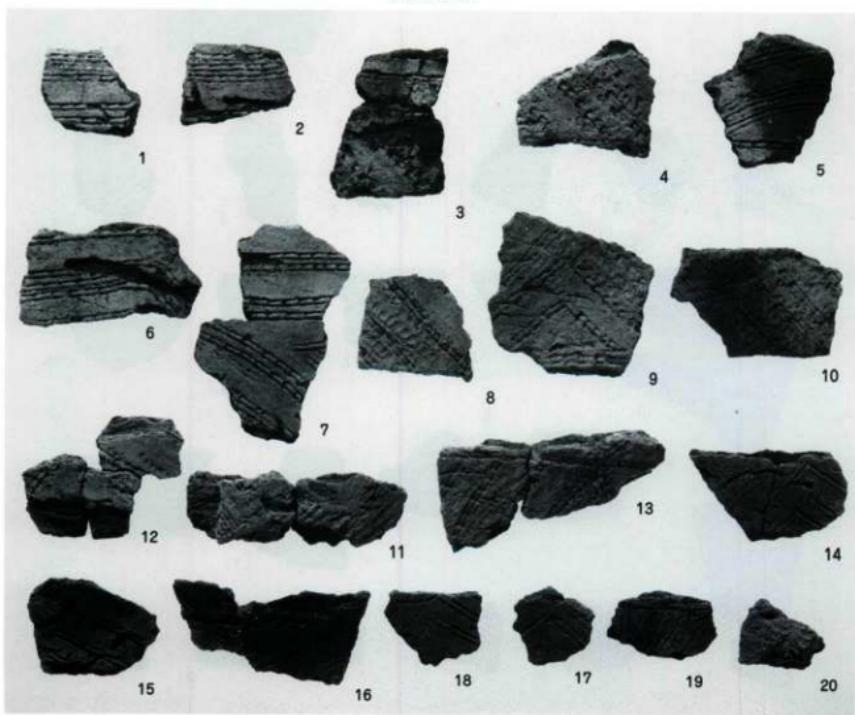
第II群土器（5）



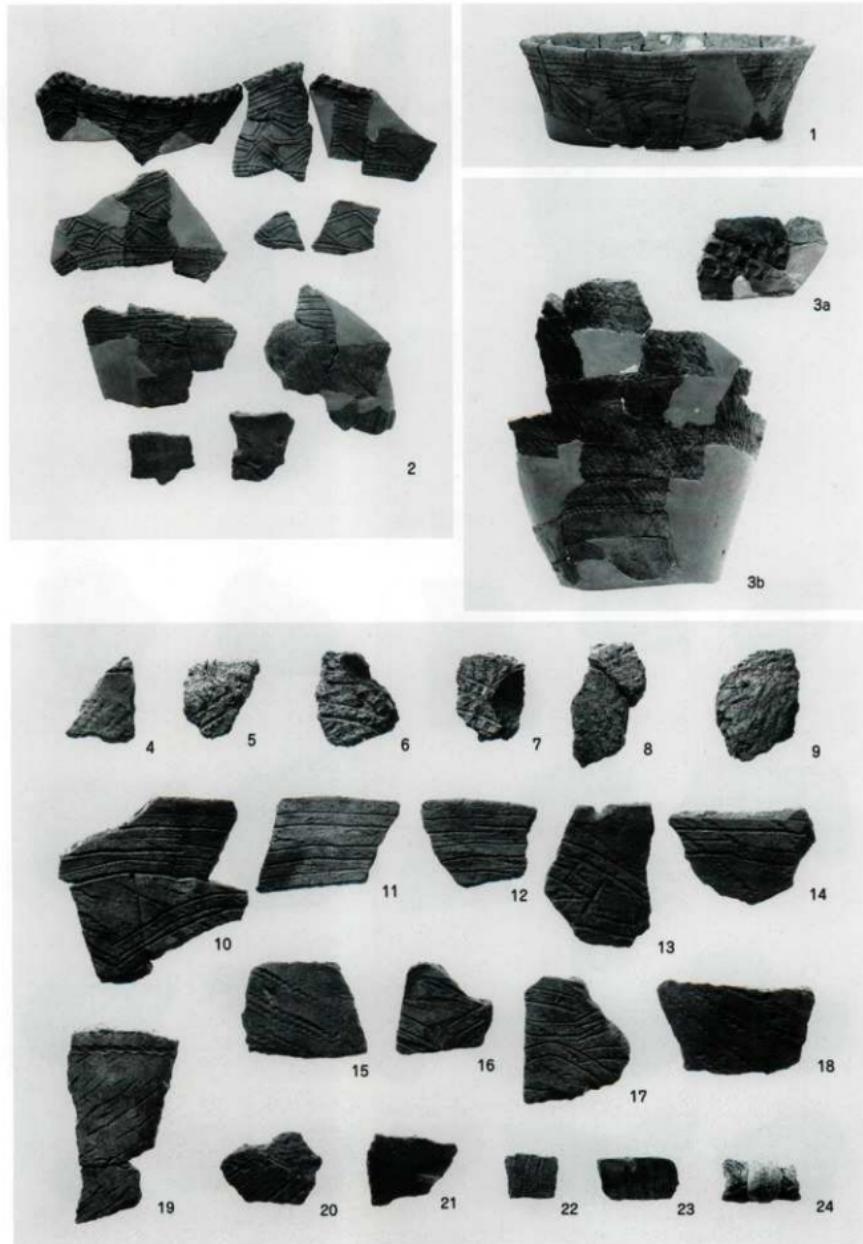
第II群土器（6）



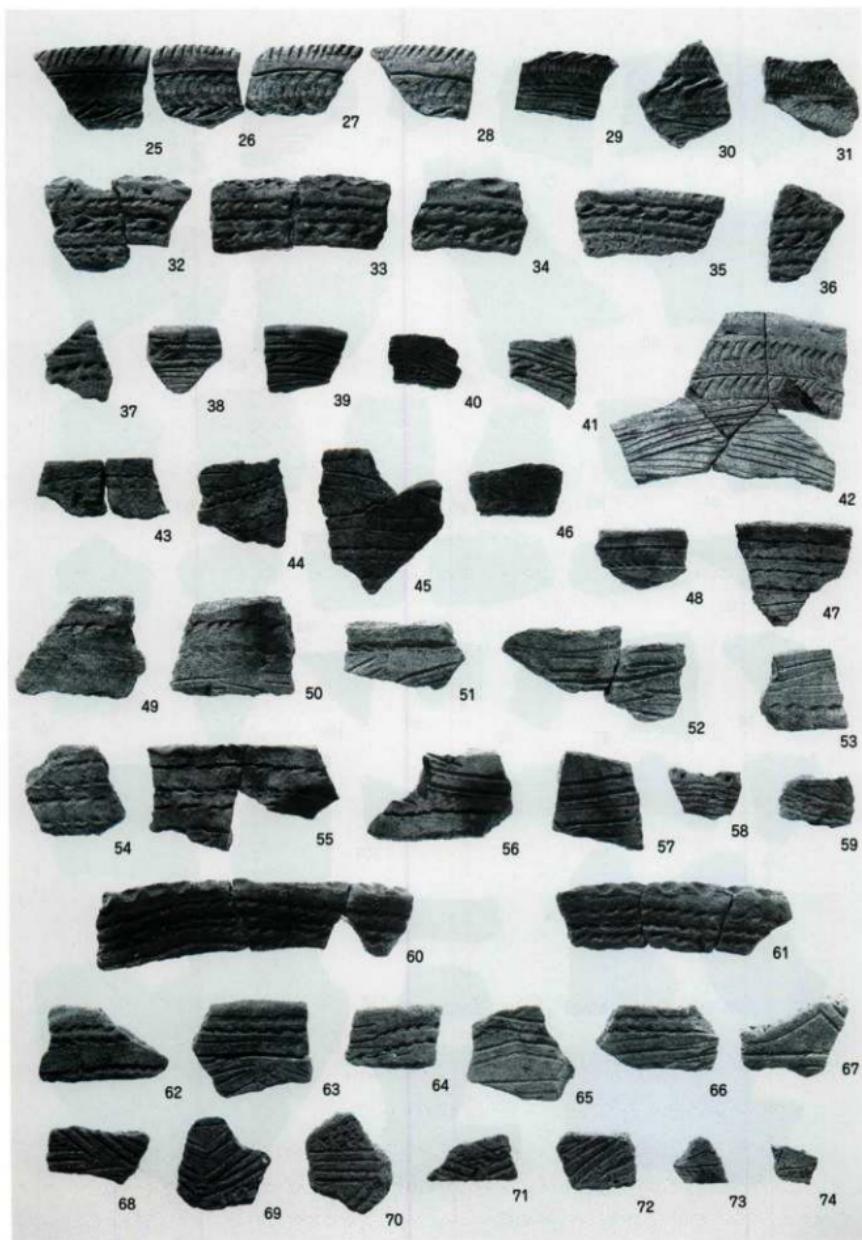
第III群土器



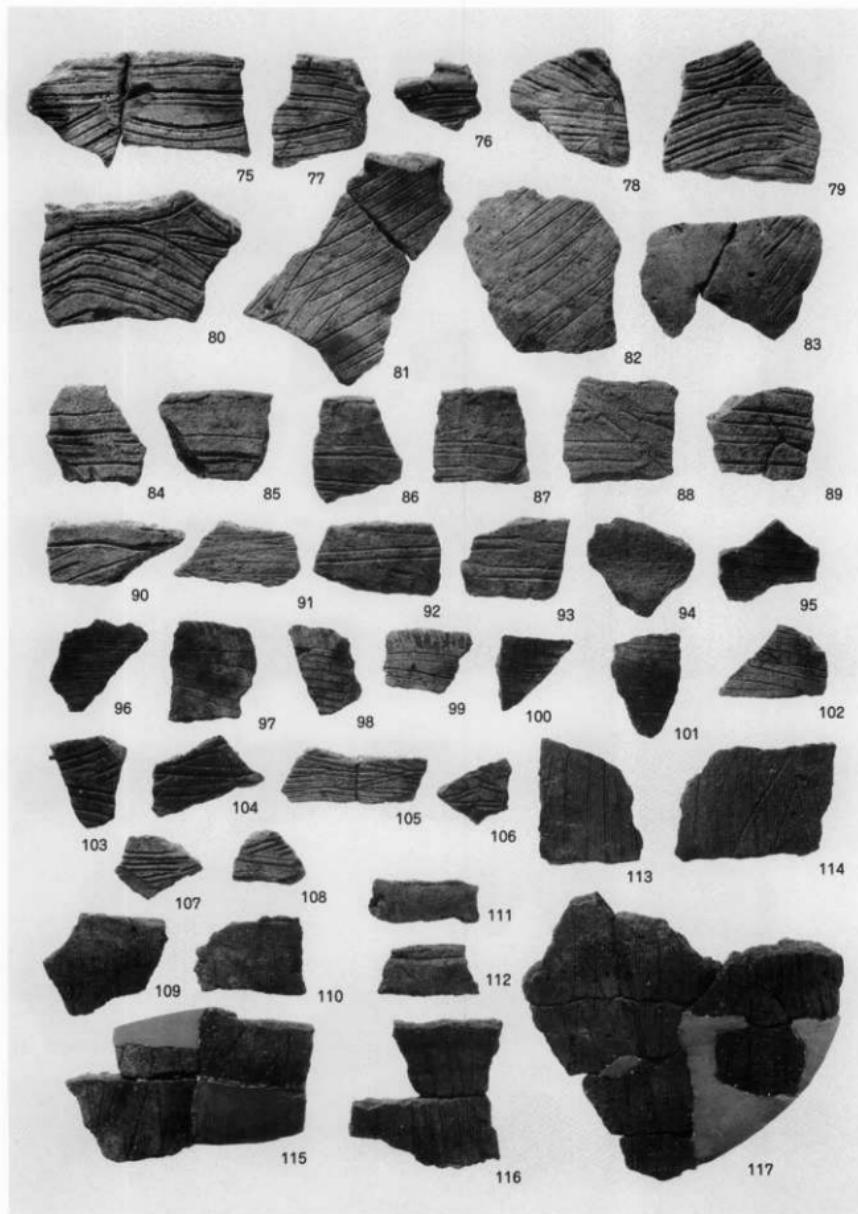
第IV群土器



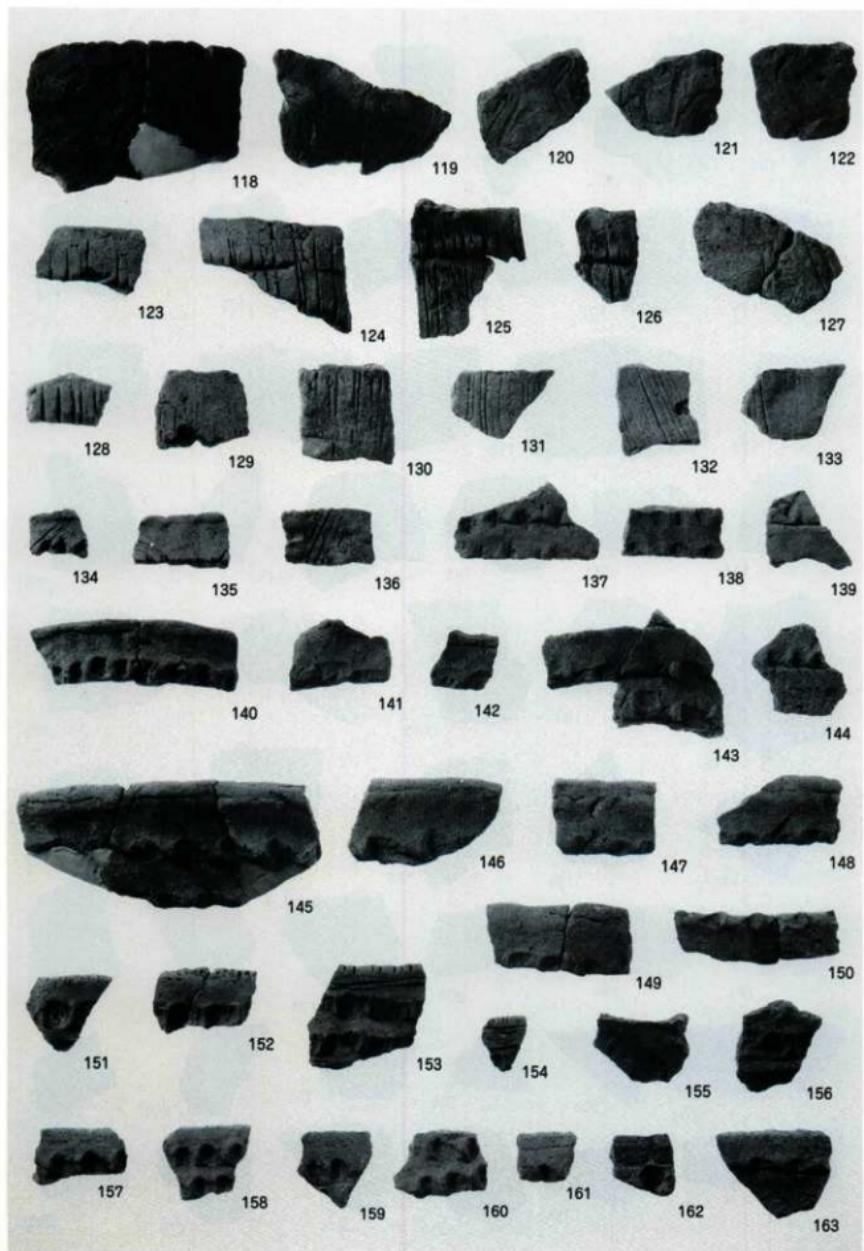
第V群土器 (1)



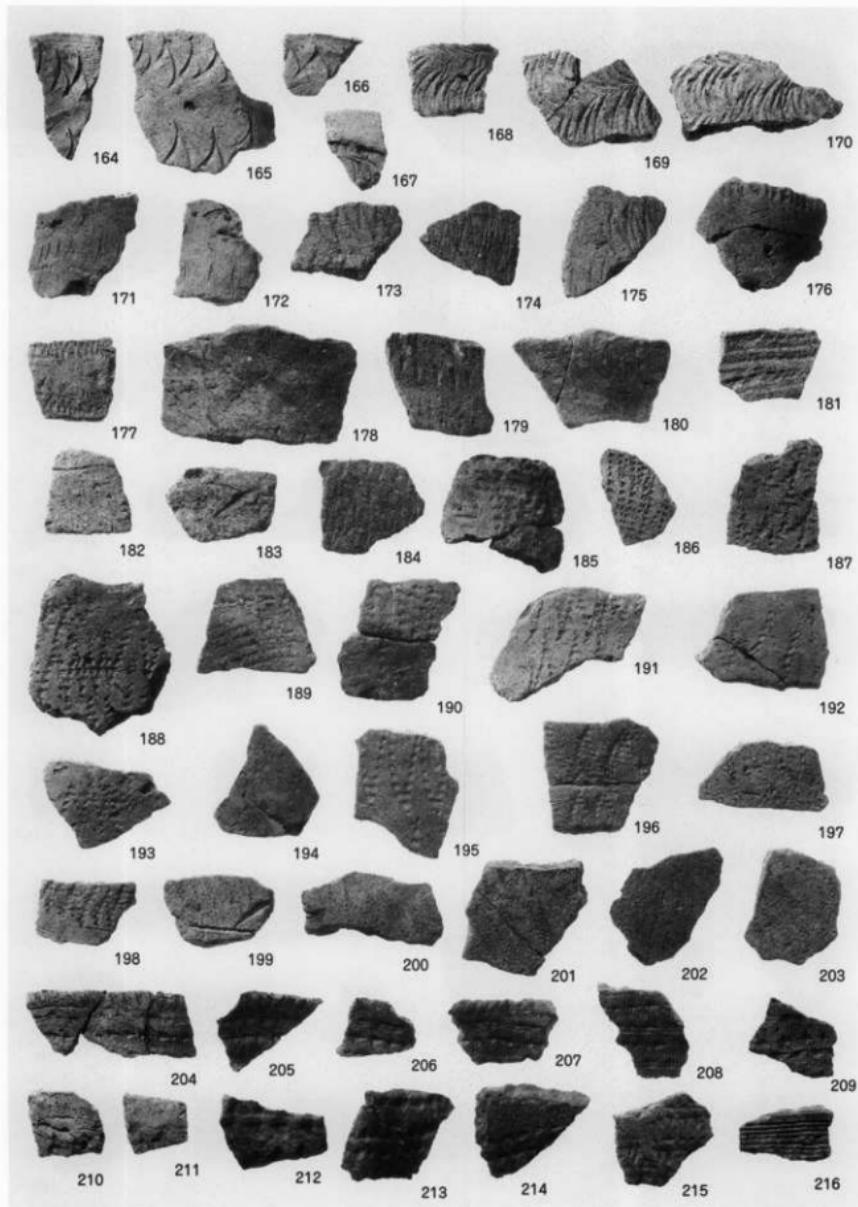
第V群土器（2）



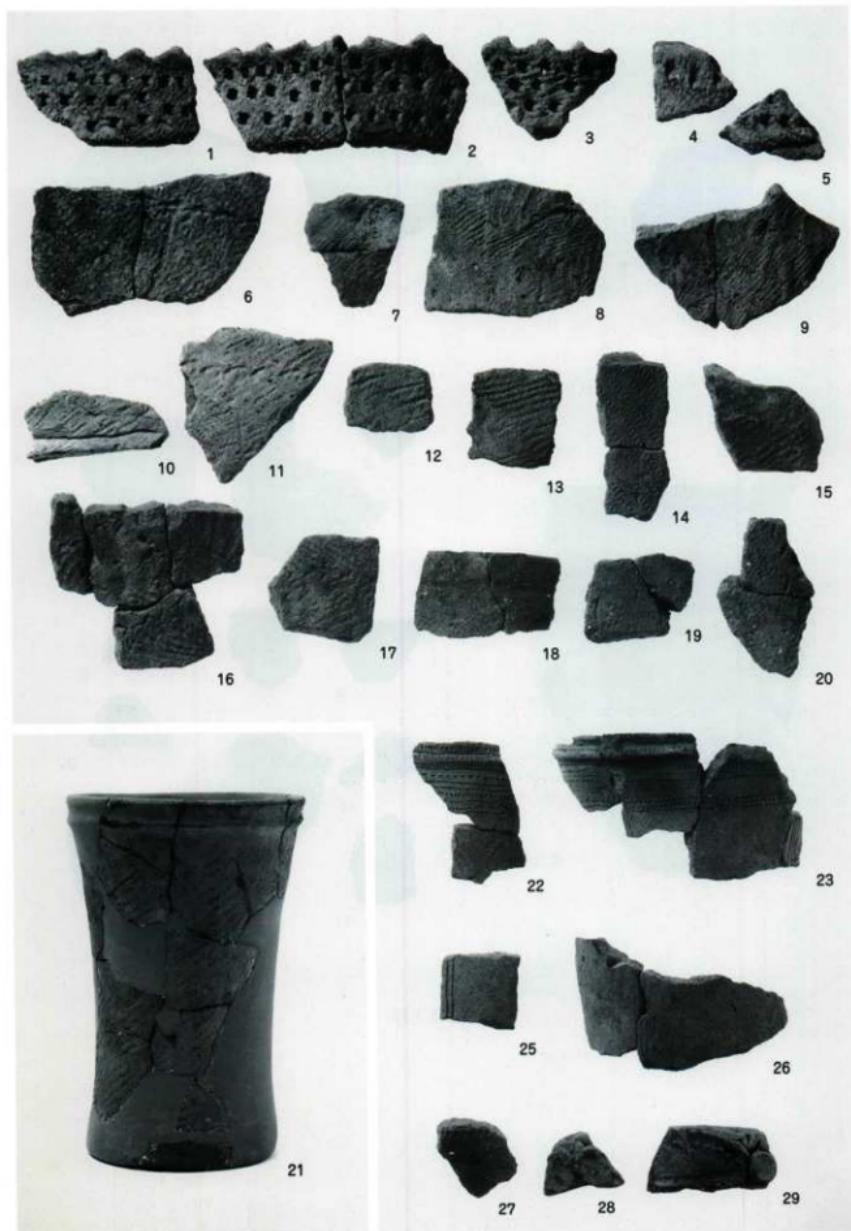
第V群土器（3）



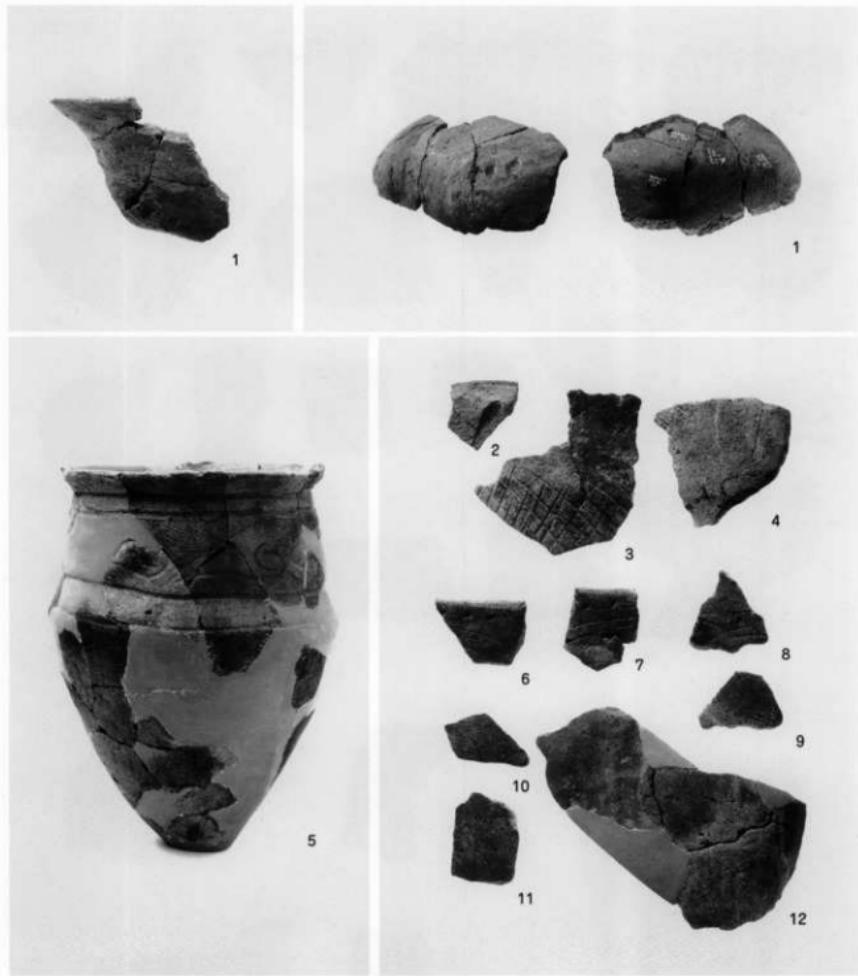
第V群土器（4）



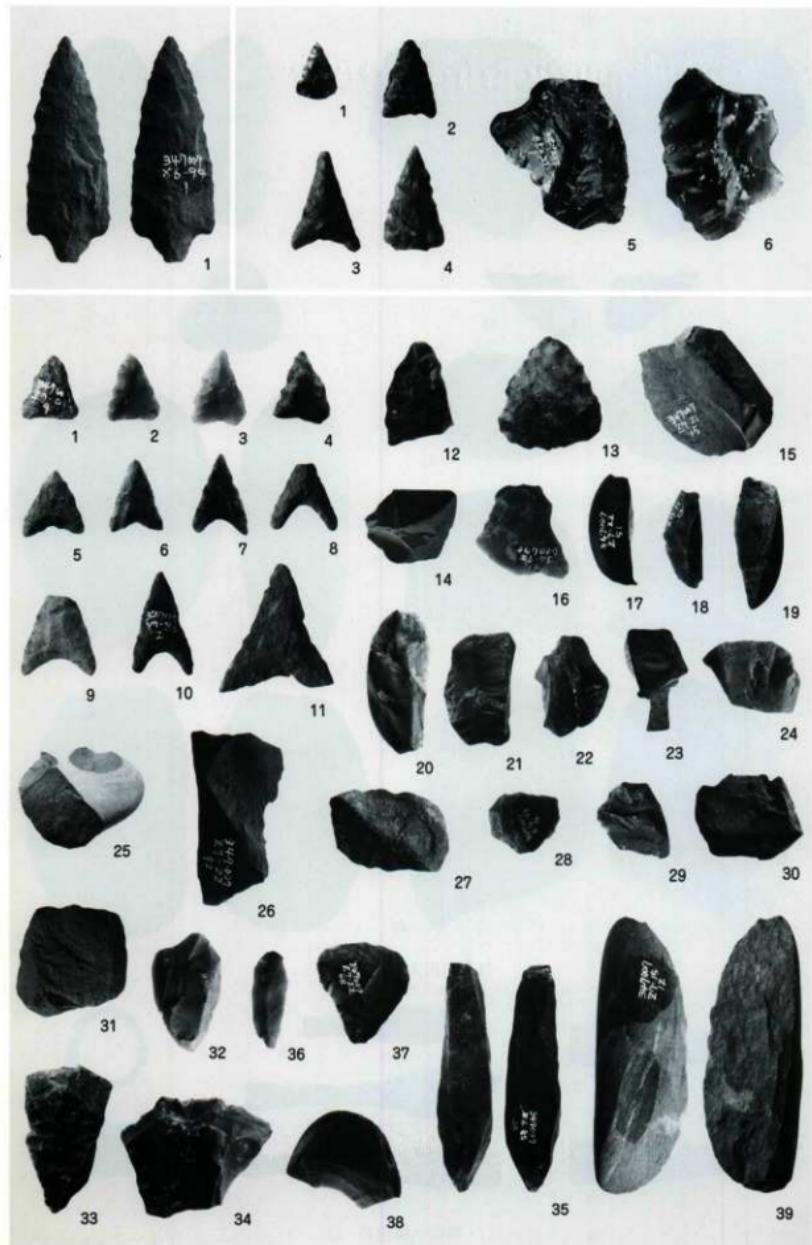
第V群土器（5）



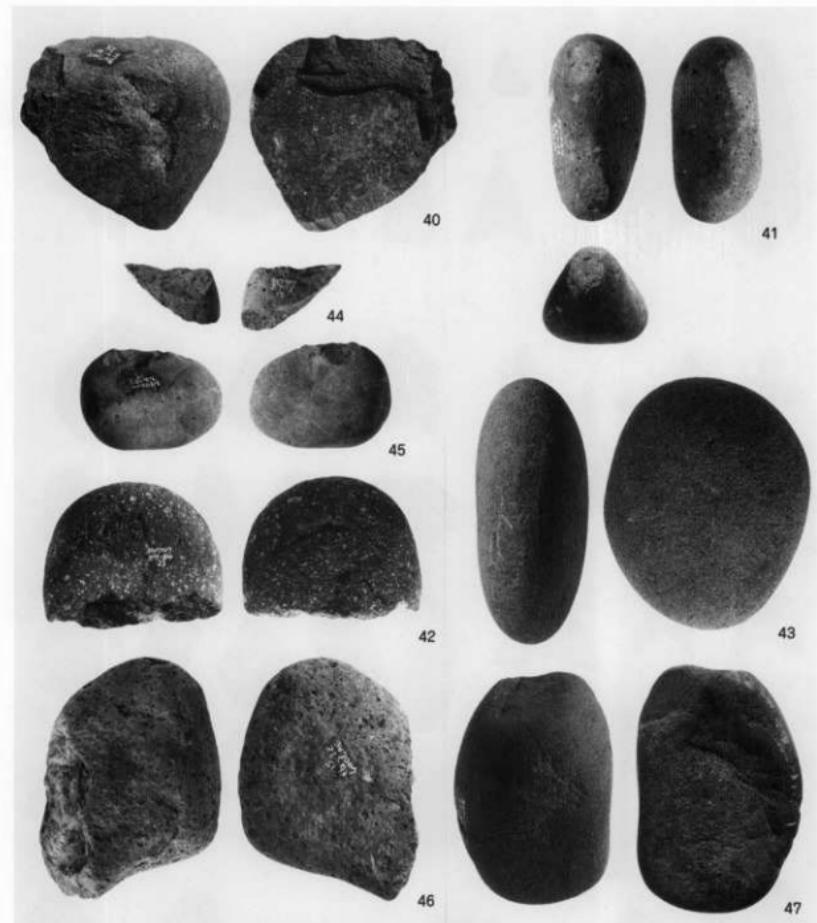
第VI群土器



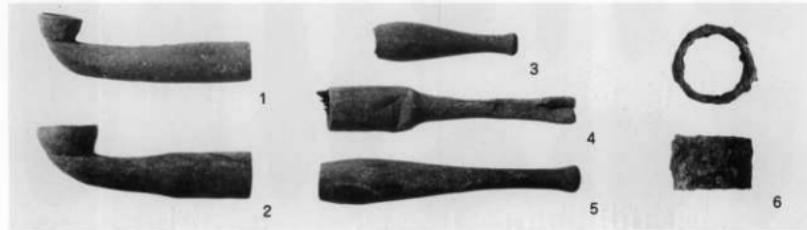
第VII群土器



包含層出土石器 (1)



包含層出土石器 (2)



## 報告書抄録

ふりがな	しんとうきょうこくきいくうこうまいぜうぶんかざいはくつちょうきほうこくしょ14						
書名	新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 XIV						
副書名	一戦田甚兵衛山西遺跡（空港No16遺跡）						
卷次	XIV						
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第404集						
編著者名	宮重行・鳴田浩司・鈴木弘幸・永塚俊司						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL043-422-8811						
発行	西暦 2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
一戦田甚兵衛山西遺跡（空港No16遺跡）	千葉県香取郡多古町一戦田字甚兵衛山454-14他	347 007	35度46分37秒	140度24分20秒	19841001～19850320 19880509～19880824	26,000m <sup>2</sup>	新東京国際空港建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
一戦田甚兵衛山西遺跡（空港No16遺跡）	包藏地	旧石器	石器集中地点 2地点	ナイフ形石器、台形様石器、有柄石刃、石刃、細石刃石核、スクレイパー	東北貝岩を用いたリダクションが顕著な石刃石器群を検出		
	縄文		竪穴 炉穴 土坑 ピット群 竪穴状遺構 石器集中地点 (疊群を含む)	8基 2基 2基 1基 1基 2地点	田戸下層式土器、田戸上層式土器、黒浜式土器、浮島式土器 他 石鑓、楔形石器、石斧、礫器、敲石、焼砾 他		
	中・近世	溝	2条	煙管			

千葉県文化財センター調査報告第404集

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 XIV

—銚田甚兵衛山西遺跡（空港No.16遺跡）—

---

平成13年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター  
発 行 新東京国際空港公団  
成田市新東京国際空港内  
(成田市木の根字神台24)  
財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2  
印 刷 株式会社 弘文社  
市川市市川南2丁目7番2号

---